
とある魔砲の転生物語

KONA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔砲の転生物語

【Nコード】

N7515T

【作者名】

KONA

【あらすじ】

とある世界でとある少年が死んだ。

彼の名前は小鳥遊 琥那、気がついたら目の前には、一人の女の子がいた、女の子は、自分は神だと名乗り、少年の死は、ミスだと語った…

お詫びに特殊能力をつけて好きな設定の世界に転生してくれるとのこと。そして、少年は、自分が好きであった二つのアニメを混合世界に転生する事を決めた

転生した少年は、いろいろ困難を待ち受けている

注意！！

超初心者なので書き方が雑になったり分がおかしくなったり、打ち間違いがあるかもしれませんが、そこは、お許しを…

とある主人公（前書き）

超初心者が書かせていただきます。誤字脱字が目立つとおもわれませんが、生暖かい目で読んでくれたら嬉しいです。

とある主人公

とある少年がいた、別に空が飛べたり、無敵並みの身体とゆうわけでもなく至って見た目は普通の高校生だ。

彼は、不登校児だ…

そこそこレベルのある進学校にせきは置いている。

原因は、いじめによるPTSD（心的外傷後ストレス障害）により学校に行く事に拒否反応をした…、頭痛、腹痛、吐き気、めまい、震え等…

今まで、何回も自殺を考えた、彼の手首は、傷だらけだ…

しかし、不登校になって初めて感じた、友達とゆう存在…、おかげで彼は、外に出ることも出来るようになり、人ごみにも音楽を聞いていたら出ていけるようになった、しかし、人と関わる事の恐怖心が若干消えてない。

いじめられてた頃は、考えられなかったくらい楽しい時間だった。そして、彼は思った、（俺は、今まで支えてくれた人に恩返ししたい）と思う用になった

彼は勉強した、流石に今の学校には通えなかった、予備校に通って勉強した

そう、彼が考えた恩返しとは今の生活を改めて立派な大人になる事だと考えた。

この時から、彼は前に進んだのだ不登校とゆう落とし穴から頑張つて這い出て前に進んだ。

しかし、頑張つて進んでいたある日の出来事だ、交差点、一人の女の子が青信号で渡っていた、そこにトラックが猛スピードで近づい

てきた、彼は走って女の子を歩道に突き飛ばした瞬間彼の視界は暗
くなつた…

とある主人公（後書き）

時間がある時に不定期に更新するのでご了承ください。

転生？（前書き）

やっと転生の時です。

誤字脱字や内容の齟齬があるかと思いますが暖かい目で見ただけなら嬉しいです。

転生？

真っ白い空間、俺はそこにいた

だが一人ではない、目の前には、女の子が泣いていた…

普通だったら不気味だ…、何もない空間で女の子が一人泣いているのだから…、だが俺は、不気味に思わず、彼女に泣き止んで欲しかった…、そう思った…。

彼女聞いた

「何でないてるんや？」

「ごめんなさい…」

「何が？」

（謝罪される覚えはないはすだが…）

「私が悪いんです…、必死に生きようとしたあなたを殺してしまっ
た…」

「どうゆう事なんや？」

「あなたは、私のミスで死んでしまったのです…、」

「……………」

（言葉が出なかった、予想はしてたが自分が死んでしまった事を初めてでしつたからだ）

「私のせいなんです…、詳しくは禁則事項なんですが…」

（禁則事項キタ　（。　。）　ッ！）

「君は、誰なんだ？、そしてここはどこなんだ？、天国か？」

「私は、あなた達でゆう神です、ここは、異世界と異世界の境界、あなた達でゆう天国の一步手前です…その私のミスであなたを殺してしまいました…」

「それで、俺は、どうすればいい？」

冷静に話始めた彼女に聞いた

「お詫びにスキルをつけて好きな世界に転生とゆうのは…」

俺は思った（ありきたりな転生キタ　（。　。）　ッ！）

「わかった、どんなスキルでもどんな世界でもいいのか？」

「大丈夫です……」

「それじゃ、先に世界は、魔法少女リリカルなのはにとある魔術の禁書目録のキャラクターと設定を混合した世界で」

「うん……スキルはどうする？、5つ程度までならどうにか……」「5つか……それじゃ」

俺は、女の子に能力を言った

1…アニメやゲームの能力を使える（表向きはスキルコピーとゆう能力）

2…肉体強化&変化

3…いろいろな知識や特技取得

4…妄想具現化

5…能力を使う力の量を無限

「わかった……でも、転生したら多少、記憶が抜けるかもしれないんだ……、それでもいい？」

「ああ、いいよ」

「わかった、また何か困った時は、出来るだけ助けるからね……」
女の子が言い終わると、地面が青く光、俺は地面に引き込まれた

転生？（後書き）

これで転生は、終了です。

次は、主人公ステータスを説明します。

ステータス（前書き）

主人公のステータス紹介です。誤字脱字や内容の齟齬があるかと思いますが暖かい目で見ただけなら嬉しいです。

ステータス

ステータス発表です。

名前：小鳥遊たかなし 琥那こな

性別：?????

身長：155センチ、身体変化にて変化可能

体重：秘密

髪色：黒

目の色：ブラウン、能力使用時、目の色が変わる場合もある

趣味：PC、自転車

能力

- 1…アニメやゲームの能力を使える
 - 2…肉体強化&変化
 - 3…いろいろな知識や特技取得
 - 4…妄想具現化
 - 5…能力を使う力の量を無限
- 1に関しては、表向きは精神感应能力の変形で能力収集とゆう能力スキルコピーとゆう事に

性格：本人は、冷たいやつと言っているが基本的には優しい

言葉使い：関西弁が混じる、時々、口調が変になる

服装：Gパン、長袖シャツ、パーカー（トレードマーク？）、スニーカー

あまり服装にこだわらない、パーカーは、だいたいフードを被っている

ステータス（後書き）

次は、ついに転生後です。

1話（前書き）

転生後の物語がやっと始まります。

誤字脱字や内容の齟齬があるかと思いますが暖かい目で見ていただけたら嬉しいです。

1話

Side: 琥那

今、空にいる…

雲は、一つない快晴だ

そんな空に俺はパラシュートもなしで落ちていた
凄いスピードで…

「これって転生そうそう死亡プラグかよっっ!!」
叫んだ

(そうだ!! 超能力で…)
試してみたが…

「なんで、使えねーんだよっっ!!」

徐々に地面が近づいてくる

(あっ、死んだ…)

と思った瞬間、頭の中におびただしい量の情報が浮かび上がりその中に能力の使い方もあったのでぶつかる寸前で念動能力を発動させシヨックは、軽減したが完全に打ち消す事は出来ず地面に激突し3m程のクレーターが出来てしまった…

「最悪だぜ…、上条さん風にゆくと、不幸だあああ!! ってか」

ゆっくり起き上がって当たりを見渡すと、そこはリリカルなのはの世界が広がっていた

「へえ、ここがリリカルなのはの世界か…」

言い終わると同時に回りに5人程のバリアジャケットを着た男槍風の風を持って囲んでいた…

「動くな！！、管理局だ、飛行禁止区域での飛行、器物破損の罪で拘束する、フードを取って手を頭の上にも上げる！！」

男達は、言うと同時に槍風の武器を向けてきた

(どうする…、顔は見られてはないようだしテレポートで逃げるか…、ついでに錬金術的な何かでクレーター消せばあまり手配も厳しくないだろ…)

俺は、手を上げた瞬間、クレーターを直し、テレポートした

Side:管理局員

管理局員1:「きつ消えた？、魔力反応は？」

管理局員2:「ありません！、落下時に出来たと思われるクレーターも消えています。」

管理局員1:「魔力反応なしに消えたという事は、テレポーターだ

！！、周辺をくまなく探せ」

他管理局員:「了解！！」

管理局員達は、解散し、搜索を始めた

管理局員1:「超能力は、一人一つだけで能力者は、魔法が使えないはず…、なのにどうやってクレーターをなおして我々の包囲から抜け出したのだ…」

S i d e : 琥那

しばらく離れたひとけの少ないビルの屋上に降り、光学操作を使い管理局に見つからないようにした

「マジ、最悪だよ…、ついた瞬間お尋ね者かよ…、とりあえず、カバンの中チェックするか」

パソコン

ケータイ

筆記用具

ペットボトルの水

財布

あと細々した物

チェックしている途中、ケータイが鳴った、開くと「神」と出ていたので電話にでる事に…

「もしもし…」

「はい、私だよ、神だよ」

「えらく、テンションたけくな…、で、どうした？」

微妙に口調がおかしい神に問いだした

「ちよっとお酒飲んで〜（笑）、あ、またまたこちらのミスで君を女の子にしちゃったから嫌だったら能力で変化でもさせて〜」

聞いた瞬間俺は、体を確認した、エラく細い…、胸が出る…マジカヨ…

「あんた飲んで大丈夫な年齢なのかよ、てか性別について言われて初めて気がついたよ…、あま嫌じゃないから能力使う時以外は、このままで…」

「それと、他にもいろいろとその世界には、バグが発生したから気をつけてね…、ちなみに証明書は、財布の中にあるから〜」

「バグってなんだよ、バグって…」

「君が選択した以外の他のアニメキャラが登場したりといろいろと異変がある…」

「まあ、それくらいなら…」

「ちなみに、この番号にかけたら私に繋がるから、困った事があつたらかけてきてね、じゃ、バイバイ」

ブチっ

プー、プー、プー、プー、プー

「切りやがった…」

電話が切れた直後、俺はこの先が急に不安になってきた、家もない、知り合いもない…

「なんか、食い物買うか…」

と、財布の中身を確認しながら、近くのコンビニに向かっている時、あるポスターを発見した

能力者&魔導士最強王者決定戦！！

優勝商品

一千万円

管理局に入局までのテスト免除（機動6課再設立の為）

と、書いてある…

（ありきたりすぎるが面白そうだな）

「よしっ、一丁やってやるか」

と、楽勝で勝てるだろうとたかをくくっていた俺だったが結構苦戦するとは、この時の俺は知るよしもなくケータイを開いて指定のホームページからエントリーをする俺だった

1話（後書き）

ちよつと短いですが、続きは次話で…

寝不足状態で書いたので文章がもっと酷くなっていますが、暖かい目で見守ってください

二話（前書き）

投稿が遅れました。

土曜日、星空に架かる橋の藤堂こより仕様の痛チャリで爆走して、

日曜日（今日）は、寝てました。

一様更新します。

いつもながら誤字脱字や内容の齟齬があるかと思いますが暖かい目で見えていただけたら嬉しいです。

二話

Side: 琥那

「能力者&魔導士最強王者決定戦！」とゆう、ありきたりな名前の大会でなんか危ない感じもするが、結構素人や子供もでていたりするので俺はみたいな初参加&地方大会等に出た事がない人は、初戦で優勝者に当たったりする事はないそうさ

ちなみに今は前回の大会記録もパソコン(ネット)で確認していた前回の優勝者は、超能力者の一方通行だったらしい、だいたいのやつが一発ノックアウトで、ネットでは、「最強」「反射力オスww」とゆうコメをよく見た

ベクトル操作を使った反射も俺は、使えるので木原神拳風に攻撃出来るはずだ

だが、一番大変なのは超能力より魔法だ、前回の一方通行も反射出来る事はできるが上手く出来なかった事もあったようなので気を付けなといけない

ま、幻想殺し使えばいい話なんだけど

他にも小さいな子供がいいところまでいって観衆を驚かした事もあったそうさ

ちなみに管理局の入局枠についてから今年からだそうさ、どうやら優秀な民間、魔導士や能力者を再び設立する機動六課に仲間として引き入れたいとの事

まあ、俺はこの能力を生かして機動六課の人達と働きたいと考えていたのでポスターをみた瞬間すぐにエントリーした

この大会に参加するには、class3以上のデバイスが必要だそうだ、一方通行は首に付けているチャージャーが補助デバイスになっているらしい。

デバイスに関しては、規定にあつていけば自作してもいいらしいので近々「神」にもらった知識を使い、デバイスの部品を買って自作するつもりだ

（ユニゾンデバイスでも作ろうかな〜ってか能力者にユニゾンとかあるのか?…、てかユニゾンデバイス作るの大変そう…、インテリジェントにするかな〜、悩むな〜）

とゆう事をひたすら考えた日曜日お昼、街を歩いていた時に数人の男性にナンパされた、それも数回、面倒になつた俺は裏路地に入り身体変化で男性の姿にし「神」にも相談し証明書も作ってもらった…
「やっぱり、こっちの方が落ち着くな〜」

見た目は、イケメンも不細工とも言えない中性な中学生…、え?、高校生じゃなかったのかつて?、何故か転生した時に中学生された…
てか、女だった時も中学生だったのだが…中学生ナンパするってあぶね〜な…

「てか、腹減つたな〜、なんか食うか」

と姿を変えた後、昼飯を食べる為、コンビニに向かい菓子パンん2つとフルーツミックスを買い、今は長い横断歩道を渡ろうとしていた

目の前には、制服を着た自分より背が低い女の子がいた

そして何も無い所で転けた…

（うわ〜ドジっ子か〜（笑））

しかし、次の瞬間トラックが猛スピードで突っ込んできた

瞬時に（助けないと！！）と考えた

正直、自分が死んだ状況とほぼ同じだったため嫌な汗がでてきたが、すぐさま、ベクトル操作を操作し女の子のもとに向かい女の子を抱きかかえ空に飛んだ

Side：???女の子

私は、今、空を飛んでいます。

転けてトラックが猛スピードで突っ込んできたと思っただけなら急に女の子に抱きかかえられ飛んだ。

地面100メートルくらいかな

そして、今いわゆるお姫様抱っこされてる

私、抱きかかえてる男の子は、私より少し年上みたい、男の子の方を見てたら優しく微笑んできた、その顔に少しドキツとしたのは内緒（笑）

Side：琥那

俺は、飛んだ

俺が笑ったら少し女の子の顔が赤くなっていたのはなんでだ？…

とりあえず、俺は、近くの公園に降りた。

俺は、女の子をベンチに座らせた

「大丈夫か？」

「うん、ありがとう」

「俺は小鳥遊琥那ってゆうんだ、君は？」

少し気を落としてるようだったのでとりあえず自己紹介してみた。

「私は、高町、高町ヴィヴィオです。」

これが、この後のストーリーの重要人物となる高町ヴィヴィオとの
出会いであった

二話（後書き）

今回はここまでです。

このような駄文読んでいただきありがとうございます。

一様、頑張って更新するつもりなのでぜひ続きもよろしくお願いします。

3話（前書き）

今回も駄文です。

キャラが崩れてるかも…

誤字脱字や内容の齟齬があるかと思いますが暖かい目で見てください。嬉しかったです。

3話

Side: 琥那

俺は、転生先で一人の女の子を助けた、名前は「高町ヴィヴィオ」

(って、マジカヨ…、こんな偶然ありえるのか…、あのヴィヴィオが俺の目の前に…！)

じつと、見つめていた俺に不思議な顔をして訪ねてきた

「どうかしたんですか？、私の顔に何かついてる？」

(やべっ、かわいいから見とれてたなんて…)

「いや〜かわいい子だな〜って思ってさ」

(って、なに言ってるんだよ)

「え？、かわいいだなんて…」

顔を赤らめてもじもじするヴィヴィオ

(あかん、マジかわいいっす、全国のヴィヴィオファンの皆さん、俺凄く幸せですww)

と考えてた時に

お腹の音…「グ〜ウ〜」

ヴィヴィオがもつと顔を赤くした

「あつ、これ食べる？」

俺は、持っていた菓子パンを渡した。

「悪いですよ、これあなたのお昼ご飯ですよね？」

驚いた顔をして菓子パンを買えそうとした

「いや〜、俺お腹あまりすいてないんだよね〜、だからヴィヴィオ、それ食べていいよ」

と笑いながら、勧めた

すると、ヴィヴィオの方もかえすのを諦めたか「ありがとう」「言っ
つて受け取った

そして、俺に向かって笑いながら「いただきます」と言って、パッ
クを空けて食べ始めた。

俺は「おう」とだけいいヴィヴィオが菓子パンを食べるのを横目で
見ていた

「あむっ、美味しいよ〜」

笑いながらこつちを見てくるヴィヴィオ

「そら〜、良かったな、甘い好きなのか？」

「あむっ、はい好きです、あ、二個あるので一個はあなたが…」

てこでも動かなさそうな目で見つめながらも一つのパンを渡して
きたので俺は素直に受け取り食べた

「サンキュー、あむっ、うまいな」

「あむっ、はいっ、美味しいです。」

「あむっ、あ、そのフルーツミックス飲んでいいよ」

俺は、一緒に買ってあったフルーツミックスを勧めた

「あむっ、え？、いいんですか？」

「いいよ、いいよ」

「ありがとう〜」

と、笑いながらフルーツミックスを飲むヴィヴィオ

(かわいいっす…)

こんなこんなで楽しい食事は終わった

「「ごちそうさま」」

「助けてくれて、パンもくれてありがとう」

笑顔で頭を下げてきた

「いいよ、いいよ、一人で食べるより二人で食べた方が楽しいから」

「じゃあ、お礼に今晚、私の家でご飯食べない？、私のママ、料理上手なんだよ」

いい案が浮かんだかのように手を打ち話してきた

「いや、流石に悪いだろ、それに、お礼の為に君を助けた訳でもパンをあげた訳でもないからさ」

「でも、こうゆうのは、きちんとお礼をするものとママに教えてもらったよ」

困った顔をした

(てか、見ず知らずの俺を家に招待は、マズいだろ…)

「そっそれに、ヴィヴィオのお母さんに悪いだろ…」

「うーん、じゃあ、アドレス教えてください、ママに相談してOK貰えたらメールするので」

「まあ、それなら…」

キラキラと輝かせた目に俺は負けた

俺は、アドレスを交換した。

「てか、そろそろ帰らないとヴィヴィオのママさんが怒っちゃうよ」

結構長い時間話していたので気がついたら夕方だった

「そつだね、今日は、本当にありがとう、また、連絡するから絶対に来てね、バイバイ」

「ああ、わかった、バイバイ」俺は、手を降って別れた。

S i d e : 高町ヴィヴィオ

高町ヴィヴィオです。

今日のお昼頃ね、事故にあいそうだった私を男の子が助けてくれたよ。

名前は、小鳥遊琥那ってゆうんだって

琥那君、私の事かわいって言うてくれた

それに、私の事、ヴィヴィオって呼んでくれた

でも、琥那君の前でお腹鳴っちゃった…恥ずかしいよ

パンとフルーツミックスくれたよおいしかった

それで、アドレス交換して別れたよ

でも、かわいいって言われた時とか、優しく微笑んできた時とかにドキドキしたのは、なんでだろ…

S i d e : 琥那

今、俺は一人、今日久しぶりに人と話した気がする。

やっぱり、一人は寂しいな…

一人は、慣れてると思ってたんだけどな…

「はあ」

俺は、深いため息をついた

「でも、落ち込んでいるわけにもいけないな、ま、さっさと銭湯いっていつもの寢蔵に行くか」

彼の言う寢蔵は、人気のないビルの屋上である、光学変化で見つからない用にして、寝袋で寝ている

雨風等は能力でどうにかなるしパソコンの電気も能力でどうにかなるので特に家が必要とゆうわけでもない。

銭湯から帰ってきた俺は、簡単な食事をとり寝袋で寝る事にした

そして、スヤスヤと眠りにつくのであった

3話（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

こんな駄文ですが、良かったらこれからも読んでくださいね

感想等待着ってまゝです

四話（前書き）

3000アクセス突破しました。

アクセスして読んでくれた方、本当にありがとうございます。
今回で四話目です。

誤字脱字や内容の齟齬があるかと思いますが暖かい目で見てくださいたら嬉しいです。

四話

S i d e : 琥那

朝、起きた

スズメが鳴いていた

清々しい朝だ

俺はいつも通りに訓練に向かうのであった

そして事件は起きた、ちょうど昼頃だ

広い道に緑色の宝石が浮かんとした途端、木の化け物が現れた、ポ○モンに例えたら、マダ○ボミだな」とかんがえてた矢先、化け物は暴れ出し地面を砕きコンクリートを宙に舞い上がらせた

(マジカヨ…、あんな瓦礫が当たったら一大事だ…)

と、考えながら、ポケットからコインを取り出した

次の瞬間、その瓦礫が男女の2人組の頭上に降ってこようとした、俺はレールガンを発射し瓦礫を粉々にした

「おいつ、危ないから逃げろ」俺は、まだ何が起きたのかわかっていないのかキヨロキヨロしていた2人組に忠告した

「わかった、ありがとう」

「ありがとうございます」

とお礼を言った後2人は離れていった

その間も俺は、レールガンを発射し危ない方向に舞った瓦礫を粉々にしていた。

七発くらい撃ったときには、周りには人はいず、俺と化け物の2人

だけだった

化け物は、魔法弾を打ってきたり瓦礫を飛ばしてきたりしたが、当たり前前俺には効かない。

俺は、レールガンや発火能力、原子崩し等を使い攻撃していた時

「その人、危ないから後は私たちに任せて非難しなさい」
と声がした方を見るとあの2人組がいた

S i d e : ? ? ? ? ? ? ?

通報があつた

街でロストロギアが現れて化け物になり暴走している、その化け物に対し一人の少年が能力で戦っているとのこと

(少年かあ、早くたすけないと)

彼女は高町なのは

機動六課の管理局員、通称白い悪魔なんて呼ばれちゃってるけど…、そんなに悪魔らしい事なんかしてないんだけどな…

「なのは、もうすぐ現場に付くよ」

「わかった、ありがとうフェイトちゃん」

彼女は、フェイト・T・ハラオウン、私の親友です。

「見て、なのは、あの子!!」

そこには少年がたったで化け物と戦っていたのである周囲には、ケ

「ガモいないようだ」

「すごい、でも、魔法は感じないから能力だと思っけどそれにしては種類が多い…」

「超能力なら一人一つだもんね」

「レアスキルかな…」

「ま、とにかく助けよう」

「そうだね」

「その人、危ないから後は私たちに任せて非難しなさい」

私は、少年に向かって叫んだ。

彼は、ハツとこっちを一瞬見たが、すぐに前を向きフードをかぶってしまった。

S i d e : 琥那

(やべっ、顔見られたかも…、てか、なのはとフェイトじゃん、マジカヨ…、とりあえずフードかぶっとこ…)

俺は、パーカーのフードをかぶった

今、化け物と戦っている、後ろには、なのはとフェイトがいる

なのはとフェイトも魔法で攻撃していた

損傷が多いのか化け物は、動きを遅くした、俺は、その間に演算し、手を上に上げた。

S i d e : 高町なのは

少年は、私たちが忠告しても離れようとはせず、化け物に能力をぶ

つけていた

強制で止めるのも危ないので私たちも魔法で攻撃する事にした

化け物の動きが鈍くなった時、少年は、両手を上に上げた
(なにするんだろ…)

その瞬間、少年の手に青色の火の玉が出現

「あれはなに？」

「プラズマ?…」

フェイトちゃんが不確かなのか疑問で返してきた…

S i d e : 琥那

俺は、空気を圧縮させプラズマを作っている

そして、直径二メートルほどのプラズマを化け物をぶつけた
爆風で辺りが吹っ飛ぶのを防ぐ為、爆風のベクトルを操作して防いだ
後に残ったのは、緑色の宝石と化け物が残した被害だけだ

(うわゝ、地面ゴボゴボだぜ…、終了しといてやるか…)

俺は、地面に手を着き能力で地面の割れた部分を修復した

「道路の修復はしました、ロストロギアの封印、よろしく」

俺は、右手を軽く降ってベクトル操作をして飛び、その場を後にした。

S i d e : 高町なのは

少年は、軽く手を振って、飛んでいってしまった…

少年が言ったとおり道路は綺麗に修復されていた

(本当に、どんな能力なんだろ…)

「フェイトちゃん、あの少年の身元調べれるかな？」

「ちょっと、難しいかも…」

「そう…、あゝあ、報告書になんて書けばいいんだろ…」

そう、この事を報告書に書かなければいけない…

「なのは、頑張ろ」

「うん」

後は、近くの管理局員に任せて機動六課本部に戻った

この時の私達は、この少年のあんなに早くに出会えるとは、夢にも思ってもいなかった…

四話（後書き）

これで終わりです。

こんな駄文読んでいただき本当ありがとうございました。

感想等、どしどし待ってます。

次回も楽しみに待っていてくださいね

5話（前書き）

4000アクセス突破しました。

読んでくれた方、本当にありがとうございます。

今回は、キャラの口調がおかしくなってると思われる。

寝不足で…

それに、毎度の事、誤字脱字や内容の齟齬があるかと思いますが暖かい目で見えていただけたら嬉しいです。

5話

Side:高町なのは

あのロストロギアの事件の次の日、機動六課の本部では、あの少年の事を話していました。

「あの子の能力が全くわからへんのよ」

「うん、超能力は、一人一つ、魔法は感じなかった」

はやてちゃんとフェイトちゃんが眉間にシワをよせて考えていた

「フェイトちゃん、もしかしたら、多能能力者かも…」

「え？、あの実現不可能と言われたあれ？」

「うん」

「でも、一人が複数の能力を使うのは演算がついていかへんのとちやうかな？」

「……」

はやてちゃんの見解に私達は言う言葉をなくした

「あ、バンク等に似たような能力はなかったのかな？」

「一人だけおつたよ、でも所在不明」

「どんな能力なの？」

何種類もの物質を操作していた能力は、一体何だろと思いついてみた

「能力は、精神感应能力、テレパスやな、レベルは5」

「え、でもテレパスならあの攻撃は？」

私も質問する前にフェイトちゃんが発言した

「普通のテレパスとちゃうんよ、別名、能力収集、スキルコピーって言うて近くにいる人の能力をコピーするらしいんよ」

「でも、そんなにすごい能力なら注目されてみんな知ってるんじゃないかな？」

「すごい能力なのにはかわりないんやけど、この能力者、所在不明、能力の仕組みもあまりわからへんから一種の都市伝説みたいになつてるんよ」

「所在不明か、調べるの大変だね…」
フェイトちゃんが落胆した

私は、ある事を思い出した。

「あつ、フェイトちゃん、今日、ヴィヴィオと街にお買い物に行かないと」

「あ、そうだったね…いけないいけない、はやて、ごめんだけど今日は…」

「うん、行ってらっしゃい、ヴィヴィオよろしく言っといてな」

「行ってきます」

私とフェイトちゃんは、本部を出てヴィヴィオとお買い物に向かった

Side：琥那

起きた…

日は昇っている

(やべっ、寝過ぎた…)

昨日、フルで演算をしたからだだろうか、いつもより遅く起きてしまった。

俺は、いつも通りに朝食を食べて、カバンを担いで能力のトレーニ

ングに向かった。

ちなみに、トレーニング以外も練習している、中国拳法とか…

一回、ウイスキーを飲んで「酔拳」とかやってみたが、すぐに無理だと確信した

ちなみに能力の練習については、主に、レールガン、発火能力、量子変速、レポート（ムーブポイント）、ベクトル操作だ

ベクトル操作では、細胞分裂を加速させ傷を早く治したりする事を練習していたが肉体再生を使えばいいことを思い出した落胆したりしていた

S i d e : ヴィヴィオ

今私は、なのはママとフェイトママと一緒に買い物に来てその帰り道です、ママ達は、時々何か考え事してるようだよ…
帰り道、歩いてる時に見たことある後ろ姿が

「あ、琥那君だ、お〜い琥那く〜ん」

S i d e : なのは

私はヴィヴィオと一緒に買い物に来て今帰り、でも、あの少年の事を考えでて、ちょっとヴィヴィオに怒られちゃった…

帰り道、ヴィヴィオが、前にいた男の子に話しかけていた、私は、その男の子と目があつた

S i d e : 琥那

後ろから呼ばれた

この世界で呼ばれる事は、まずなかったのでびっくりして振り向いたらヴィヴィオがいた

「よう、ヴィヴィオ、どした？」

「ママ達とお買い物に来てたの、その帰り」

(え、ママ達って)

俺はヴィヴィオの後ろにたっている2人と目があつた…

「っっあっ!!」「っ」

(まずい、絶対バレた…)

「ヴィヴィオ、そろそろ帰るわ…」

「え、ちょうど夕食時だから家で食べていきなよ、なのはママ、この子が前に言った助けてくれた子だよ、夕食家で一緒でもいいでしょ？」

「え？、うん、構わないけど…」

驚いたように発したがその後、何か浮かんだのか、ニコリと笑っていた

「でも、悪いだろ、今日は遠慮しとくよ」

適当な理由を付けて帰ってたしかし、その願いは届きそうになかった

「子供は、遠慮なんてしなくていいんだよ、ヴィヴィオの恩人なら大歓迎だよ、ゆっく〜り夕食でも食べながら、お・は・な・し、し

ようか
「

「はいつ…」

ノックアウトだ

あまりの気迫に断る事が出来なかった

とゆうわけで、俺は高町家にお邪魔する事となった…

5話（後書き）

今回も読んでいただきありがとうございます。

こんな駄文ですが、更新頑張つてするのでまた読んでくれたら嬉しいです。

六話（前書き）

6000アクセス突破です。

読んでくれた方ありがとうございます。

今回も誤字脱字や内容の齟齬があるかと思いますが暖かい目で見ていただけたら嬉しいです

六話

Side: 琥那

俺は今、高町家で夕飯をご馳走になっている

メニューはカレー、俺の好物だ

普段なら、（キタ　　）　　ッ！、なのはさんの手料理ウツウツウマウマ）。　　（　　）とか思っていると思うが…

ヴィヴィオから一通りの紹介はすんでいたそうだ。

「まず、ヴィヴィオを助けてくれてありがとう」

「いえいえ、僕は当然の事をしたまですよ」

一人称が「俺」から「僕」に変わっているのは極度の緊張によるものだ

「でも、琥那君、凄いなとっさにヴィヴィオを抱えて空を飛ぶなんて、どんな能力なの？」

なのはさん目が怖い…

ヴィヴィオも空気を読んでか始めは話していたのに今は、食べる事に専念しているようだ

「飛行系の能力ですよ」

「へ、そんなんだ…」

目が怖い…

『何で、嘘つくのかな…』

「ひいつ!!」

急に念話が入りびっくりし声をだしてしまった…

「どうしたの琥那君？」

俺の声に驚いたのか黙っていたヴィヴィオも話しかけてきた

「なんもないよ、ちょっと思い出したんだよ、俺の能力、テレパスなんだ」

「テレパスって人の心読んだりするあれ？」

ヴィヴィオが興味津々で聞いてきた

「まあ、そうだけど、俺のテレパスはちょっと特殊で他人の能力をコピーする別名、能力収集「スキルコピー」ってゆうんだ」

「すごい、とゆうことは沢山能力がつかえるの？」

「ああ、そうだよ」

三人がは食事を終えた時、玄関から

「ただいま」

「あつ、フェイトママだ」

ヴィヴィオは、玄関に向かって行った

「フェイトママ、おかえりー」

「ただいま、ヴィヴィオ、今日疲れた」

「お疲れ様」

「あれっ？、お客さん？」

俺の靴に気がついたのかヴィヴィオを訪ねているようだ

「あのね、前話した助けてくれた子だよ」

「あゝあの子か」

といいながらヴィヴィオに手を「早く紹介したいから早く早く」

「ちょっと、引っ張らないですよ」

とヴィヴィオが手を引っ張ってリビングに連れてきて…、俺と目があつた

「「あ!！」」

だいたい予測していたがお約束だと思い俺もびっくりした態度をとつた

「フェイトママ、琥那君の事、知ってるの?」

「え?、あ、まあね」

「ふ〜ん」

空気を読んでかヴィヴィオもこれ以上は、聞かなかつた

「あつ、ヴィヴィオ、明日から学校だからお風呂入って寝なさい」
なのはが、俺と話がしたいが為かヴィヴィオに寝るように言った

「え〜、まだ早いよ〜」

「寝坊したら大変だよ」

フェイトもなのはと同じくヴィヴィオに寝るように言った
流石にヴィヴィオも2人の微かに違う雰囲気を読み取ったのか「おやすみ」とだけ言ってしぶしぶリビングをあとにした

リビングには、なのは、フェイト、俺の三人…
2人は、俺に…

「「ちよつと、お・は・な・し・し・しよつ〜」」

(こえ〜っ)

「はいっ…」

「まず君の事教えてくれるかな？」

ヤバイ雰囲気を漂わせていたので正直に話す事にした

「俺は、小鳥遊琥那、12才」

「学校と住所を教えて」

まあ、12才とゆう年齢である俺だが野宿&学校に行っていないのである

「えっ！、え〜つとその……」

「あつ、私は、管理局、機動六課、高町なのです。」

「私は、管理局、機動六課、フェイト・T・ハラオウンです」

知らない人に話すのを戸惑っていると勘違いし自己紹介してきた…

(こりゃ、嘘ついてもバレるな…、しょうがないから本当の事話しか…)

「あの〜、実は野宿しててで学校も行っていないんですよ…」

「え？、どうして？、ご両親は？」

「親は死にました。学校は、通信教育で飛び級したので一様、高校生程度の学力があります。」

嘘は言っていない、「神」と話してこゆう設定にもらったのだ

「「えっ……」」

2人共驚いていた

「ごめんなさい…知らなくて…」

「ごめんなさい…」

なのはてフェイトは、お約束通りに謝ってきた

「いえ、そんな…」

こつゆづ風に謝ってきた時どい返せばいいかわからない…

「でも、家は？、親戚とか、施設にはいらなかったの？」

「はい、家は焼けて…、親戚はいないです、でも金と能力があったので今まで野宿で…」

「……………」

空気が重い…

無言の時間が続いたので俺は話を切り出した。

「あっ！！、こんな時間、そろそろ帰ります」

時間は、11時、結構長い間話していた

「待って！！、今日泊まっていきなさい」

「そうだよ、これからの事も、私達も助けてあげるから…」

なのはの意見と同じなのかフェイトも俺に泊まるように言ってきた

「はいつ？、いや〜流石に悪いですよ〜」

「子供は遠慮なんかしちゃだめだよ」

前にも聞いた事あるセリフをなのはが口走った

「そうだよ！！」

「そつ、それに女性だらけの家に男が泊まるなんて……………」

「私は、構わないよ」

「私も…」

「私も琥那君が泊まってくれたら嬉しいな」

三人目の声が後ろからしたので振り向くとヴィヴィオがいた…

「いつの間に!!」

流石に驚いた寝たと思つてたヴィヴィオが後ろに

(やばっ、話聞かれたかな…)
「喉が渴いたから飲み物飲みにきたら泊まっつて」と聞こえたから…」

どうやら俺の家庭環境等は聞いていなかったみたいだ…

(良かった…)

なのはとフェイトの方を見ると俺と同じ様に(良かった…)
と思つているのが見て取れた。

「とにかく、今日は泊まっつていきなさい」

「はいっ…」

てこでも動かない目に俺は、折れた…

とゆうより雰囲気を負けた…

とゆう事で俺は、その日、高町家に泊まる事になった。

六話（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

感想等、どしどし待っています。

次回も読んでくれたら嬉しいです。

7話（前書き）

総アクセス数、7000を突破しました、読んでくれた方、本当にありがとうございます

今回は、グダグダになるかと…

誤字脱字や内容の齟齬があるかと思いますが暖かい目で見ていただけたら嬉しいです。

7話

Side: 琥那

朝、起きた

「知らない天井だ……ってか？」

と自分っボケて自分で突っ込んだ

ここは高町家、昨日半分強制で泊まったのだ…

時間は、六時半

俺は勢いよく起き、服を着替え

リビングに向かった。

リビングでは、なのはが朝食の準備を始めていた

「あっ、琥那君おはよう、よく寝れた？」

こっちに気が付いたのか挨拶してきた。

「おはようございます、まあまあ寝れました。」

「そっか、良かった、あっ朝食少ししたら出来上がるから座ってて」

「なんか、手伝いましょうか？」

「あゝ、じゃあ、お皿並べて」

「了解」

俺は、テーブルに皿を並べた

しばらくしたらヴィヴィオも起きてきて

「おはよう〜なのはママ〜」

「おはようヴィヴィオ〜」

「おはよう、琥那君」
「うっす、おはよう」

挨拶を済ませ、朝食も済ませヴィヴィオは、元気よく登校した。

「さてっ、俺もそろそろ…」

「あっ、琥那君は、今から私と機動六課本部にきてもらっからっ」

「え？、マジカヨ…、何ですか？」

「そりゃ、ロストロギアの件と君のこの後について」

「はあ、わかりました。」

機動六課本部、部隊長室

「ほんで、この子がこの前、ロストロギアの件の時の超能力者の子なんやな？」

「うん、そうだよ」

「私は、機動六課部隊長の八神はやてや、よろしくな」

「小鳥遊琥那です、よろしく…」

軽く挨拶を済ませた。

俺はてつきりロストロギアの件でいろいろ「お・は・な・し」とゆ
う名の尋問を受けると思っていた

「君の事は少しは、なのはから聞いとるよ、さてっ、今後どいするかやね〜、身寄りもおらんみたいやし…」

「え?!、ロストロギアの件を聞くために呼んだんじゃ…」

「違うよあ〜、君みたいな子、結構知ってるからほっとけなくてな〜」

「俺は大丈夫ですよ、一人で大丈夫です」

「せやかて…」

「琥那君、君は、まだ子供なんだからきちんと大人が面倒みないとだめなんだよ」

「とにかく、今後どうするかや…、しばらくは、なのはの所で暮らしてもらうことになるとおもうけど」

「はっ?、何でまたなのはさんの家なんですか?、てか何で共同生活?」

「ああ、一番人数が少ないし、ヴィヴィオとも友達やと聞いたからな〜」

「うん、それがいいよ、ヴィヴィオも喜ぶよ」

「いやいや、お二人人良すぎる、見ず知らずの俺を家に泊めるだけじゃなくてしばらく共同生活って…」

「見ず知らずじゃないよ、一緒にご飯食べていっぱい話して、なおかつヴィヴィオの命の恩人なんだから、琥那君は何も気にする事はないんだよ」

なのはは、優しく微笑んできた。

「それに、君は、あの魔法と能力の大会に出るんやる？、なのはは、魔法は詳しいから教えて貰ったらええやん」

「って、なんで大会に出る事知ってるんですか?!」

「調べたら一発やよ、機動六課も関わってるし、あ、君デバイスもってへんやる？、それも作ろう」

「ちよつと、待ってください、流石に、そこまでされたらなんか裏があるんじゃないですか？」

流石におかしい、衣食住、デバイスまで提供してくれるなんて…

「裏なんかあらへんよ、まあ君には、是非機動六課に来てもらいたいと思ってるけど…」

「裏あんじゃん…」

「君は、なんか、他の能力者とは違うなにかを感じるんや、それに、大会参加する理由は賞金やあらへんで管理局「機動六課」への入局枠やろ？」

「まあ、そうですね…」

「じゃあ、大会で勝ってもらわないとな、直接こちらが手伝う訳には無理やけど訓練に参加程度なら大丈夫やから」

「はっはあ……」

(いいのか大会の主催者の一部が参加に訓練させて……)

正直、トントんびょうしで進んでいくものごとにあきれていた

「なのは、一回、フォアードの子たちと模擬戦やって貰ったらどうや？、ロストログアの時の戦いつ振りやったら大丈夫やる」

「確かに能力はきちんと使えてたから後は、実践だね……」

「え？、ちよつと、模擬戦つて……」

急に模擬戦をやる話が出てきたので驚いた

正直よつぽどへましないかぎり負ける事はないだろうと思っていた

「模擬の戦闘訓練や、とにかく、実践あるのみや〜」

「じゃあ、今日、午後からね」

「オレはまだやるとは……」

「やるよね？やんな？」

「はっはい!!」

ただ単に戦い方をみたいだけだろ……

ハア〜

「わかりました、とにかく昼までちよつと自主トレしときます」

「うん、わかった、お昼になったら戻ってきてね、逃げたらいやだよ?」

「わかったわかった、わかりました!!」

俺は機動六課本部を出てきた模擬戦に備えて自主トレする事にした

7話（後書き）

読んでくれてありがとうございます。

ちなみに、次話まで、2、3日間が空くかもしれないです。

感想等、ドシドシ待ってるのでよろしく

八話（前書き）

2日空けてすまないです。

ちよつと用事でかけませんでした。

少々少ないですが更新します。

いつもながらのグダグダや誤字脱字や内容の齟齬があるかと思いますが暖かい目で見えていただけたら嬉しいです。

あ、それと、9000アクセス突破しました。

このような駄文、読んでいただき本当にありがとうございます。

これからも更新頑張ります。

八話

模擬戦：

実践を想定しての練習の戦い

何故か、はやての意向によりフォアードと模擬戦をする事になったちなみに、あの後、はやてに相談し模擬戦の相手をするのは、スバルとティアナの二人となった。

いくら強い能力を持ってても4人相手じゃ分が悪い

今、模擬戦するにあたっての策を練っていた

（多分、スバルの攻撃は、反射でどうにかなるな…、しかし、問題は、ティアナの魔法弾による射撃だな…）

そう、物理的な攻撃や能力による攻撃は反射によって防ぐ事はできる、が、この前の戦いで魔法弾を反射した際、威力は削れたが反射しきれず当たりかけたり設定していない角度に反射したりといういろいろ不可解な現象を起こす事が判明したので対策を練っていた

幻想殺しで打ち消す事を考えたが幻想殺しを発動するとその他の能力が使えなくなり不意打ちの物理的な攻撃に対処できないので今回は、幻想殺しは使わない

なので今回は、魔法弾に当たりそうになった場合にはシールドを貼ったりこちらから攻撃し落したり、起動を反らしたりする案が最適だ…

シールドも、数発程度なら大丈夫だが連続で当てられると壊れやすくなる

（面倒だな…、正直、俺アニメの能力あまり知らないんだよ…、何

であんな能力をつけて貰ったんだろ…）
そう、俺は、アニメもそこそこ見ていたが能力まであまり覚えていない…

「不幸だあああ〜」

（とりま、スバルは反射で防御距離を取りながらレールガン、発火能力とうで攻撃、ティアナは、シールドで防御し近距離での攻撃するので大丈夫だろ〜）

ちなみに簡易デバイスを渡されて非殺傷設定で攻撃するらしい
（てゆうか能力の非殺傷設定の攻撃に反射は有効なのか？、演算を狂わす機械みたいな感じか？）

と考え、昼まで軽く能力の練習をし俺は機動六課本部まで戻ってきた
「あつ、ちゃんときたな〜、よしよし」

本部前には、はやてとなのはがいた

「そりゃ、あんなけ言われたら嫌でもきますよ…」

「にははは…」

なのはが笑って答えた

「とりあえず、練習場に行こか〜」

「そうだね…」

「はあ〜了解」

練習場に向かっているとき

「ピ〜ピ〜ピ〜ピ〜」とけたたましい音が鳴った

その瞬間、はやてとなのはの顔色が変わった

「何ですか、このうるさい音…」

「警報や、またロストロギアが現れたらしい、複数らしい」
「はやてが手元の画面をみて俺に答えた」

「マジカヨ…」

「とりあえず、今日の模擬戦は中止や」

「ごめん、鍵渡しておくから私の家に帰っておいて」

「なのはが俺に鍵を渡してきた」

「俺も行きます」

「あかん、これは私達の仕事や、あんたを危ない目に合わせる訳に
わいけへん」

「でも前の時は大丈夫でした、俺にだってロストロギアぐらい」

「あかんもんはあかん、時間ないからなのはの家に帰っというて
強い口調で言われたので、俺も反論出来なかった。

「ごめんね、琥那君、お詫びはするから、とにかく私の家に帰って
いて多分今日は、帰れないから晩ご飯は、ヴィヴィオと一緒に外で
食べておいて、ヴィヴィオには、連絡しとくから、本当にごめん」

「と言いながら二人は、走って行った、俺はロビーにぽつんと一人、
手には、なのはの家の鍵…」

「マジカヨ…」

「（てか、普通鍵なんか渡すか？、それ以前に今日帰れないって…ヴ
ィヴィオと二人とか…、おかしいだろ…）」

と考えながらなのは家に戻った

八話（後書き）

今回は、ここまでです。

キャラ口調おかしかったり等は、スルーしてください。

これからも読んでいただけたら嬉しいです。

9話（前書き）

一万アクセス突破です。

読んでくれてありがとうございます。

それと、今日から更新が二日おきくらいになるかもです。

あいていたら毎日…

今回も少なめです。

誤字脱字や内容の齟齬があるかと思いますが暖かい目で見ていただけたら嬉しいです。

9話

今、俺は、なのはさんの家にいる…

鍵を渡されてたからである

（なのはさんは人を信じ過ぎだ、もし俺がこれを狙った泥棒だったらどうすんだよ…）

と考えていた、信じられるのは嬉しいが会って二日ぐらいしか会ってない人に鍵を渡して留守番頼むのはいささか危ない気がする…

（こんなんで防犯上大丈夫なのか？、てか今頃、六課の方大丈夫かな？）

と考えながら俺はパソコンとにらめっこしている

形は、ノート型だ

この世界では、時代遅れ過ぎの見た目であるがこれはデバイス用のパーツを流用し中は、前の世界の大企業が使っている様なスパコン、数十台のスペックだ

パソコンには、ケータイも繋がっている、これもまた見た目は、時代遅れ過ぎるが中は最新に改造してある

何をしているのかと言うとデバイスを作っている、まあ作っているとゆってもこのケータイにデバイスのOSを構築している簡単にゆえば、Linuxみたいな自作OSだ

模擬戦で使う簡易デバイスは、貸してもらうのだが、やっぱり大会で使うデバイスは、自分で作りたいと思ったのでまだ大会までは、時間はあるが作り方を調べて今から自作している

一様、AIを搭載し補助型インテリジェントデバイスにするつもりだ前の世界で少しパソコンをかじっていたのであまり困ったりする事

もなかった

と、いろいろ考えながらパソコンをカタカタしていた所に

「ただいま」

ヴィヴィオが帰ってきた

「ういっす、おかえりー、今日なのはさを帰って来ないらしいよ
向こうから連絡があると一様、報告した

「うん、メール着たから知ってるよ」

「だろうな…、てか、晩飯外で食ってこいと言われたけど、ファミ
レスでいいか？」

「うん、いいよ」

「了解、時間はどつする？」

「支度したらで」

「おう、了解」

ヴィヴィオは、自分の部屋に戻っていった…

俺は 作業を一旦中止して、パソコンをカバンにしまっていた

ちょうどヴィヴィオが部屋から出てきたのでファミレスに向かって
いた

「なあ、ヴィヴィオ」

「ん、何？」

「なのはさんって「ういっす」とあるのか？」

「うん、あるよ」

「大変だな」

「別に平気だよ」

と会話して俺らはファミレスに向かった

9話（後書き）

今日は、ここまでです。

少なかったりグダグダだったり口調がおかしかったりといろいろあるかと思われませんが、そこはスルーで…

これからも読んでください

十話（前書き）

少々、遅れました。

誤字脱字や内容の齟齬があるかと思いますが暖かい目で見てください。嬉しです。

十話

今、俺は、ファミレスにいる

毎回同じような始まりで飽きたって？

しょうがないだろ俺文章力ねえんだから…

俺は、カレーライス、ヴィヴィオは、オムライスを食べていた

正直、俺はオムライスを食べた事がない、前の世界では、アレルギーで、卵、鶏肉、そば、キウイフルーツが食べれなかった。

(ミスって卵入りのアイス食べて死にかかった事があったな)

こちらの世界に来てからは身体強化等もあってアレルギーも含めて持病も綺麗さっぱり消えた

「なあ、ヴィヴィオ、それうまいか？」

「うん、美味しいよ」

「正直言うと俺オムライス食った事ないんだ、一口貰っていいか？」

「えっ、えーっと…、いいよお」

「おお、サンキュー」

俺は、スプーンでヴィヴィオのオムライスを貰い食べた

「ウマウマ」だな…」

「う、うん」

(顔を赤らめて返したがなせだろな…)

まあ、その後は、ほとんど無言になってしまった

「」「ちそつとま〜」「」

俺らは、お会計を済ませる為にレジの前にいたその瞬間

バ〜ンツ、バ〜ンツ

銃声が二発聞こえ、一人の男が立って上に銃を向けていた
「動くな!!」

他の客は、地面に伏せていた

俺がヴィヴィオを後ろに下がらせようとした時だ

「キヤー、助けて〜」

男は、ヴィヴィオの首に手をかけて銃を頭に突きつけた

「おっと、俺は、このガキに用があんだ、管理局員の娘にな」

「ヴィヴィオを離せ!!」

俺は男に少し近づいた

「はあ〜?、お前バカか?、この銃が見えねーのか?」

「何が目的だ?、金か?」

俺は近づくのを止め尋ねた

「まあ、それもあるが、俺の目的は、復讐だ!!、管理局員に昔捕
まり何年も囚人暮らした、その復讐さ」

「お前が罪を犯したからだろ」

「そんなもん関係ねえ〜よ」

「こいつを人質に金を巻き上げて、最後は、ぶっ殺してやるだよ〜
!」

「ふうん、まあ、お前がそんなくだらしない事でヴィヴィオを巻き込むんだつたら、まずそのふざけた幻想をぶち殺す!!」
某フラグメーカーのセリフを言ってみた

「おう、やってみろ」

すると男は、手錠でヴィヴィオを拘束して、銃を構えて撃った
「バーンっ」

反射!!

「効かねーよ」

撃った直撃、反射して相手の肩に当たった

「な、何に…、なぜ俺に…」

「残念だが、俺に銃は効かねーよ」

「この防御、反射かっ…」

肩から血を出しながら俺に話かける

「ほ〜う、よく知ってるな…」

「どっかの大会でよく似た能力みたからな…」

「そか、じゃあ、俺の能力の強さ知ってるよな、じゃ、諦めろ」

「ふん、諦めねーよ、死ね!!」

男は、銃を構えて三発連続で撃ってきた

「バカだな…」

俺は、反射をしようとした…

（あいつバカだな、反射して終わりだな…、まっ、待てよ…、あいつ…）

男は、ヴィヴィオを前に立たせて身代わりをしていた

（演算は、終わっていて後は弾を受けて反射するだけだ、だが反射

するとヴィヴィオに当たる、反射角を変える事は、時間的に無理…、瞬間移動も無理、となると…)

「おっ、お前」

と俺が叫んだ瞬間、銃弾が三発まるまる俺の体に突き刺さった…

「うっ…」

「こっ 琥那君!!」

ヴィヴィオがそうさげんだ…

「はっはっは、能力に便り過ぎていたな」

「ぐはっ」

俺は血を吐き出し地面に倒れた、能力も痛みで演算が追いつかない…

「琥那君、琥那君、死じゃだめ」

ヴィヴィオが叫んでいた

「黙れ」

ヴィヴィオの頭に銃を突きつけた…

「ひい」

(ちくしよ、動け、動け、俺の体…)

「うおお」

俺は、立ち上がった

「えっ?、何で立てる、三発も受けて…」

男は、動揺している

「ブファ、俺の体は…ちつとばかり丈夫…なんだよ…、ゴホッ…、とりあえず…お前を…潰す…」

俺は、血を吐き出して答えた

「ばっ、バカだろ…、お前、そんなんで俺を倒せると？、ナメられたものだな…」

「バカは…おめーだよ…」

俺は、一歩ずつ進んだ

「だっ、ダメっ、琥那くん動いちゃ!!」

ヴィヴィオが叫んでいたようだが俺にはあまり聞こえなかった

「バカめ…、死ねっ!!」

男は、銃を構えたが

「カチャ！」

「なっ…」

「バカは…おめーだよ、銃の…段数考えろ…、六発入りで…俺を…撃った三発で最後だ…」

俺は透視能力で残り段数を見ていたのだ

「ちくしょ〜」

男は、銃を捨てナイフを構えた

「バカだ…な…」

俺は、痛みをこらえて演算した

「おっお前、その目…」

その時の俺の目は、赤と青色に変わっていた

「悪リイが、こっから先は一方通行だ。大人しく尻尾オ巻きつつ泣いて無様に元の居場所に引き返しやがれエエ！」

その瞬間、俺は、相手の懐に移動し相手の顔にベクトルパンチを食らわせた

相手は「ぐふぁ」と言い倒れた

俺は、フラフラ歩き拘束されているヴィヴィオの手錠を破壊し

「ヴィ…ヴィ…オ…、大…丈夫か！」

「わ、私は…大丈夫…、琥那くんの方…こそ…」

「多…分、大…丈夫だ…、グフア」

俺は血を吐き出してしまい少しヴィヴィオの顔色に飛んでしまった。

「えっ？」

ヴィヴィオは、顔を真っ青にしていた

「すまね…、きれい…な顔…に血、付け…ちった……………」

いい終わった直後、俺の景色が歪んで倒れた…

「琥那くん！！」

必死に呼びかけているヴィヴィオ

(やべ…、マジやべ…、痛みで演算が……………)

その瞬間、俺の意識が飛んだ…

「琥那くん、死んじゃダメ！！、琥那くん、琥那くん！！」

最後までヴィヴィオは、俺の名を呼んでいた

そして俺は、黒い空間に落ちて行った

十話（後書き）

今回は、これでも終了です。

感想等ごしごし待ってます。

11話(前書き)

アクセス数、15000突破しました。

読んでいただき、本当にありがとうございます。

引き続きこんな、駄文ですが更新頑張るので読んでいただけたら嬉しいです。

11話

Side: ヴィヴィオ

琥那君が倒れた後、すぐに救急隊が来て病院へ、私も救急車に乗って今、手術室の前:

慌ただしく、4、5人の先生や看護師さん達が入って行ったのはママには、病院の方から連絡してすぐにくるそうだ:

(琥那君は、最後まで私の心配をした:、私は何も出来なかった:、私はただ琥那君の名前を呼んで泣きじゃくる事しか出来なかった)

「あつ、ヴィヴィオ!」

Side:なのは

今、私はロストロギアの封印の最中だ

急に通信が入った

『なのは、落ち着いて聞いて』

本部で指揮をとっていたはやてちゃんからだ

「なに?、はやてちゃん」

『実は、さつき連絡があつたんやけど、ヴィヴィオと琥那君が事件に巻き込まれて、ヴィヴィオが人質にされたのを琥那君が助けてその時に銃で撃たれて意識不明の重体で病院に運ばれたらしいんよ』

「え?」

としか言えなかった、何でヴィヴィオと琥那君が事件に巻き込まれたか:、前のロストロギアの時の戦いでは、相手の攻撃を打ち返していたはずの琥那君が銃で撃たれて意識不明の重体:

『うちが現場に出るからなのはは病院に向かつてくれへん？』

「わっわかった…」

私はすぐに病院に向かい、手術室の前のイスで落ち込んでいるヴィ
ヴィオを見つけた。

「あっ、ヴィヴィオ」

「ママ！！、琥那君が…、琥那君が…」

ヴィヴィオは泣いて私の所に駆けてきた。

「泣いてたらわからないよ、何が会ったの？」

私は優しく聞いた

「グスツ…、ファミレスからでようとした時に男の人に銃を向けら
れて、グスツ…、捕まってそれを助けようとした琥那君が撃たれて
一発目は、男の人の肩に跳ね返したけど、グスツ…、後の三発の時、
私を盾にしたから跳ね返すことが出来なくて、それで琥那君は、撃
たれて…、グスツ、その後は撃たれたのに立ち上がって男の人を倒
してヴィヴィオを助けてくれた…、そして今…」

「そうだったの…」

やってわかった、なぜ撃たれたのか

「わ、私が…もつと強かったら…琥那君もこんなに…、私が…」
泣きながら、ヴィヴィオ言ってきた

「ヴィヴィオ、琥那君は、ヴィヴィオが自分が責めて欲しいと思っ
てヴィヴィオを助けたのかな？」

私が尋ねたらヴィヴィオ首を横に振って否定した

「そうだね、琥那君は純粹にヴィヴィオに助かって欲しいと思って
助けたんだよ、だから、ヴィヴィオが自分を責めたりしたら琥那君

に失礼だよ」

「うん、わかった…」

「君達、小鳥遊琥那君のご家族の方かい？」

Side: ヴィヴィオ

後ろから声が聞こえた

私が後ろを見たらカエル顔の医者が出た

「あつ、あなた冥土帰し？」

なのはママがカエル顔の医者を探ねた

「ま、そう呼ばれてるね？、たしか君は、高町なのはちゃんだね？、もしかして琥那君の関係者」

「はいっ、あの時、以来ですね…、もしかして琥那君の手術もあなたが？」

そう、なのはが11才のあの冬の事件の時に執刀したのはこのカエル顔の医者だったのだ

「今、前の手術が終わって応援行くところだよ？」

とカエル顔の医者は、手術室に入ろうとした時

「あのっ先生!!!」

と私が、言った時、先生は振り向いてきた

「琥那君を助けてあげて、できなかつたら…、私…、あなたを許さない！」

正直理不尽な発言だと自分でも思っていたがカエル顔の医者は冷静に手術室を指差し

「ここは僕の戦場だよ？、そして僕は必ず帰還してみせるね、一人でずっと戦ってきた患者をつれて、さ」

と軽く微笑みながら言うとかエル顔の医者手術室に入っただけ…

「ヴィヴィオ、あの先生は、とても優秀な先生だから大丈夫だよ、今日は遅いから玄関まで一緒に行くから、タクシーで家に帰っていなさい」

「でも、琥那君が…」

「明日、学校でしょ？私がヴィヴィオの代わりずっと、琥那君を見てるし琥那君が起きたら絶対に連絡するから、だからね」

なのはママは、優しいそうにでも悲しい目をして私に言ってきた

(そっか、なのはママもすごく心配なんだ…)

「うん、わかった」

私は、なのはママに任して家に帰った。

ある事を心に誓いながら…

11話（後書き）

今回は、これで終わりです。

感想書いてくれた方、本当にありがとうございます。

これからも更新頑張るので応援メッセージ、感想、アドバイス等、
いただけたら嬉しいです。

十二話（前書き）

アクセスが17000突破しました。

読んでくださった方、本当にありがとうございます。

あ、それと感想ありがとうございます。

内容先読みされて焦った…

書き直そうか迷いましたが、そのまま

すみません、言い訳ですが、

寝ぼけたまま書いたせいで文章がまた変に…（いつも変だが…）

誤字脱字や内容の齟齬があるかと思いますが暖かい目で見ていただけたら嬉しいです。

十二話

Side:なのは

私はずっと手術室の前で琥那君の手術が終わるのを待っている時間は、12時を過ぎようとしていた

「なのは！」

遠くから私を呼ぶ声が聞こえそちらに向いた

「フェイトちゃん……」

「なのは、琥那君の容態は？」心配そうに聞いてきた

「ヴィヴィオを守るうと結果的に能力が使えない状態にされて銃で三発撃たれたらしい……」

「えっ！！」

銃で三発も撃たれた事を聞いた途端、顔を真っ青にして落ち込んだ
「ヴィヴィオは、琥那君のおかげで無傷、さきにタクシーで家に帰ってもらった……」

「そう……」

二人言葉を話さなくなってから15分程たった時に手術室のランプが消え、琥那君が移動ベッドで出てきた……

消えて扉が開いた瞬間、なのはとフェイトは立ち上がり

「「琥那君！！」」
と叫んだ

すると一人のカエル顔の医者が近づいてき二人に話した

「今は麻酔が効いているよ？」

「琥那君は、大丈夫なんですか？」

私はおそるおそる聞いてみた

「一命は取り留めたが、なんせ三発の内、一発は心臓に当たって
いて心停止していたから脳にダメージがあるかも知れない、記憶等に
後遺症があるかもね…」

「後遺症…」

フェイトは、さらに真つ青にして、俯いていた

「まあ、記憶についての後遺症も少し治っていくとは思うよ、あそ
れと手術する前にちらつと患者の情報をみたのだけど親がいないみ
たいだが？、君が保護責任者かい？」

「いえまだです、ヴィヴィオに確認をとったら正式に手続きしよう
と思います。」

「そうかい、あの子も喜ぶだろう、それと君達は、今日の所は帰り
なさい、あの子は集中治療室に入るから今日は会えない、それに君
達、お疲れの様子だね？」

「わかりました」

私は、先生に返事をしてフェイトと二人で家に帰った

Side: ヴィヴィオ

私は家についてからずっと寝れないでいる

時間は、夜1時を回った頃だ…

ずっと考えていた

もっと強くなりたい

強くなって琥那君をみんなを守れるようになりたい

私は、ママ達が帰ってきたらきちんこの事を伝えよう決めていた

その時、ガチャ、扉が空く音がした

「あれっ？、電気がついてる、ヴィヴィオ起きてるの？」

と言いながらなのはママとフェイトママがリビングに入ってきた

「あつ、ママ、遅くまで起きててごめんなさい、ママ達に話さないといけない事があるの」

「私もあるよ、でも今日は遅いから早く寝なさい」
「なのはママが少し怒った表情で話してきた」

「なのは、ヴィヴィオだつてあんな事があつたら学校どころじゃないよ、話聞いてあげよ？」

「……、そうだね……、ヴィヴィオ、話、聞くよ」

「私もつと強くなりたい、もつと強くなつて琥那君やみんなを守りたい、だから、私にもつと魔法を教えてください」

Side：フエイト

「私にもつと魔法を教えてください」

「ヴィヴィオは真剣な眼差しで私達に話してきた」

「私は少し考えたが、すぐに答えが出た」

「なのは、早いけどあれ渡してもいいんじゃないかな？、魔法をもつと勉強する過程で必要になると思うし」

「うーん、そうだね、ヴィヴィオ、ちょっと早いけど渡すよ」

「言い切るとなのはは、立ち上がってどこかに行き白い箱を持って現れヴィヴィオに渡した」

「あけていい？」

「ヴィヴィオは、おそろおそろ聞いてきた」

「いいよ」

「開けると白いうさぎのぬいぐるみが見れた、そのぬいぐるみは、ヴィヴィオを見て片手を上げて挨拶をした」

「なにこのうさぎさん？」

「デバイスだよ、ヴィヴィオ専用の、進級した時に渡そうと思って」

ただ今渡すよ」

私は、ヴィヴィオに答えた

「その外見は、おまけで中は、普通のクリスタルタイプだよ、後できちんと名前決めてあげてね」

「うん、ありがとう、それでママ達が話したかった事は？」

「うん、その事なんだけど2つあるんだ」

Side:ヴィヴィオ

「2つあるんだ」

「なに？」

私はおそろおそろ尋ねた

「ヴィヴィオはさ、お兄ちゃんができて嬉しい？」

「うん」

私は答えた

「実はね、琥那君にはお母さんとお父さんがいないの、それに親戚や他に頼れる人がいないの、だから、私が保護責任者になってフェイトちゃんが後見人になるつまり琥那君はヴィヴィオのお兄ちゃんになるってゆう事なんだよ」

「琥那君がお兄ちゃんになってくれるの？、すごく嬉しい」

「そう、良かった」

なのはママは、優しく微笑んで話してきた

「もう一つは？」

「.....」

「ヴィヴィオ、おついて聞いてね」

なのはママが言いづらそうにしてた時にフェイトママが話し始めた

「うん」

「琥那君の事なんだけど、銃弾が三発の内の一発が心臓に当たって心臓が一時的に止まってしまったらしいの」

「えっ？、じゃあ琥那君は？」私は少し大きな声で尋ねていた

「大丈夫、一命は取り留めたから……」

「良かった……」

「でもね、長い間心臓が止まってたから脳に後遺症が残るかも知れないって……、特に記憶に……」

「記憶喪失って事？」

「うん」

「琥那君は、私の事、覚えていないの？」

私は泣きながら尋ねた

「でも、お医者さんの話によると強い刺激を与えないようにしていたら少しずつ治っていくかもしれないって……」

フェイトママの言葉もあまりのショックで聞こえていなかった

「琥那君が私の事……」

十二話（後書き）

読んでいただき本当にありがとうございます。

こんな駄文ですが、また読んでくれたら嬉しいです。

13話（前書き）

今回は、めちゃくちや駄文になってると思います。
パクリの塊かも…

理由＝言い訳

寝不足

頭痛

頭が悪い

こんな駄文でも読んでくれたら嬉しいです。

前回、感想書いてくれた方、ありがとうございました。
いろいろ参考になるなる

今回は特に誤字脱字や内容の齟齬があるかと思いますが暖かい目で
見ていただけたら嬉しいです。

13話

S i d e : 琥那

目を覚ました。

「知らない天井だ……」

白い天井、白いベッド、腕には点滴

(ここは、病院か……)

俺は、うごかしたら痛い身体を動かしナースコールを押した
数秒後、医者が来た

カエル顔の……

「カっカエル!!!」

(つて、白衣着てるから先生か……)

「ん？」

何を言ってるんだ?とでもいいたげな顔で尋ねてきた

「いえ、なんにも……、てか、ここどこですか？」

「……………、ここは病院だよ？」

「そうですか……、それより、俺……………」

(俺……、何があったんだ……)

「やっぱり、覚えてないのかい？」

「全然、覚えてないです。」

「君の名前は小鳥遊琥那、君は、女の子、確かヴィヴィオって子だったかな?を助けて体に弾丸三発をうけて意識不明の重体でかつぎ込まれて?、ここについた時に心肺停止したもんだから僕も久しぶりに冷や汗ものだったよ?、なんせ三発の内一発は、心臓に刺さっ

ていたからね？、今は事件から2日後の昼頃だよ」

「そんな事が……」

「やっぱり、長時間、心停止した時に、脳に血液が回ってなかったから記憶喪失になったみたいだね？、特に思い出を司るエピソード記憶が消えてるみたいだね？」

「記憶喪失……、戻るんでしょうか？」

俺はおそろおそろ尋ねた

「わからない、明日戻るか、一年後戻るか……」

「そうですね……」

正直、凄くシヨックだった、自分の名前を知らずに能力の使い方等が頭の中にぐるぐるしていて気分が悪い

「ちなみに、君が起きた事は、君の保護責任者の高町なのはさんと後見人のフェイト・T・ハラウンさんには、伝えたからもう少しでくると思うよ？」

「そうですね……ありがとうございます。」

「検査等は、明日やるから早かったら明後日には退院できるだろう、じゃあ僕はこれで……」

「……………」

(カエル顔の医者病室の扉を開けて出て行った時に遠くから「不幸だあああああ！」と聞こえたのは何だったんだろ……)

正直、訳がわからない、超能力の使い方、物の使い方などはわかるが、俺が助けた女の子の名前も顔も全然出てこない……

「もう、本当、不幸だ…」
先ほど、聞こえてきた声をまねしてみた…

コンコン！
ノックが聞こえてきた

「はい」

Side：ヴィヴィオ

今、私は、琥那君のお見舞いにいこうとしています。

学校から帰ってきたらなのはママとフェイトママがいて琥那君が目を覚ました事を聞いたので3人で病院に向かっていきます。

「ヴィヴィオ、一つだけ約束して欲しい事があるの」

なのはママが真剣な顔で話してきた

「なに？」

「琥那君が記憶をなくしていても酷く落ち込んだりしないでね、琥那に失礼だから…」

「うん…」

こんな感じの話をしながら病院に向かっていった。

私は、琥那君には伝えたい事が沢山ある、助けてくれた事への感謝、デバイスを持った事、強くなると決めた事、なのはママに勧められストライクアーツを始めたい事といろいろある

そうこうしているうちに病院についた

病室まではそんなにかからない

私は緊張していた記憶をなくした琥那君に会うのは怖い…

病室の前について、なのはママがノックした

「はい」

中から琥那君の声が聞こえる

私となのはママとフェイトママは、病室に入った

入った途端、琥那君は首を傾げて

「あなた達、病室間違えていませんか？」

琥那君の声は丁寧で不振そうで様子をうかがうような声だった。

まるで、顔を見たこともない赤の他人に念話で話しかけるような声

その瞬間、なのはママから聞いた事が頭の中に浮かんできた

『長い間心臓が止まってたから脳に後遺症が残るかも知れないって

…、特に記憶に…』

記憶喪失…

記憶を無くし私の事をわすれてる

私は、次に話す言葉が出てこない…

「あの、大丈夫ですか？、なんか君ものすごく辛そうですけど」

琥那君は、本当に心配している目で私を見つめていた

「大丈夫、全然大丈夫だよ、本当に…」

「……………。あの、ひよっとして。俺達って知り合いですか？」

その質問が今までの琥那君との思い出を引き出してきてすごく辛い
なのはママもフェイトママも泣きそうな目をしていた

「うん…」

私は小さくこたえて続けた

「……………琥那君、覚えてない？、私が初めて琥那君にあつた時、琥
那君は、私がトラックにひかれそうになったのを助けてくれたんだ
よ？」

「・・・俺、君を助けたの？」

「…………… 琥那君、覚えてない？、次の日ね街でなのはママとお買い物してる時たまたま出会って私の家で三人でご飯たべたんだよ？」

「・・・なのはママってだれ？」

「…………… 琥那君、覚えてない？、琥那君は私の為に銃をもった強盗と戦ってくれたんだよ？」

「・・・琥那君って、誰の名前？」

なのはママとフェイトママはもう涙目だ、もちろん私もそうだろう…私の口は、今にも止まってしまいそうだ…

「琥那君、覚えてない？」

それでも、私はこれだけは聞いておきたかった。

「ヴィヴィオは、琥那君の事が好きだったんだよ？」

「ごめん」

琥那君は、申し訳なさそうな目で発言し続けた

「ヴィヴィオって、何？、人の名前？、俺のデバイスか使い魔？」

うえ……………、私は泣きそうだった、いや泣いていたかもしれない

でも、泣いたら琥那君に失礼だ

私は、必死に笑いを作った

ポロポロで完璧な笑みとは程遠い笑いを…

Side：琥那

彼女は必死に聞いてくる、全然覚えのない…、彼女が先生から聞いた『ヴィヴィオ』とゆう子か…
すると

うえ……………

俺に彼女の声が聞こえてきた、泣いている、泣いて欲しくない、笑
って欲しい

そして俺は、自分にも彼女にも、最悪な選択をした

「なんちゃってな、引つかかったか、あつはつはーっ!!」

S i d e : ヴィヴィオ

「あつはつはーっ!!」

はえ……………

私は、わけがわからない、なのはママもフェイトママも驚いた顔を
していた

「なぐに、デバイスや使い魔って言われて感極まってんマゾ。お
前はあれか、所有者と所有物の関係に憧れてんのか、流石に俺は
魔法少女監禁逮捕エンドを迎えるつもりはないですよww」

他人に向ける視線はいつしかかわっていた

私はわけがわからない幻想？、幻聴？、幻覚？

私は次の言葉が出てこなかった

「あれ？、え？、琥那君、長い間心臓が止まってたから記憶喪失
になったんじゃない？」

なのはママが琥那君に聞いていた

「……………、なんか忘れてた方が良かったみたいな言い方ですね……」
琥那君はため息をついて

「あんたらも鈍チンだな、確かに俺は、ヴィヴィオを助ける過程で

銃三発を受けて心停止、出血多量、医者の話じや長い間心臓に血が回ってなかったから記憶喪失になっちまうはずだったってか？」

「はず、だった？」

「おうよ、だって、俺の能力は能力収集はいろんな奴の能力を収集していつでも使える能力だ、それにこの能力のベースはテレパスだ」
あ、私は思わず声を出してしまった。

「そうだ、ここミッドチルダにはいろんな能力者がいるだろう、だから肉体再生なんてもんもあんだよ、それにテレパスで自分に能力を使って自分の心を見れば一発だぜっ」

ああっ、私は、ヘナヘナと床の上に座り込んでしまった。

でも、なのはママとフェイトママは、どこか疑いの目を琥那君に向けていた

「ようは、あゝ記憶ねゝよゝ、まあ、再生しとくかゝ、とゆう感じだよ」

彼は、脳は肉体再生で治し、テレパスで自分の心に語りかけ記憶を取り戻したのだ

有り得ない、でも彼ならあってもおかしくない

「はっはっはゝ、それにしたってお前の顔ったらねーよなー、あんな顔したら、ついついいじめたくなっちゃうだろゝwwwwww」

「……って、あれ？、……あのー」

正直私はキレていた、あれだけ心配したのに…

私はプルプル震えてキレるのを我慢していた

「えっと、一つお尋ねしたいのですが、よろしいでしょうか？」

「なに？」

私は答えた

「あの、もしかして……本気で怒ってますか？」

この言葉にキレた

「バチーン」

ほっぺにビンタをいれた

「痛て〜!!」

病室に響き渡った。

「もう帰る!!」

と言って私は、病室を出る

(良かった……)

Side：琥那

(これで良かったんだ……これで……)

「琥那君、本当は覚えてないんですよ？」

部屋にいたなのは聞いてきた

「なんの事だ？、俺はきちんと覚えてるぜ」

(なっなんで…)

「何で嘘つくのかな？、そんな辛そうな顔して…」

「記憶ないんでしょう？」

フェイトが聞いてきた

(無理か…)

「うん…」

「やっぱり、私を騙そうなんて百年早いよ」
なのはが言ってきた

「本当に良かったの？」

フェイトが聞いてきた

「なんか、あの子の泣きそうな顔をみたら泣いて欲しくない笑って
いて欲しい、そう思ったんです、いやそう思えたんです、案外、覚
えてるのかもね…」

「琥那君の記憶は、長時間、血が行き渡ってなかったから、その後
遺症で消えたんだよ」

疑いの目を向けながらなのは言ってきた

「パソコンでゆうハードディスクにロックをかけた感じだよ、だか
ら君は、記憶にアクセスできない、それ以外にどこに記憶があるっ
て言うの？」

俺は、なのはさんの言葉を聞いて少し笑って

「そんなの決まってるじゃないですか」

「心に、じゃないですか？」

「そうだね…」

フェイトが優しく語りかけてきた

「うん、それはそうとむちゃした事についてとこれからの事、についてきちんと、お・は・な・し、しようか」

「あの、すごく、そのお話に嫌な予感がするんですが…、本当にもう」

「不幸だああああ!!」

13話（後書き）

今回は、ここまでです。

上条さんのパクリです…

こんな内容ですまぬ…

感想、悪い点ばかりだと自覚しているので数少ないいいところを教えてくださいな、そこを伸ばすから

図々しくてすみません…

こんな駄文ですが、更新頑張るので見てくれたら嬉しいです。

十四話（前書き）

総アクセス数が20000を突破しました。

読んでくれた方、感想書いてくれた方、本当にありがとうございます。

今回は、体調不良の為（言い訳）、無理やり感があるかと思われるかもしれませんが暖かい目で見えていただけたら嬉しいです。

十四話

S i d e : 琥那

おはなしとゆう名の拷問を受けて今は、病室で一人でなのはさん達に言われた事を考えてる。

正直、身に覚えのない事を言われてもさっぱり理解できなかったが、まとめると

俺がヴィヴィオを助ける過程で倒した男は、俺と同じテレパスだったらしい

まあ、レベル2程だったらしいので軽く人の心を読んだりする程度だったらしいが、管理局員の心を読んでヴィヴィオの事を知り犯行に及んだらしい。

俺は同じテレパスだったので心を読まれるような事はなかったらしい。

ちなみに俺のベクトルパンチで鼻が砕けたそうだ

しかし、俺はそんな事より銃弾三発受けた事にショックだった。

残ってる記憶には、能力の使い方がいろいろある、正直、『無敵じやね?』と思っていたのだが現実は、そう甘くなかった。

なのはさんに聞いた話や監視カメラの映像等をいろいろ分析した結果、俺には致命的な欠点がある。

それは、能力にたよりすぎていることだ

(そう、あの某アニメキャラみたいに……、って、某アニメキャラって誰だ?)

俺の場合は、反射に頼りすぎていてピンチになった時に体が動かず、演算もついていかず、結果的に撃たれたとの見解だそうだ

冷静に考えれば、銃弾を防ぐには、反射じゃなくても念動能力や風力使いで消せばいい、演算的にも反射よりよっぽど楽に出来るだろう(てか、前の俺、どんな格好付けなんだ?、さっさとレポート

で背後に回って行動不能にすればいい話じゃないか…)

正直、自分がびっくりだ、記憶をなくして自分の名前すら覚えてないのにもかかわらず、ヴィヴィオの泣きそうな顔を見たとき『泣いて欲しくない』と思えた事、『笑顔にしたい』と思えた事、そして（もっと、強くなりたい、そしてあの子、ヴィヴィオと俺の大切な人達を守りたい）
と思えた事だ

果たして俺の大切な人達がなのはさんやフェイトさんなのかはイマイチわからないが
どうしてこうゆう気持ちになれたのかは、前の自分にしかわからないだろう、でも俺はこう思えたのには、やっぱり特別な何かがあったと信じて『強くなる』事を決心した

次の日

え、なんか手抜きすぎって？、しょうがないだろう、俺バカなんだから…

今は、検査等が終わり病室でパソコンをいじくっている
使い方は覚えているが、何を作っていたのかわからないフォルダが2、3個

パソコンとケータイとが繋がってなにかデータの構築がされていたようなのであまりいじくるのは、気が引けた。

「コンコンー！」

ノックの音だ、病室の扉から

「はい！」

「こ、琥那君…」

ヴィヴィオだった

「お、ヴィヴィオか、どした？」

(様子が変だ…もしかして、記憶なくした事に気が付いたのか…)
「昨日は、ごめんなさい!!」

「へ?、何が？」

「昨日、怒ってぶつたりして帰っちゃったから…」

(そっちな…、あれは俺が悪かったしな…)

「なんだ、その事か…、あれは俺が悪かったよ、ちょっとふざけ過ぎた、謝るのは俺の方だ、ごめん…、だからこの話はなしで」

「わかった…、ところで何してるの？」

ヴィヴィオは、俺のパソコンを指差して聞いてきた。

「まあ、ちょっとデータの整理」

「もしかして、デバイス作ってるの？」

「デバイス？」

「ファミレスに行く時に話してくれたやつ、えーつと確か、大会で使うインテリジェントデバイスを作るとかなんとか…」

「あゝ、あれね、そうそう、そのデータを整理してるんだよ」

（俺、大会なんかに出るんだ…、って、このデータ、インテリジェントデバイスのデータか…）

「ふ〜ん、実はね、私、デバイス持つ事になったんだ〜、この子だよ、名前はクリス、セイクリッド・ハートって言っただよ」

うさぎの人形の形をしたクリスは右手をあげて挨拶してきた。

「かわいいじゃん、俺は小鳥遊琥那だ、よろしく、クリス」
クリスに挨拶した

Side: ヴィヴィオ

「実はね、私、ストライクアーツをやる事になったんだ〜」

「ストライクアーツ？」

「格闘技だよ、なのはママのお友達の方が先生になってくれて教えてもらってるの」

「格闘技ねえ〜」

琥那君は、何か考えているような感じだ

「私ね、強くなって、みんなを守りたいの」

（特に琥那君だなんて言えないよ…）

Side: 琥那

「俺もだ、俺も強い能力は持っていても能力だけで、とっさなピンチに対処出来ないんだ、だから、俺も強くなって、みんなを守りたい、格闘技か…」

（特にヴィヴィオをな、なんて言えねえよ）

「琥那君もなんだ…、格闘技がどうかしたの？」

（俺も格闘技を身につけたら、判断力や体が強くなったりするかな…、確かに能力で体を強く出来るが頑丈になる程度であまり意味ないんだよね…）

「ヴィヴィオ、俺にもその先生、紹介してくれないか？」

「えっ、いいけど…、どうしたの急に」
「ヴィヴィオは、やっぱり聞いてきた」

「俺は能力ばかりに頼りすぎているから格闘技を身につけて自分を成長させたいから…、ダメかな？」

「ううん、大丈夫だと思うよ、先生に伝えておくね」

「おう、ありがとな」

「うん、あ、それと、なのはママからこれを渡してって頼まれてたんだ…」

とヴィヴィオは、大きな封筒を俺に渡してきた

「なんだこれ…」

俺は、封筒をあけ中身をたしかめた

「ええっと、何々、St・ヒルデ魔法能力学院、中等科入学手続き？」

俺は、声にだして言った

「ええっ、St・ヒルデ魔法能力学院って言ったら私が行ってる学校だよ」

「え？、マジカヨ…、何年生？」

「後少して初等科四年生に進級だよ」

「理解した、どうやら俺は、中等科に入学するそうだし、って、何も聞いてね」

「あ、何か手紙が入っているよ」

ヴィヴィオが大きな封筒の中にあつた小さな封筒を指差してた

「ええっと、なのはさんからだ」琥那君へ、いくら学力があるって言つても君の年齢は、まだ学生だから、ヴィヴィオと同じ学校の中
等科に入学手続きしておきました、封筒の中の資料を読んでおくよ
うに、直接言いたかつただけど用事の為、お手紙でごめんね』だ
つてさ…」

「いつ試験とか受けたの？」

ヴィヴィオは尋ねてきた

「この資料によると、俺の能力のレベルはレベル5だから、試験は
免除だつて、それに管理局員である、なのはさんとフェイトさんの
推薦もあつたらしい」

「え？、琥那君、レベル5だつたの…！」

ヴィヴィオは、びっくりしたように声をだして聞いてきた

「まあな…、言つてなかつた？、なんでそんな驚いてんだ？」

「全然言つてないよ、驚くに決まつてるよ、レベル5は、ミッド
チルダで数人しかいないんだよ」

「へ、知らなかつた…、って、俺が中等科に入学したら毎日一緒に
登校できるな」

「えっ、あつ、そうだね」
ヴィヴィオは、顔を赤らめて答えた

「ま、デバイス作ったり、中等科入学、大会への出場とやる事沢山あるな」

「大変だね、あ、こんな時間、今日は帰るね」

「おう、気をつけて帰れよ」

「うん、じゃあバイバイ」
ヴィヴィオは、病室から出て行った

（学校か…）
何故か懐かしい感じと怖い感じがする…

（まあ、いいつか…、てか、寝よ…）

と、考えるのを止めスヤスヤと眠りにつくのであった。

十四話（後書き）

今回は、ここまでです。

無理やりすぎると？

本当にすみません。

まあ、こんな駄文ですが、これからも読んでくれたら嬉しいです。

アドバイス、感想等は、すごく参考になるので書いてくれたら嬉しいです。

これからも更新頑張るので応援よろしくお願いします。

15話（前書き）

はい、今回も手抜きです。

言い訳を

実は、故障していたMTB（とあるシリーズ仕様の痛チャリ）が直ったので技の練習等、乗り回していたら、体調を崩してしまったのです…

それと、いつもの文章力のなさがプラスして低クオリティな文が完成しました。

こんな文でも読んでくれたら嬉しいです。

あ、前回、感想書いてくれたからありがとうございます。
参考になりました。

今回も誤字脱字や内容の齟齬があるかと思いますが暖かい目で見ていただけたら嬉しいです。

15話

Side: 琥那

まあ、いろいろあつて今日は、入学式の日
え？、省きすぎ？

すまんが、特に目立つ事はなかったのだ
まあ強いて言うなら、退院早々、ヴィヴィオに笑顔で「お兄ちゃん
って呼ばれて出血多量で死にかけたり、前の自分が使ってたカバン
の中を見ていたらいろいろ怪しいツールが出てきたり、記憶喪失が
バレないようにする為、なのはさんにみっちりと指導されたりした
事くらいかな」

ってなわけで、仕切り直して

今日は、入学式の日

今、俺はヴィヴィオと二人で学校に向かっている。

「お兄ちゃん、早く行かないと遅刻するよ」

ヴィヴィオが少し前で止まってこちらに向かつて話してきた

(確かに入学式に遅刻するのはハズいな…)

「わかったから、お兄ちゃんって呼ばないでくれ、いろいろマズい」

俺は、少し足を速めてついていった。

「いいじゃん、なんで呼んだらいけないの？」

少し頬を膨らましながら言ってきた

「まあ、大人の事情だ」

とたわいのない会話をしていたら学校の前についていた

「ここがSt・ヒルデ魔法能力学院だよ」

「ああ、知ってる、確か初等科と中等科では棟が違ってたよな？」

「うん、だからここでお別れ、あ、今日は、ストライクアーツを教
えてもらいに先生の所に行く日だから忘れないでね、じゃあね、
帰り校門で待っててね」

「おう、わかってるよ、じゃあな」

俺は、手を降って返した

そして、俺は受付で手続きを済ましクラス分け表を見て教室に向か
った

クラスに入り座席表の席に座り他の生徒を見回していた

金髪サングラスな奴や青髪でピアスをつけた奴といろいろ怪しい奴
もいたがごく普通のクラスだと思う。

初等科から上がった奴らなのか、教室に入って『一緒だ』とか
聞こえたりする。

少ししたら私服の女の子が入ってきたので

(なんでこんな所に私服の女の子が?)

と考えていたら女の子は、教壇の上に立ち

「静かにしてください、今日からこのクラスの担任になり月詠小
萌なのです。よろしくなのですよ」

「えっ、えーーーーー」

驚きの声が教室中に響き渡った…

正直驚いた、何故なら容姿は下手し幼稚園児に見える、身長が高い

義妹一筋だにや〜、能力はレベル0の肉体再生だにや〜、一様、リ
ンカーコアはあるが能力者だから使えないにや〜」

猫みたいな口調の金髪サングラスが言い終わると、後ろから肩をた
たかれて

「よろしくだにや〜、たかやん〜」

と言われたので

（たかやんって俺の事かよ…）

「ああ、よろしく、土御門」

「ところで、本当にレベル5なのかにや〜?」

「ああ、本当だ」

「うらやましいにや〜」

とゆう会話をしていた時に

隣の席のツインテールの子が自己紹介し始めた時、自然に見入った
「アインハルト・ストラトスです、魔法は古代ベルカ式でガイザー
アーツもしています、以後よろしく」

（よろしくと言いつつ終わった時にこちらをチラッと見てきたが、何だ
っただろ…）

「かわいい子だにや〜、よろしくにや〜」

土御門がアインハルトに話しかけていたので

「土御門、さすが初対面でかわいいとか言ったらなんて返したらいい
かわからなくなるだろ〜、あ、俺はこんなバカじゃないからよろ
しく、ストラトスさん」

「バカとは酷いにや〜たかやん〜」

「アインハルトでいいです。よろしく」

「おう、じゃあ、よろしく、アインハルト」

なんか、普通に話しているようだが少し警戒しているようにも感じる
(やっぱり、レベル5だからかな…、仲良くなりたいな)
と考えていた

「実は、俺、今日からストライクアーツ始める事になったんだ、
流派は違うがその点もよろしく」
俺は、笑いながらアインハルトに話した

「そうですか、頑張ってください。」

(なんか、見下されてるような感じになったな…)

と、まあそこでアインハルトとの会話は終わり、土御門としょーも
ない話をしていた

全員の自己紹介も終わり

「はい、皆さん、自己紹介も終わったのでプリントを配った後は
解散なのですよ」

小萌先生がプリントを配るとすぐに挨拶を済まして解散となった

「なあ、たかやん、アインハルト、親睦を深める為にゲーセンかど
こかに行かないかにや〜?」
と聞いてきたので

「すまないが今日は、妹と帰るし、ちょっと用事もあるからパス」

「私も、用事の為、」遠慮させてもらいます。」

「酷いじゃ〜、酷いじゃ〜」

と泣いていた土御門を見たアインハルトが

「あの、土御門さん、泣いてますけど…」

と少し心配したように訪ねてきたが

「嘘泣きだ」

「そうですか…」

「土御門、お前には義妹がいるじゃないか」

「あ、忘れてたぜい、待っているよ、舞夏」

ていい急にかバンを持って教室から出て行った。

「なんだ、あいつ…、帰ろ…、じゃあなアインハルト」

「はい、さようなら」

俺は教室を出て校門に向かった、校門の所で少し待っていたら「琥那君」

「よう、ヴィヴィオお疲れ」「琥那君もお疲れ様」

「じゃあ、帰るか」

「うん」

と一緒に帰路についたのであった。

15話（後書き）

今回はこれで終わりです。

無理やり感

手抜き感

は、自覚しています。

すみません…

文章力ないもので…

次回も出来るだけ頑張るので読んでくれたら嬉しいです。

十六話（前書き）

今回もまた、駄文に…

ノーヴェ、コロナ、リオ登場

てか、三人の口調がよくわからん

だから、口調が変になっていると思われませう。

今回も誤字脱字や内容の齟齬があるかと思いますが暖かい目で見ていただけたら嬉しいです。

十六話

Side: 琥那

俺らは、一度家に戻り服を着替えて練習場に向かっている。

「なあ、ヴィヴィオ、先生ってどんな人？」

「うん、明るくて元気な人かな。あ、話変わるけど他にも二人、私のお友達来るから」

「おう、了解」

「それより、ノーヴェが琥那君の実力を確かめたいんだって、あ、ノーヴェってゆうのは先生の名前」

「うわ、プレッシャーかかるぜ……」

そうこうしている間に練習場に到着した、この練習場は、格闘技だけでなく魔法能力も使用可の練習場だ

練習場着くと、3人待っていた。

「ごめん、待ちちゃった？」

ヴィヴィオが3人に向かって謝っていた

「待ってないよ、言ったた兄貴ってそいつか？」

赤髪で男っぽいやつが俺の方をチラッと見て、ヴィヴィオに尋ねた
「うん、そうだよ」

「ヴィヴィオの兄の、小鳥遊琥那です、レベル5のテレパスです、よろしく」

「……えー!」「」

(レベル5ですと言われたら、当然の反応だよな…)

「あ、えっと、あたしは、ノーヴェ・ナカジマ、一樣、こいつらのコーチやってる、まあよろしく」

「私はヴィヴィオの親友コロナ・ティミルです。よろしくお願いします、お兄さん」

「私はリオ・ウエズリーです。よろしくお願いします。」

「まあ、最初は、琥那の実力を見てみようと思う、とりあえずお前から三人は自主トレだ」

ノーヴェは、三人に指示すると少し離れた所で自主トレし始めた。

「それで実力を見てみるって…」

「とりあえず、模擬戦だ」

「能力、魔法は有りですか?」

「もちろんありだが、非殺傷設定で、って、能力者が魔法は使えないだろ?、確か血管が破裂するとか…」

「いえ、一樣使えます、破裂も能力で治せば、と行っても魔法はめったに使いませんが…」

「わかった、とりあえず、デバイスを立ち上げる」

俺は、ケータイを出してロックを解除しセットアップした。

といつても、姿は変わらない

その代わりに反射と念動能力の透明な膜が体を覆っているのだ
「バリアジャケットは？」

「防御膜は、張ってるから大丈夫です。」

「それじゃ、行くぜ」

『ぜ』と言った途端、ノーヴェの右足が俺の頭の左にあった。
(やべっ)

あまりの速さに対処できず…

「キンツ!!」

ノーヴェの足が当たった瞬間反射が働いたがあの蹴りの反射なら普通なら非殺傷設定でも痛みで立っていられないくらいの威力はあるはずだが、ノーヴェは少し離れた場所にジャンプし立っていた

S i d e : ノーヴェ

勢いよく蹴りを入れたら触れた瞬間に衝撃がこちらにかえってきた、足を引いたからどうか大丈夫だったけど…

あれは何だ？、構えもド素人でスキだらけだ…

あいつの能力は、たしかテレパスだ…、催眠術の一種かな？

わかんねえ、わかるのは、あいつの能力は、危険だ…

「お前、何だ？、その防御膜」

S i d e : 琥那

「反射です。」

「まで、お前は、テレパスじゃなかったか？」

（まあ、当然の疑問だよな…）

「俺の能力はテレパスをベースにした、スキルコピーとゆう能力です、近くにいる能力者の能力を収集する能力です。他にも発電したりできません、他には……」

「わかった、もういい、何でお前は、そんな能力を持っていてあたしにストライクアーツを習いに？」

「大切な人たちを守る時、能力が使えなくなった時に対処するためです。」

「そうか…、とりま、お前の実力もわかった事だし練習はじめつか」

（えっ？、たったあれだけで…）

「あのく、あれだけで実力ってわかるものなんでしょうか？」

「まあね、お前は能力はプロだがお前自身はド素人だ」

（はつきり言われた…）

「ひでー」

「とりあえず、全員で練習すんぞ、あ、お前は反射を切つとけよ」

「わかった」

俺は、ケータイ型のデバイスを操作し反射をデバイスからロックした。

ちなみにこのデバイスはまだ、完成しておらず簡易デバイスと同じである。

「練習スタート」

と、練習はスタートした瞬間、ノーヴェの猛特訓が始まった
構え方、防ぎ方、攻撃の仕方の基本を叩き込まれていた

Side：三人

ノーヴェと琥那君の模擬戦一瞬で終わった
コロナ「凄い、ノーヴェの蹴りを微動だにせず防いだ」
ヴィヴィオ「多分、あれは動けなかつただけだと思う」
リオ「でも、ノーヴェの蹴りを防いだよ」
ヴィヴィオ「あれは、反射だとおもっ」

「「へえ」」

Side：ノーヴェ

こいつ、飲み込みが早い…
もう基本をマスターしかけてる…
「おい、琥那、お前飲み込み早いな…、これなら、直ぐに組み手出
来るくらいまで成長すると思う」

「え？、マジですか、良かった／＼／＼」

「スキ有り!!」

「ぐふお」

手が止まっていたので蹴りを一発
「痛てて、急にひでー」

「ひでー何も、これくらいよけなかったら意味ないよ、手を止めずに練習練習」

「わかったよ」

この後も猛練習があり、疲労困憊し翌日の朝、寝坊したのは、言うまでもない

十六話（後書き）

はい、今回はここまでです。

とりあえず、謝ります。

すみません…

理由

口調が変だ

もっと戦闘シーンだせよ

誤字脱字ひでー

等が上げられると思います。

すみませんです…

まあ、こんな駄文ですがまた読んでいただけたら嬉しいです…

17話（前書き）

少し体調が悪くなったので文もいつも以上に調子が悪いです。

本当にすみません…

今回は、グダグダです…

あ、前回、感想書いてくださった方、ありがとうございました
誤字脱字や内容の齟齬があるかと思いますが暖かい目で見ただ
けたら嬉しいです。

17話

Side：琥那

ノーヴェにストライクアーツを最初に教えてもらった日から数週間たったある日の出来事だ

（あゝ、今日は練習もないから放課後は土御門と青ピと三人でどこか遊びに行くか）
と考えていた

「はい、みなさん、この前の小テストの返却を始めるのですよ、点数が悪い子は残って居残りなのですよ」

次々に名前が呼ばれテストが返却される。

「たかやん、何点だったぜよ？」

「……90点……」

「えゝゝ、酷いぜよゝ、たかやんは同志だったんじゃないのかにやゝ？」

「同志になった覚えはない、てかお前は何点だったんだ？」

「20点だぜよ……」

「は？、マジカヨ……、居残りだろ……、遊べねーじゃん」

その頃、青ピは

Side：青ピ

ボクは今、テストが返却された、裏返してるのでまだ点数はみていない

（居残りなんてくらったらアニメが見られへんようになるやん〜）
そしてボクは恐る恐る答案用紙を表に向けた
そこに書いてあった数字は

15点

（ガーン）
（最悪や…、ボクのアニメライフが〜）
（まてよ…）
点数が悪い

居残り

小萌先生の個人授業！！

（キタ　　（。　。　）　　ッ！、小萌先生と放課後の教室での個人授業〜、なんてボクは幸せなんだろ〜）

Side：琥那

「おい、土御門、青ピが顔が暗いと思った次の瞬間、宝くじでも当たったかのように幸せな顔してるぜ」
「ああ、本当だぜよ、たかやん、試しに青ピの心読んでみたらにや〜」
「いや、読まなくてもわかる、どうせ、お前も同じ事考えてんだろ

「？」

「バレちゃったにや〜、小萌先生の個人授業〜」

「ちなみに言うと、他にも居残りいるとおもうから個人授業とは言わないと思うのだが…」

「あっ！！、ガーン…」

土御門の顔がどどん暗くなっていく、この話を聞いていた青ピも顔が暗いくなっていた

「よしつ、ほつとこ…、アインハルト〜、アインハルトはどうだった？小テスト」

俺は、自分の隣で必死に答案用紙を見ていたアインハルトに尋ねた

「あなたに答える必要性がありません。」

「そんな冷て〜事言うなよ〜、俺は…」

「90点ですよね？」

「な、何で知ってるんだ？」

「土御門さんと話していたのを偶然…」

「ふ〜ん、所でアインハルトは何点なんだ？」

「だから、あなたに答える必要性がありません、いい加減諦めてください。」

少し強く返してきたアインハルトであったが

「なんだよ…、冷てーな……………」

「……………92点」

「え？」

「私の点数です、これで必要以上に私に絡まないでください！！！」

と、まあ、入学式から俺に対するアインハルトの扱いが冷たい。

(なんか俺、気に障るような事、しちまったか…)

こんなこんなで学校も終わり家に帰り一人で街をぶらぶらしていた

(暇だ…)

「あいつらが本当のバカだったとは…」

あいつらとは青ピと土御門の事だ…

(ひくまうだ…、つて、あれは…、ノーヴェさんじゃないか?)

ノーヴェが一人で歩いてた

「おゝい、ノーヴェさ〜ん」

「え?、ああ、琥那か…、どした?」

「いえ、たまたま見かけたもので、今日、練習休みと聞いたのでてつきりノーヴェさんに用事でも出来たのかと」

「いゝやゝ、姉貴に体休めろ〜って言われちゃって…、それでぶらぶらしてたんだ」

「と言う事は暇なんですか?」「まあね」

「じゃあ、どつか遊び行きます?、と言っても今からだとゲーセンとかだと思えますが…」

「まあいいけど…」

と俺とノーヴェは、ゲーセン行つた。

ゲーセンでは、レースゲーム、モグラたたきやUFOキャッチャー等で遊んでいた、最後にやったパンチングマシンでは、ノーヴェが店始まっての最高得点を叩き出したりと、結構焦つた…

そして、俺らは、ゲーセンを出てまたぶらぶらしていた

「最後のパンチングマシン、ヤバいですよ」

「え？、何がだ？」

（ノーヴェは、俺がUFOキャッチャーで取った熊のぬいぐるみを両手に抱えて答えた）

「ノーヴェさんのパンチ見た瞬間周りの奴ら青ざめてましたよ」

「えっ、そうなんだ…、知らなかったな…」

「俺あんなんで反射使えない時に殴られたら骨粉碎しますよ」

「はははっ…、ところが前から思ってたんだけど、なんですってパーカーのフードかぶってんだ？」

「わからないです、なんかクセみたいで…」

「へへ、それじゃ、今みたいに暗かった誰かわからないな」

「ですね…」

俺がいい終えたその時だ

「ストライクアーツ有段者、ノーヴェ・ナカジマさんとその弟子とお見受けします」

「貴方にいくつか伺いたい事と、確かめさせて頂きたい事が」

バイザーをつけた女性が立っていた

「質問すんならバイザー外して名を名乗れ」

「失礼しました。」

女はバイザーを外して答えた

「カイザーアーツ正統、ハイディ・E・S・イングヴェルト、『霸王』を名乗らせて頂いています」

（あれっ、どこかで見たような…とりま心読んでみよ…）

「噂の通り魔か」

「否定はしません」

「伺いたいののはあなたの知己である『王』達についてです、聖王オリヴィエのクローンと冥府の炎王イクスヴェリア、貴方はその両方の所在を知っていると……………」

（聖王のクローン…、ヴィヴィオの事が…こいつはヴィヴィオを…）
頭にきた俺は

「ちょっとまで、黙って聞いてりゃ、聖王のクローンだか、炎王だか、ゴタゴタぬかしやがって、俺とノーヴェは知らねーよ、知ってんのは、一生懸命に生きている普通の女の子とその友達だ」

「あなたには関係ありません、第一、貴方は誰ですか？」

（俺の正体に気づいていない？、あ、フード被ってたからか…）

「俺か、お前が聖王のクローンだかと読んでる子の兄だ」

「そんな事はいいです、名前を聞いているのです。」

兄とゆう事に驚きながら尋ねてきた

「名前か、お前はもう知ってるだろ、アインハルト・ストラトス」

「何故、私の名前を…」

俺はフードを脱いだ

「小鳥遊琥那…」

「おい、琥那、お前、あの霸王と知り合いか？」

ノーヴェが尋ねてきた

「はい、クラスメイトです」

「何故、この姿で私だと気がついたのですか？」

「まあ、似てたのもあったがあんたの心読んだら一発でわかった。」
「そうですね…、それであなたは私をどうしようかと？」

「とりあえず、聖王だの炎王だので俺の妹にちよっかいかけるやつを排除する、どうせ、ノーヴェと戦うつもりだったんだろ？」

「あなたに用はない」

「お前がなくても俺はあんだよ、それともなにか？、ノーヴェには手だせてその弟子である俺には怖くて手を出せないってか？」

「貴方はレベル5、でも所詮、能力はテレパス、ストライクアーツも初心者…、いいでしょう軽くあしらってあげましょう。」

「それは、全力全開で能力も魔法も使っていていいって事でいいんだよなあ？」

「はい」

「それエじゃ、遠慮なくウゝ」

「まっつて琥那ー！！」

ノーヴェが口を出してきたが

「おめエーは黙ってるオ、これはオレの戦いだア」

口調と性格がおかしくなるのは、能力の副作用的な物らしい

ノーヴェは『え？』とゆう顔をして黙った

「とりまア、アインハルトさんよオ、格の違いつつもんを見せてやるぜエ、まア、安心しろ怪我しても治せるぜエ」

『パチパチッ』

言い終わるとオレはアインハルトに向かって電撃を数発、放った
それをアインハルトはいとも簡単によけた

「いいねいいねエ、最高だねエ、そこなくっちゃねえ」

Side：アインハルト

何故、電撃なんか…

（能力はテレパスのはず…嘘か…）

「残念ですウ、嘘じゃねエよ、まあ勝ったら、何故使えっか教えて
やるよオ」

心を読まれた…

でも、あいつの構えは素人同然のスキばかり
私は、高速で近づき右手で顔面に一発いれた

Side：琥那

アインハルトが高速で近づいてくるそして右手が顔面に

「反射」

『キンッ！』

と周囲に鳴り響いた。

「っっ」

左手で右腕を掴んで痛そうな顔をしていた

Side：アインハルト

何が起こきた、殴った瞬間衝撃がこちらに返ってきた、そして腕に激痛…

「おめーの攻撃は通らねーよ、リミッター効かせなかったら折れてたなア」

（なんだ、あの目は…）

その時、小鳥遊琥那の目は赤と青色に変わっていた

そして急に琥那が消えた

後ろから

「これでわかっただろお、おめーじゃオレには勝てねーよ、とりま寝ろ」

その瞬間、体中に痺れが走り気を失った

Side：琥那

気を失った瞬間、アインハルトの姿がいつもの姿に戻った

「終わったぜエ」

「彼女、大丈夫なの！」

ノーヴェエの言葉を聞いた瞬間ズキッ

頭痛が走り口調と性格が戻った

「うつ…」

「えっ」

「大丈夫です…、とりあえず、腕のケガ治してノーヴェさんの家まで運びますね…」

「えっ、あ、うん…」

俺は肉体再生を使いアインハルトのケガをきれいさっぱり治した

「やっちゃまった…すみません…、俺、能力をフルで使うと口調と性格が変わる時があるみたいで、後でアインハルトにもきちんと話して謝っておきます…」

「うん」

その後、俺はアインハルトを担ぎ、ノーヴェの家、ナカジマ家に向かうのであった

17話（後書き）

本当に本当に本当にすみません…

戦闘シーン苦手なんですよね…

それに、体調悪くて…

すみません…

スルーしてやってください…

次回は多分大丈夫だとは思いますが、更新頑張るので読んでいただけたら嬉しいです。

十八話（前書き）

まず、最初に謝ります。

すみません…

前回、誤字脱字が非常に多かったです…

今回もかも…

報告をすると

体調が非常に悪いです

風邪かと…

なので、誤字脱字、キャラ口調の違和感、ストーリーの違和感等、スルーしていただけたら嬉しいです。

本当にすみません…

十八話

Side：琥那

アインハルトと戦った次の日、今は学校にいる

ノーヴェさんに『学校に行け』と言われたので学校にきている

正直、アインハルトが起きるまでノーヴェの家でいたかったが…

やっちまった…

俺は、能力をフルで使うと、特にヴィヴィオの事になると口調が変わり性格も変わってしまう事がある

最悪だ…、女子向かって…

と自分をひたすら責めていた

そのため、授業は身に入らず、よっぽど暗いオーラを出していたのか青ピや土御門は話しかけてこなかった。

Side：アインハルト

目が覚めた…

ここは…

「よう、やっと起きたか」

よこから声が聞こえ振り向くとノーヴェ・ナカジマだった

「……………あの、ここは…？」

『コンコン』

「はい」

「おはよう、ノーヴェ、それから自称霸王イングヴァルト、本名ア

インハルト・ストラトスさんSet・ヒルデ魔法能力学院、中等科一年生」

「ごめんね、琥那君に無理やり聞いたの」

「あー、みんなおはよー、おまた、朝ご飯です」

「事情でか、色々あると思うんだけど、まず朝ごはんでもたべながら、お話聞かせてくれたらうれしいな」

その後、自己紹介された

ここは、ごはんを持ってきたノーヴェさんの姉貴のスバルさんの家、ノックして入ってきたのはスバルさんの親友で本局執務官のティアナ・ランスターさんだそうです。

そして理由を聞かれ答えた

「古きベルカのどの王よりも霸王のこの身が強くなること、それを証明できればいいだけで…」

「聖王家や冥王家に恨みがあるわけではない？」

「はい」

「そう、琥那君が凄く気にしてたから…」

「あの…、小鳥遊君は？」

私が質問したところ、ノーヴェが答えた

「あいつは学校に行って貰った、アインハルトが起きるまでずっとここにいるって言ってたが学校に行かせた。」

「あの、私を倒したの、本当に小鳥遊君なんですよね？」

「うん、本人もそう行つてた」スバルが答えてきた

「でも、いつもの小鳥遊君じゃなかった気が、それにあの目……」

「琥那は能力をフルで使うと性格や口調が変わるらしい、目の事は知らないけど、それと琥那のやつすんげー後悔と反省してたぜ、お前のケガも必死で治してたしな」

ノーヴェが答えてきた

「……………」

「あいつは妹思いなやつだから妹に被害が及ぶかもしれないと思った
らそりゃかつとなるよな……、元話と言えばお前が琥那が怒るような
事言つたりするからだろ」

「すみません……」

「とりあえず、手続き済ませて学校言つてきちんと話せよ」

「わかりました」

手続きでは、私はこっぴどく怒られ、小鳥遊君と戦つてのは、おあいことゆう形でまとまった。

手続きを済ませた私は学校に向かった。

十八話（後書き）

今回はこれでおわりです。

前回、感想書いてくれた方、ありがとうございます。

今回も酷い文だと思います、本当にすみません…

とりま、次回も頑張るので読んでいただけたら嬉しいです。

19話(前書き)

今回も誤字脱字、内容の齟齬等があるかとおもいますが温かい目で
みていただけたらうれしいです

19話

Side: 琥那

俺は、ずっとアインハルトと戦ってアインハルトを傷つけてしまった事を悔やんでいた…

見かねた土御門が

「おい、たかやん、どうしたんだぜよ？」

「なんだ…、土御門か…」

「なんだとはなんか酷いぜよ、たかやんが心配になったから聞いたんだにや…、なんかあったのかにや…？」

「なあ、土御門、例えばの話何だが、とある女の子と喧嘩してケガさせちゃった時、どう謝ればいいのかな？」

「にやにや、女の子にケガだと？、いつからSになったのかにや？」

「いや、例えばだ…」

「うん、そうだにや、よし、たかやんにはこの四枚のカードをあげるにや、ここにはたかやんが必要な行動4つがあるにや」

「これって…、lifecard………」

その時、教室の扉が空いた

アインハルトだった

やべっ、どうすんだよ俺…

とりあえず、cardを

1…逆ギレ

2…愛の告白して抱きしめる

3…走ってジャンプして土下座して謝罪

4…墮天使エロメイドでご奉仕

どうすんだよ俺…

しょうがねえ、3だ…

「ありがとよ、土御門」

「気にしなくていいにゃ〜」

俺は、アインハルトに向かって走った

そしてジャンプ

そして土下座！！

「すみませんでした！！」

Side：アインハルト

私は、手続きを済ませた後、学校に向かっていた

小鳥遊君にどう言おう…、私が原因なのに…

私は、恐る恐る教室のドアを空けた

空けた瞬間小鳥遊君と目が合った

彼は、カードみたいなのを見た後、土御門君に何か言った
その瞬間、彼は私の元に走ってきた

（大変、凄く怒ってる…）

そして急にジャンプした

跳び蹴り!!

しかし、足は向かってくる事なく彼の体は地面に沈み、土下座した

「すみませんでした!!」

え?、なんで…

「えっ、あつ、あの…」

Side:琥那

「えっ、あつ、あの…」

(ヤバい、また怒らせちゃった…)

どうすんだよ俺…

土御門からもらったカードを土下座しながらみた

1…逆ギレ

2…愛の告白して抱きしめる

4…堕天使エロメイドでご奉仕

しようかねえ、イチかバチかだ

2だ!!

俺は、立ち上がり

「あのさ、アインハルト…」

「なっなに?」

「実は、俺、お前の事が、、、好きだ!!」

そして俺はアインハルトを抱きしめた

Side：アインハルト

小鳥遊君は、走ってジャンプして土下座したかと思っただけなら急に立ち上がり、私にこっ告白してきました。

そして、ぎゅーっとされました。

「えっ、あっ、すっ好き？、って、え、ふにゃ〜、プシユ〜」私は顔が熱くなり力なく倒れた

Side：琥那

抱きしめた後

「よくやったぜたかやん〜」

「キヤー告白〜」

「キタ　（。　。）　ッ！」

と聞こえた瞬間、アインハルトは力なく倒れた…

「えっ、あっ、アインハルト、顔真っ赤だぜ…大丈夫か？」

「たかやん、保健室ぜよ、早く保健室に連れていくぜよ」

「えっ、でも…」

「手遅れになったら大変だにゃ、早く保健室に」

「わっわかった…」

俺は、アインハルトを抱え保健室に連れていった

Side：土御門

『時空を越え刻まれた〜悲しみの記憶〜』
ケータイの着信音だ

「俺だ」

「……………」

「ああ、お前に言われた通りに事は進めた」

「……………」

「ああ」

「……………」

「わかった、引き続き監視をつづける」

ビッ

「土御門〜、誰からやったんや？、真剣な感じやったみたいやけど」
青ピが聞いてきた

「いや〜知り合いがいろいろさくてにや〜」

「そうか、大変なんやな〜」

「にや〜」

19話（後書き）

感想書いてくれた方、本当にありがとうございます。
次回もがんばるのでまた読んでくれたらうれしいです

二十話（前書き）

今回は少なめです。

前回感想書いてくれた方、本当にありがとうございます。

誤字脱字や内容の齟齬があるかと思いますが暖かい目で見ただけなら嬉しいです。

二十話

Side:アインハルト

ん…、ここは…

真っ白な天井、ベッドの上、椅子には小鳥遊君が座って寝ている…

えっ…

なんで彼が…

たしか、私…、彼に…

「あの…、起きてください」

「ん…、なんだよ…、ヴィヴィオ…zzz…むにゃ…」

「アインハルトです、起きてください」

彼の体を揺すった

「はっ！！あ、大丈夫だ、起きた、うん…」

「あの、私…」

「すまん…、本当にすまん…」

「えっ、謝るのは、私の方です、あなたを怒らせる発言を多数して
しまい…」

「いや、いくら腹がたったからって何も知ろうとせずに女の子に手
を出した俺が悪い、いくらでも解決方法があったし…、だから本当
にすまん」

彼は、凄く反省しているようだった

「私は気にしてないよ、それより、教室での、あの、こっつ告白は？」

S i d e : 琥那

「こいつ告白は？」

やべっ…

「本当に、すみません…、あれは土御門に相談した時に渡されたカードに…、焦ってその通りにやっちゃってしまっ…」

「とゆうことは、あの告白は嘘だったんですか？…」

あからさまに悲しい顔をした

(泣いてほしくない、まあ、こっしたのは俺のせいだが…)

「あのさ、お前のことは好きだ」

「えっ？」

驚いた顔をする

「でも、その『好き』は、多分今はまだ友達としての『好き』なんだと思う」

泣きそうな顔してうつむいた

「ちゃんと聞いてくれ、今は『まだ』だ、お前の事もあまりわかってない部分もある…だから、俺がそのお前の事をその…、そうゆうふうな『好き』と思えるようになったらもう一度言わせてくれないか？」

俺の話を聞いて驚いような顔をしたあと明るい顔に変わった

「はい、わかりましたっ」

「いや、本当にすまない…」

「いや、私こそ、いろいろすみません、小鳥遊君…」

「おあいこでいいか？」

「はい、それでいいです。」

「あ、それと、俺の事は、『琥那』と呼んでいいよ」

「はい、わかりました、琥那君」

放課後

俺はアインハルトと二人で帰っていた

「あのさ、お前、ストライクアーツ好きだろ？、お前と戦った時さ、なんかそう思ってたんだ…、違うか？」

アインハルトは少し困った顔して

「好きとか、嫌いとか、そういう気持ちで考えた事ありません、カイザーアーツは私の存在理由の全てですから…」

「聞かせてくれないか？、カイザーアーツやお前の国の事、お前がこだわっている戦争の事、俺じゃ全然頼りにならないかもしれない…、でも知りたいんだ…」

少し考えていたが、アインハルトは話始めた

「…私は…」

そして何もかも話してくれた霸王としての記憶もろもろ…

「そうか…ありがとう」

「いえ…」

「あのさ、格闘技、一緒に練習しないか？、確かに俺は初心者、お前が聖王のクローンと言ってる俺の妹のヴィヴィオだって中級者だ、でも、一緒に練習して初めて気がつく事だっと思うんだ、ノーヴェからもアドバイス貰えるかもしれない、俺さ、ヴィヴィオやお前と一緒に強くなりたんだ、駄目か？」

俺は必死に頼み込んだ、それを感じ取ったのかアインハルトは少し考えて

「……………、わかりました」

「ありがとうな」

「いえ…」

S i d e : 土御門

教室

土御門は、帰り際に琥那のテレポートにより壁にめり込まされていた
「助けてくれにゃ〜」

二十話（後書き）

これで終わりです。

次回も頑張るので読んでいただけたら嬉しいです。

21話(前書き)

前回感想書いてくれた方、ありがとうございました。

今回も誤字脱字や内容の齟齬があるかと思いますが暖かい目で見えていただけたら嬉しいです。

21話

S i d e : 琥那

あれから数週間が過ぎた、アインハルトとヴィヴィオは、仲良く！
？なり、一緒に練習するようになっていた

正直、アインハルトには格闘技だけだと軽く負ける、能力を併用し
ないと俺には勝ち目がない

とまあ、いろいろ落ち着いた日々を送っていたある日

今、晩の8時くらい

俺は街から少し離れたところを歩いていた

まあ、能力のトレーニングだ

とは言っても、俺にはリンカーコアがあり魔法も使える

少々前にディバインバスターを使って血管が破裂した事があるが肉
体再生により簡単に治った。

記憶を失う原因となった事件の時は、肉体再生は、いちいち演算し
発動する為傷みで発動しなかったが今は、一定以上の損傷を負った
場合は、ほぼ自動で肉体再生が発動するように演算している

まあ、この様にいろいろ考えながら歩いていた

その時

「ボンッ！！」

と大きな音が鳴り、少し離れた所から煙が上がっていた…

「マジカヨ…嫌な気配しかしないんですけど…」

少し考えたが、俺は煙が上がった場所に向かい走った

その場所には、黒い服をきた奴が10人程が赤髪の長身の男性に攻撃していた…、白い修道服をきた女の子をまもりながら…

赤髪男性は、炎操り攻撃していたが、相手が多すぎ押し寄せられ気味だった

（あれは…、発火能力か？、いやあれはルーンを使っている魔法か…）

まあ、どっちに味方するかは、一発でわかった

俺は、黒い服をきた奴の一人にベクトルパンチを入れ赤髪の男性に

「助太刀するぜ」

黒い服をきた奴は

「人払いのルーンの中なぜ…」

「人払いのルーン？、なんだそれ」

と言いながら黒服を殴り飛ばしていた

能力は前回に使っていた

が、いつも変わる性格や発言が変わらない…

ガラスにうつる自分の目の色も変わらない…

（なんでだ…）

その内、黒服集団は

「こいつ強い…、今は分が悪い一度退散する！！」

といい黒服集団は消えていった

（消えたか…、てかなんで、変わらない…、能力はフルで使っていた…）

少し考えていた

「大丈夫か？」
赤髪が尋ねてきた

「いつも能力使ったら目が赤と青色に変わるはずなんだがな…」
考えていた事を口にだしていた

「え？」

「え、あ、大丈夫、そっちは大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ、助太刀ありがとう」

白い修道服を着た女の子が寄ってきた

「助けてくれてありがとうなんだよ、私は、聖王教会、ネセサリウス所属のインデックスって言うんだよ、正式名称はIndex - Librorum - Prohibitorumだよ」
自己紹介してきた

「聖王教会か…」

(聖王か…)

「あの、君の名前は？St・ヒルデ魔法能力学院の中等科一年の小鳥遊琥那っていうんだ」

「なんだと？、小鳥遊琥那と言ったか？」

赤髪の男性が驚いたような顔をし尋ねてきた

「ああ、そうゆうあんたは？」

「すまない、私は、この子と同じ、聖王教会、ネセサリウス所属、スタイル・マグヌスだ」

「ふうん、もしかして驚いたの俺の妹が理由なんじゃ？」

「まあ、大体はそつだ」

「まさか……」

俺はヴィヴィオになにか被害がおよぶのかと思ひ聞こうとした時

「安心してくれ、君の妹には、何も無い」

「ふうん」

俺が発言した時、インデックスが尋ねてきた

「さっき、目の色が変わるって言ってたけど、どういう時にかな？」

「え？、ああ、確か妹を助けた時とクラスメイトと戦った時かな……」

「妹って、聖王オリヴィエのクローンのヴィヴィオだよな？」（クローン……）

「ああ、でもあまり聖王のクローンとか言うのは嫌だな……、ヴィヴィオは、普通の女の子だから」

「ごめん……、もしかしてそのクラスメイトと戦った時ヴィヴィオさんの事考えてなかった？」

「え？、確か……そつだな……」

「確か、戦ったクラスメイトって霸王の末裔の子でしょ、一様報告は聞いている」

「ああ……、なんか関係あるのか？」

「まだ、よくわからない…、わかつたら連絡するから」

「ああ、わかつた、つて、連絡先わかんの？」

俺が尋ねるとステイルが答えてきた

「まあ、君は聖王教会では、ずいぶん有名人のようだからね、連絡先などいくらでも掴める」

「ふ〜ん、ちなみにあの黒服集団は何者だ？」

「未だにわからない、とゆいのが現状だよ、多分この子の持つ魔導書の情報が欲しいのだから…」

「禁書目録…、ああ、大体わかつた…」

（インデックスは、沢山の魔導書を記憶しているのか…）

「もしかしたら、君の妹やクラスメイトにも被害が及ぶかもしれない、なんせ古代ベルカの王のクローンと末裔……………」

「……………」

俺はステイルの発言を聞いた時に嫌な気持ちになった

（クローン？、末裔？、知らねーよ、普通の女の子なんだ…）

「おっと、すまない、嫌みを言おうとした訳ではないんだがね、君を気をつけた方がいいよ」

「ああ、わかつた」

といい、

俺らは別れた…

(あいつ、むかつく……)
と考えながら、家に帰った

Side:ステイル

(小鳥遊琥那は、あいつの報告どおりあの2人の事になると……)

「ねえ？ステイル」

「なんだい？」

「あの子がカリムが言ってた子？」

「だろうね……」

「でも、霸王の末裔の子に攻撃したって……」

「まあ、その時は、頭に血が上っていて本能すら忘れていたのだろ

……

「

「ふん」

「間違いない、小鳥遊琥那は」

「神より生まれ王を守りし能力者だ」

21話（後書き）

今回は、ここまでです。

次回も頑張るので読んでいただけたら嬉しいです。

二十二話（前書き）

今回は、ちょっと微妙な感じに…

前回感想書いてくれた方、本当ありがとうございました。

またまた今回も誤字脱字や内容の齟齬があるかと思いますが暖かい目で見えていただけたら嬉しいです。

二十二話

Side:なのは

私は今、フェイトちゃんとはやてちゃんと一緒に聖王教会にきています。

はやてちゃんからは、『行けばわかるよ』と言われ何も理由を聞かないままついてきている

そして、ある部屋の前についた「コンコン!!」

「失礼します」「」

中には、騎士カリムとクロノ君と白い修道服を着た女の子がいた
私は、挨拶を済ませ席についた

「今日、集まってもらったのは今回の機動六課再設立の本当の理由についてです」

カリムは、ゆっくり話始めた

「そろそろ、話しておいた方がいいと思ってな」

「やっぱり、今回の再設立も裏の理由があったの?」

フェイトが聞いた

「はい、今回の設立には、また私の予言者の著書に新たな気になる物が予言されたからです。」

「魔法と能力が集い交わる地、散らばる力を古き結晶に集まり、古き地の翼が蘇る

全ての動きを操る者、神より生まれ持つ王を守りし者もその力に敗れ死者達が踊り、中つ大地の法の塔、文明の街は虚しく焼け落ち

其れを先駆けに数多の海を守る法の船も砕け落ちる」

「えっ？、それって…」

「そう、管理局と管理局システムの崩壊を意味してるんや」

「でも、今の地上部隊は、能力者や魔導士も多く導入して戦力が上がったって…」

「それは表向きや、確かに魔導士や能力者は増えたけど、全体的のまとまりが悪くてあまり戦力的に上がったとは言われへん」

「だから、今回も地上で動ける部隊を作ったの？」

「そつや…」

「あの、さつきから気になってたんだけど、全ての動きを操る者、神より生まれ持つ王を守りし者って…」

「そつや、それが今日一番話したかった事や」

はやてちゃんが言い終わるとクロノ君が

「全ての動きを操る能力は、おそらく、レベル5のベクトル操作の一方通行だろ」

「一方通行って、あの前回、E・M大会の優勝者？
フェイトが尋ねていた

「そうだ、彼は触れたものの動きを操れるそうだ」

「へ〜」

「それで神より生まれ持つ王を守りし者は？」

「それについては私が話すんだよ」

白い修道服を着た女の子が発言した

「あなたは？」

「私は、インデックスって言うんだよ、正式名はIndex・Librorum・Prohibitorium」

「彼女は、十万三千冊もね魔導書を記憶していて今回の予知についても調べてもらったのです。」

カリムが説明し終えた後にインデックスが話してきた

「神より生まれ持つ王を守りし者と言うのはね、古代ベルカ時代にいた赤青の瞳を持つ能力者の事なんだよ」

「そしてその能力者の特徴は、確認できるだけで聖王、霸王を『王』を守っていた事なんだよ」

「その力は、複数の能力、魔法の他にも力を持っていたらしいんだよ」

「でもね、記録では死亡したとなっているんだよ」

「じゃあ、今回の予知の人物は？」

私が尋ねてたらはやてちゃんが答えた

「死亡したとなってるんやけど、現在一人だけほぼ同じ能力と赤青の瞳をもつ少年がいるんよ、多分、生まれ変わりみたいなき感じやと思う」

「まさか…」

「もしかして…」

私とフェイトちゃんの声が重なる

「そつや、なのはちゃんが保護責任者、フェイトちゃんが後見人となつた」

「小鳥遊琥那君や…」

二十二話（後書き）

今回はここまでです。

次回も更新頑張るので読んでいただけたら嬉しいです。

23話(前書き)

今回も少なく微妙です。

理由：体調悪い
すみません

誤字脱字や内容の齟齬があるかと思いますが暖かい目で見てください。嬉しかったです。

23話

Side:なのは

「やっぱり…」

「まあ、今回の事件の鍵となるだろう一方通行、小鳥遊琥那を管理局に入局してもらおうと思う」

「でも、クロノ君、管理局に入局って試験や訓練で時間がかかるんじゃないの？」

「そう、管理局には多数の試験、多数の訓練を終了してやっと入局できるの」

「ああ、それについては、急を要すると言っ点と能力者としても有能であると言っ点である裏技で多い試験や訓練は免除にする予定だ」

裏技で免除と聞いたフェイトちゃんが

「え！、どんな免除なの？」

「まず、かの三提督からの推薦と能力を行使した試験だ」

「三提督からの推薦!？」

驚いた確かに鍵となる子達だけどまさか三提督まで了承済みとは…

「ああ、一度会ってみたいとの事だ」

「へ」

「能力行使試験はどんな試験なの？」

「一様、模擬戦をやってもらおうと思う」

「相手は、スターズの2人に頼む予定や」

「2人を相手に？」

はやてちゃんが言った事に驚いているフェイト

「うん、あ、それとや、推薦入局する事を琥那君に言う時なんやけど、事件の鍵とかは、秘密にしといてな」

「うん、わかった」

Side: 琥那

今、俺は、また能力の練習をしている。

テレパスについてだ

テレパスとは、人の心や記憶の操作、念話、といろいろ使える。

戦う時も相手の心を読んで攻撃を防ぐ事ができる

しかし、能力や魔法が強い人は、読めなかったりする。

だからあまり攻撃には使えなかったりする

ちなみに俺の能力はまだわからない点が多い

近くにいる能力者の能力をコピーするだが、どれくらい近くとか、いくつまでコピーできるのか、オリジナルより劣化はあるのか、同時にいくつまで使えるか

まだまだ研究しがいがあるな…

23話(後書き)

今回はここまでです。

また、読んでいただけたら嬉しい

二十四話（前書き）

今回も誤字脱字や内容の齟齬があるかと思いますが暖かい目で見てください。嬉しです。

二十四話

Side: 琥那

今、俺は学校にいる

朝から土御門や青ピによつて女装させられそれで授業受けたり…

まあ、俺もノリで能力で声を女声にしたりとしていた。

青ピが鼻血を吹き出し倒れたり、土御門がくの字に折れ曲がったりと大変なようで（笑）

普段優等生を演じていたので小萌先生には凄く驚かれたが、最終的には呆れられて何も言つてこなかった…

てか、俺つてこんなノリ良かったっけか？

で、今は放課後

「なあ、たかやん〜」

「なんだ？」

「今日暇ぜよか？」

（特に用事はなかったはずだよな…）

「ちよつと待つて予定表みるから」

と俺はケータイを開いた、まあ、デバイスも兼ねているのだが随分、古いケータイやね〜」

青ピが急に現れケータイを指差しながら言つてきた

「まあ、形は古いが中身は最新式だ、デバイスも兼ねてるしな」
「それつて、ストレージデバイスぜよか？」

「いや、一応、AIは積んでるからインテリジェントデバイスだな」

「とゆう事は、なんかしゃべったりするんか？」
青ピが興味津々で聞いてきた

「まあ、一応言語機能は付いてるけど、普段は文字表示か能力で読みとってるな、なあ、ジंक」

するとケータイ型のデバイスの画面に

『Yes・my・master.』と表示された

「なんて言ってるんや？」

表示されたのにもかかわらず青ピは聞いてきた

「え？、今表示されてんじゃん、もしかしてこんな英語もわからないの？」

「わからん…、土御門もわからんよな？」

「いや、流石にわかるぜよ、はいご主人様、ぜよ…」

「こいつバカだ…、まあ、表示言語を変えておこ」

と、ケータイのボタンを押すと、画面が飛び出てきて大きく表示され、設定を変更した

「ちなみに、このデバイスどんな機能があるん？」

「まあ、代理演算、通信端末と…」

「え？、代理演算ってデバイスが能力を使うん？」

「まあ、脳を補助する形だから痛みで自分では演算できない時に自動で演算してもらった、と言ってもレベル1くらいだ」

正直ゆうとこれは嘘だ、デバイスの代理演算は複雑なものや長い時間は無理だが、肉体再生に限って使用すればレベル3〜4程度で、ちなみに自分の脳の演算とこのデバイスの演算を足しても早く演算が終わるだけでレベルがあがったりする事はない

「レベル1か…」

「流石にデバイスのAIの限界だな」

と、青ピ達と話していたら

「あ、メールだ…、何々、『話があるから早めに帰ってきてね』、だってさ…」

「母さんからかにか？」

「まあな」

「確か、小鳥遊君の親御さんって管理局の魔導士の高町なのはさんとフェイト・T・ハラオウンだったやんね？」

「まあな、義理母だが、ってなんで名前まで知ってたんだよ」

「それもごっつい美人さんとか、ええな〜」

「うらやましいにや〜、たかやん〜」

青ピと土御門がしまりのない顔をしていた

「いや、義理とは言え親だぜ…」

「じゃあ、聞けよ、今までその義理とは言えの親にドキッとした事はないのかにか？」

「まあ、綺麗だな〜と思う事はあるが…」

「ほらにや〜」

「ま、それはおいといてなんで名前まで知ってたんだよ」

「まあ、それはボクの透視能力でちょちよつと…」

「次したら壁に埋めるからね（笑）」

「はい、わかりました!!!」

よっぽど俺の目が怖かったのか敬礼し返事した

「あ、とりま帰るわ」

「バイバイにや〜、母との禁断の愛を…」

と土御門がまた変な事をいいだしたので

「あん？」

睨む

「すみませんでしたにや、さようならだにや」

「さよならやで〜」

とバカみたいな会話が終了し帰路につくのであった

二十四話（後書き）

今回はここまでです。

次回も更新頑張るので読んでいただけたら嬉しいです。

25話(前書き)

今回も誤字脱字や内容の齟齬があるかと思いますが暖かい目で見てください。嬉しです。

25話

Side: 琥那

今、学校からの帰り道だ

(なんの話だろ...)

さっき、なのはさんからのメールの内容について考えていた

(まさか、O*H*A*N*A*S*H*Iじゃないだろな...)

とゆう考えながら家に帰ってきた

「ただいま」

するとなのはさんがでてきて

「おかえりー」

「メールの通り早めに帰ってきましたよ、それで話は」

リビングに向かうまでの会話だ

リビングには、フェイトさんがいた。

そして椅子に座り話してきた

「単刀直入に言うとな、管理局に入って欲しいんだ」

「は？」

(管理局？、入る？、急すぎね？)

「なのは、もっと前置き言わないと...」

「あ、ごめん、ごめん、君の能力を管理局で生かして欲しいんだ」

なのはさんの次にフェイトさんが話してきた

「もつと言つと私達の機動六課で」

「ちよつちよつと待つてくださいよ、俺、そんな…急に…」

「うん、急で、琥那君もいろいろと大変だと思っけどお願い…」

「私からもお願いするよ」

2人が軽く頭を下げてきた

「いやいや、止めてくださいよ、別に嫌だとは言っていないんですら

俺が言い終わるとなのはさんの顔が明るくなる

「え？、じゃあ…」

Side:なのは

「嫌じゃないです、でも、学校にも行かないといけないし、それに能力は強くてもそれ以外はまだまだですし…」

(学校…、やつぱり、そう来るよね…)

「学校は大丈夫、特別召集の時だけ来てもらえれば、学校にもきちんと連絡いれるよ」

「能力もそれ以外も機動六課のいろいろな方に教えて貰えるよ」
フェイトちゃんが付け加える

「でつでも、試験受けたりといろいろ時間かかるし…」

「それも、大丈夫、私達の推薦があるから、模擬戦だけでOK」
(三提督からの推薦がある事は言えないな…)

Side: 琥那

「はい？、簡単すぎね？」

(なんか、隠してるな…、とりあえずちよこつとテレパスで…)

「あ、ちなみに私達の心を読んだら公務執行妨害になるから」

(ギクツ…)

「そつ、そんな事するはずね〜だろ〜」

「そうだよね〜、にやはは〜」

「それで、どうかな？」

フェイトさんが聞いてきた

「あんまり、特別扱いは嫌なんですが…、ちなみに階級等やランクは？」

「それも、今度の模擬戦で決める予定だよ」
「なのはさんが言い終わるとフェイトさんが」

「それに、琥那君は、ロストロギア回収、能力者の立てこもり鎮圧、聖王教会のシスターと魔導士が襲われているのを助けたりと非公式ながらも功績があるから、それ相応になると思うよ」

「まあ、最初の2つは覚ええないんですがね…」

「記憶を失う前と失う事件だからね」

「それに、きちんと給料もできるし功績をあげれば昇格もするし」

2人があまりに必死に言ってくるので俺も折れた…

「はあ、わかりました、他ならぬなのはさんとフェイトさんの頼みですから、とりあえず、模擬戦受けてみます。」

「ありがとうございます」

「ありがとうございます」

2人の顔がどんどん明るくなる

（なんか、隠してるようだけど…、まあ後々教えてくれるだろう）

とまあこんな感じで模擬戦をする事になったのであった

25話(後書き)

今回はここまでです。

次回も出来る限り頑張るので読んでいただけたら嬉しいです。

二十六話（前書き）

今回も誤字脱字や内容の齟齬があるかと思いますが暖かい目で見てください。嬉しです。

二十六話

Side：琥那

今は、模擬戦が決まった次の日、土曜日、自分の部屋

正直、俺は焦っていた戦略を考えていた

え？、何故かって？

模擬戦についてに決まってるだろ…

まあ、模擬戦が決まった、いろいろとネットで調べたり「ハッキン
グ」したが正直勝てるか微妙だ

スバルの方は格闘技で攻撃だから多分多分大丈夫だと思う

問題はティアナの方の魔法弾の反射は不完全なのでシールドを張る
しかない

もちろん二人ともテレパス対策してくるだろうし…

（そろそろ武器決めるかな…）

武器の方はたくさんある

記憶を失う前の俺がいくらか作ってデバイスの格納庫の中に入っ
ていた

ちなみに魔法具だ

試しに銃系を一発打ったら副作用で血管が破裂した

剣等だと切る時に魔力を必要とする為相手に切りかかると自分の血
管が破裂する

肉体再生ですぐ治るのであまりマイナスにはならない

能力での攻撃は

発火

発電

ベクトル操作

レポート

等で他にも能力はあるがイマイチ扱い方がわからなかった為に断念

後は、肉体変化で骨格を金属にして金属の刃をだしたりしたり…、

某映画のように…

(…って…、某映画ってなんだ…)

まあ、その金属の刃も能力で出すものだから非殺傷設定にできるし

(はあ、どうしよかな…)

と考えながら席を立ち伸びをし部屋を見渡した時

「…って、なんで俺の部屋でヴィヴィオとアインハルトが普通におやつ食ってんだよ」

ヴィヴィオとアインハルトが二人で普通におやつを食べていた

「あ、おじゃまします」

アインハルトが控えめに挨拶をしてきた

「おう、大歓迎だって、なんで俺の部屋？」

「だって、お兄ちゃんとおやつ食べたかったんだもん」

「わかったわかった、一緒に食ってやるから『お兄ちゃん』と呼ぶな」

「やった」

ヴィヴィオは、凄く嬉しそうだった

「所で何か必死に考えことをしていたようですが？」

「ああ、詳しいことは言えないが模擬戦する事になった、能力有り
の」

「模擬戦ですか、でも琥那君の能力なら楽に勝てると思います…」

「まあ、そうはいかないんだよな…、相手、なのはさんより劣るが
魔法のプロだからな」

「でも、反射があるんじゃないですか？」

「インハルトが尋ねてきた、ちなみにヴィヴィオは、俺とインハ
ルトが話してる間、おかしを食べていた。」

「魔法の反射は不完全だから…シールドで防ぐしかない、インハ
ルトならどうする？」

「魔法弾は私なら受け止めて投げ返します」

「受け止めて投げ返す？、そんなことできるのか？」

「はい、しかし、素人にはまず無理です、それよりどうして反射は
不完全なんですか？」

「反射はベクトル操作ってゆう能力の応用なんだ、観測したベクト
ルを自由に操るやつ、でも魔法は、物理法則の異なるベクトルだか
ら干渉はできても完全に操ることはできないんだよな」

「知りませんでした…、確か他にも能力を持っていましたよね？」

「いや、持つてる能力はテレパスだけだ、使える能力は沢山あるけどな〜」

「便利ですな」

「言う程便利じゃない、沢山使えてもあまり…、それより一つを極めた方が絶対にいいとおもっけどな…」

「そつでしようか…」

「まあ、俺の場合は、ひとつひとつが敵かになるからな〜、って、そろそろ時間遅いぞ」

「ああ、そつですな、そろそろ帰ります
「送るわ〜」

「え？、いいですよ、悪いですし
凄く控えめに言ってきた。

「遠慮するな」

「……はい……」

と、アインハルトを家まで送っていったのであった

Side: ヴィヴィオ

その頃ヴィヴィオは…

「.....」
寝ていた.....
Z
Z
Z
.....」

二十六話（後書き）

今回はここまでです。

また、読んでいただけたら嬉しいです。

27話(前書き)

戦闘シーン苦手や…

今回も誤字脱字や内容の齟齬があるかと思いますが暖かい目で見てください。嬉しです。

27話

S i d e : 琥那

そんなこんなで大会の日

え？、飛ばしすぎって？

しょうがない、今日までおきた事を簡単に説明するぜ

あの日から俺はノーヴェとアインハルトから格闘技をみっちり教えてもらって、魔法についてもなのはさんに教えてもらった。

なのはさんに「なぜ、魔法について聞きたいの？」と聞かれたけど副作用承知で使うと言ったら絶対に止められると思ったから相手の攻撃についていろいろ考える為に、と言う理由に

ちなみに俺が魔法を使う時に起こる副作用は、そね魔法の強さが強い程、多くの血管が破裂する事がわかった。

格闘技も今のままじゃ到底、ノーヴェにもスバルにも追いつかないが能力で反応スピードをあげたらどうにかついていけるレベルまであがった

と、まあこんな感じだ

で、今は、機動六課の訓練所に向かっている、そこには廃ビルっぽい建物が作られていた
少し離れた所に、シスター、謎の老人三人、機動六課の人たちといろいろ集まっていた。

「あの〜、なのはさん」

横にいたなのはさん話かけた

「ん？なに？」

「あの、三人の老人誰？、あれいかにも、正体隠してますみたいに見えるんですが…」

そう、その老人三人組は、帽子をかぶりサングラスをかけていた

「……………、管理局の人達だよ」

「へ〜、あの格好、魔術的な意味でもあるのかな…」

「にやはは…」

なのはさんは、笑っていた

そして、練習所に着いた時は俺、スバル、ティアナ、はやてさん、なのはさんがいた

そして、はやてさんが

「ま、いろいろ話があると思うけど模擬戦終わってからでな」

「あの〜、八神隊長、私達二人小鳥遊君の2対1で戦うんですか？
スバルが聞いた

「ごめんな〜、本当やったらもう一人来るはずやったんやけど、断られてもった、やから2対1で」

「でも、明らかな戦力差があると思います」
確かに見た目で判断したら戦力差は明らかだ

「その点は大丈夫や今回の模擬戦は、琥那君の能力を見る為の物やし勝敗は関係あらへん、それに琥那君は結構強いみたいやからスバルとティアナが負けた時用になのはを待機させとるくらいやから」

(へー、なのはさんもいるのか)
「って、俺、もしかしてなのはさんとも戦つかもしれないんですか
!」
「思わず叫んでしまった。」

「まあ、君がスバルやティアナに勝てたらな」

「マジカヨ……」

「ほんなら、早速、始めてもらおうか」

「「「はい」」」

「「Set up」」

とスバルとティアナがデバイスを立ち上げバリアジャケットを装着
した

「あれ？、琥那君、バリアジャケットは？」

はやてさんが尋ねてきた

「一応、能力の障壁は展開してますよ、この服装が戦闘するのに楽
ですから」

「へー、デバイスは？」

「ああ、このケータイです。」

「また、レトロなケータイをデバイスにしたもんやな」

「じゃあ、模擬戦開始!!」

と言つとなのはさんとはやてさんは観客がいる場所に向かった。

「よろしく…」

「よろしく!!」

スバルが言い終えた時、右手が俺の目の前にあった

(つて、始まってすぐかよ…)

「反射!」

しかし

「ぶふお!!」

顔面に強烈な痛みが
殴られた…

俺はとつさに能力で体制を立て直した。

「なんで…」

「ノーヴェから反射の事は聞いてるからね」
スバルが勝ち誇ったように話してきた

反射を防いだ…

反射を抜けた？

いや…

反射した力量が自分に…

「ってまさか、反射する瞬間に戻したのか？、ってそんなミリコンマ単位の調整、出来るはずが…」

「残念ながら出来るんだよ、私は…」

なぜ…

まさか…

俺は透視能力を展開する
すると

スバルの体には機械が…

(マジ…、機人だったのか…)

「わかった、理解した」

「君はこれで反射は使えないね」

「しゃーねえから、念動能力の障壁に切り替える、さて俺も本気だすかなって」

そして、俺は攻撃にでた
右手をうつつ、防御、目にも止まらない速さで攻撃、防御を繰り返した。

「まだ、ストライクアーツは初心者を抜けたくらいだね」

その瞬間、スバルの後ろにいたティアナが視界から消えた
近くにいる事はわかる
でも、思考はよめない

スバルが手を緩めた、その瞬間、後ろから魔法弾が
とっさに防御魔法陣を

血管が破裂し頬を血がつたる

「「え？、魔法？」」

ティアナとスバルが驚いていた

俺はレポートし少し離れた場所にかくれ、デバイスに数字を打ち
込んだ

209

Side：スバル

「ティアナ、琥那君、魔法使ったよね？」

「そうね、特別推薦なんかめったにないからなんかあるとは思って
たけど、まさか魔法も能力も使えるなんてね」

ティアナは少し笑っていた

「でも、副作用はあるみたいだね」

「そうね…、だから魔法も多くは使え……」

その瞬間、私達の目の前に琥那が現れた
その手には見たこともない銃が…

そして、魔法弾が無数に

私達は防御陣をはった

その瞬間、目の前から琥那が消えた、そして耳元で

「すまん…」

目の前が暗くなった…

Side：ティアナ

あれっ、さっき魔法弾が無数に向かってきて、そして二人とも、防御陣をはって、防いだけど、急に琥那がスバルの後ろに現れスバルの頭に手を載せた瞬間、スバルが倒れた…

「はい、一人っ」

「なにしたの？」

「え？、ああ、大丈夫だ、気絶させたただけだ」

琥那は余裕そうに答えていたが、顔や手の血管から血が吹き出していた

「へっ、余裕そうに言ってるけど、血、大量にでてるわよ？」

「大丈夫だ、問題ない、すぐ治る、それより…」

と、弾が切れたのか銃を地面に捨てた、地面に触れた瞬間、消え琥那の手には新たに銃が握られていた

私はクロスミラージュを構えたが琥那も銃を構えた

27話（後書き）

今回はここまでです。

次回も出来るだけ頑張るのでまた読んでいただけたら嬉しいです。

ちなみに、もしかしたら更新が不定期になるかもです。

二十八話（前書き）

今回も誤字脱字や内容の齟齬があるかと思いますが暖かい目で見てください。嬉しです。

二十八話

Side:なのは
えっ、なんで魔法を…
あんなに血を出して…

はやてちゃんが

「なあ、なのは、今琥那君、魔法使ったな…」

「うん…」

「あの血って副作用？、って銃？」

琥那君は見たこともない銃を構えていた

「あの銃…」

「なんか、見たことあるようなないような…」

「おおーやってる、やってる、ってまた珍しい銃使っちゃっているッスね」

ヴァイス君が後ろにいた

「あつ、ヴァイス君、あの銃知ってるの？」

私はヴァイス君に尋ねた

「確か、お二人の出身世界第97管理外世界「地球」の質量兵器でP90ってゆう銃ッスよ」

「地球の？、なんで琥那君がそんなん知ってるんや？」
はやてちゃんが尋ねてきた

「私、教えてないよ…」

「あつ、また新しい銃や」

「ヴァイス君知ってる？」

「確かあれは…、同じく地球のドイツとか言う国のワルサーP38
ツスね、ルオン三世の主人公ルオンが使ってる銃ツスね」

「また地球の…、なんで…」

「また俺は本でしか見たことないですが結構古い銃だったと思うッ
ス」

「ルオン三世か…、地球のそれも日本のアニメや…なんで琥那君が
しつとるんやろ…」

「…なんで…」

Side：琥那君

今、俺は銃を構えている

(無理だ…、撃つてもよけられる…、しょうがねえ…)

俺は銃をしまい

手の平を構えた

「え？」

ティアナが驚いていた

なぜなら、俺の手には青くひかる玉、プラズマが発生していたからだ

「さて、ちやちやつとやるか…」

俺は、ティアナに向かってプラズマを投げた

そしてティアナが防御陣を展開した瞬間プラズマは当たる事なく消えた、

そしてテレポートで背後に回り、同じように頭におき

「すまん…」

気絶させた…

「終わった…」

気を抜いた時…

「バインド!？」

俺の体にバインドが絡みついた

少し離れた空中になのはがレイジングハートを構えていた
それもスターライトブレイカーの発射準備に入っていた

「ちよつと頭冷やそうか…」

なのはがゆっくり言ってきた

「いやいや、頭冷やす所か体中冷えてしまっじゃん…」

(やべー、バインド解除しないと…)

「スターライト!」

「ブレイカー!!!!」

巨大な光の弾がこちらに向かってくる

(よし、バインドが外れた…)

テレポート間に合わない…

反射、大きすぎて無理

防御陣、無理…

防がないと…

相手は魔法

魔法？

異能？

打ち消す？

右手？

なんだこの知識は？

(しゃーねえ、一か八か)

俺は右手に力を入れ

スターライトブレイカーをパンチを入れた

その瞬間

「パキン!!!」

スターライトブレイカーは粉々に砕けちった

「え？」

なのはさんは凄く驚いていた

ちなみに観客の人も全員あ然としていた

「反撃だ」

俺はなのはさんにバインドをかけレールガンを発射した

ちなみに当たっても気絶する程度だ

当たった音がした

でも、そこにはなのはさんはいない…

落ちる気配もない

なぜ…

と思った時

後ろから

「あまいよ…」

そしてなのはさんの指が俺の頭に触れた

反射はOFFにしている
何もかもが遅かった

そして目の前が暗くなり俺は地面に倒れた

二十八話（後書き）

今回はここまでです。

しんどい…

また、風邪ひいた…

まあ、頑張るのでまた読んでいただけたら嬉しいです。

29話(前書き)

今回も誤字脱字や内容の齟齬があるかと思いますが暖かい目で見てください。嬉しです。

29話

S i d e : 琥那

起きた

「知らない天井だ……」

(病院?)

「あ、起きた?」

不意に横から声が聞こえた

「えっ、あつ、はい……」

「私は機動六課の医務官のシャマルです」

「あ、小鳥遊琥那です、よろしく」

「よろしく」

挨拶を済ませ本題へ

「あの、今、いつ?」

「夕方の7時頃よ」

(模擬戦があつたのは昼前だったから……)

「数時間寝てたのか……」

「目覚めるのにもつと時間かかると思ってたのだけど予想外ね」

「まあ、怪我等は能力で治せますからね……」

「ホントびっくりよ、模擬戦の時、血出てたのに傷が全然見あたらなかったから……」

その時、目の前にモニターが現れそこにはなのはさんが

「あつ、起きた？」

「はい」

「今からご飯何だけど琥那君も来る？、結果も知らせたいし…」
いつもと変わらないなのはさんだった…

「そうですね…、行きます、腹減ってて…」

「了解、シヤマルさんと一緒に食堂まで来てね」

「わかりました」

と、返事をするモニターは消えた。

「あの…、シヤマルさん、なのはさん、怒ってるんでしょうかね？」

「それは怒っていると思うけどそれ以上に驚いていると思うわよ」

「そうですね…」

「それじゃ、食堂に行きましょっか」

「はい」

食堂にはフォワード、隊長陣、がいた
簡単な挨拶を済ませ食事開始

するとなのはさんが

「気になつてると思っけど、結果について」

「はい…」

「一応、合格、階級やランクは後日決定で」

「ハア、良かった…」

（良かった、良かった…）

「でも、帰ったら、O*H*A*N*A*S*H*Iね」

「はい、わかりました」

俺となのはさんの会話を聞いていた周りは笑っていた

「でも、凄かったな、まさかなのはのSLBを防ぐなんてな、
どうやったんや？」

はやてさんが興味津々で聞いてきた

「なんか、パツと思いついた事を試しただけなんです…」

俺が発言した瞬間、周りは驚いていたり、呆れていたり、平然としていたりといういろいろだ…

「へっ、へえ、そうなんや」

はやてさんが呆れていた

「それより、スバルさんに一発目から反射破られたのが驚きですね
…」

「いや、ノーヴェからいろいろ教えてもらってたけど、まさか上手くいくとはね…」

「反射が起こる膜、方向がわかってないと無理ですからね…、改良

しないとな…」

「それより、前から気になってたんやけどな、琥那君はいくつ能力を持ってるんや？」

「はやてさんが聞いてきた」

「持つてるのはテレパスだけ、使えるのは、たくさんありますね…」

「特に使うのは？」

「そうですね…、ベクトル操作、発電能力、瞬間移動、座標移動、肉体再生とかですね…、いくらでも収集出来るのでよくわからない能力もあつたりしますね」

「もしかして、予知能力とか持つてたりするん？」

「はい、持つてますよ、おおざっぱな内容ですが3秒後の未来から数年後の未来まで、でも、俺、先がわかると言つてのあまり好きじゃないので、使わないです」

「そうなんか…」

「それに、凄くおおざっぱなので…、3秒後は結構はつきりわかるんですがね」

「へ〜」

とゆう話をした

食事が終わって少ししてから、なのはさんとフェイトさんと俺の三

人で家に帰った。

ちなみに帰ってから、徹夜でO*H*A*N*A*S*H*Iと言つ名の拷問を受けたのは言つまでもない…

29話（後書き）

今回はここまでです。

次回も頑張るので読んでいただけたら嬉しいです。

三十話（前書き）

今回も誤字脱字や内容の齟齬があるかと思いますが暖かい目で見てください。嬉しです。

三十話

S i d e : 琥那

あの模擬戦から数日がたった

管理局に無事入局

能力ランクはA A

階級は三等空尉

ランクがイマイチ合っていないようだが…

一応、デバイスの緊急出動命令と隊長陣からの命令が出たら、起動六課の本部に向かわなければいけないがそれ以外は、普通だ

なので今、買い出しにきている

何の買い出しかと言うとデバイスの部品だ

なのはさんに魔法は出来る限り使うなとO * H A * N A * S H I されたので、防御と攻撃を出来る限り能力で、出来る限り魔法をすくなく使う方法を一晩中考えて出てきたのは、刀型の武器を今のデバイスに追加し、刀に反射と防御魔法をつけ反射が適応できない魔法攻撃には自動的に防御魔法が発動し、反射が適応するものは自動反射するような作りである

解析も出来るので長く撃つ魔法なら解析し反射に移行する設定だ
攻撃も発電能力や発火能力、ベクトル操作をデバイスに纏わせ攻撃する

刀自体は、デバイスの中にあっただの後は細かな部品だ

買い物を済ませ、帰り道、とある裏路地で…

Side : ????

「……………」

私は、また不良どもに囲まれている…

「やゝ、可愛い子ちゃんゝ、お兄さん達と遊ばない？ゝ」

周りには4、5人程の不良

(あゝあ、またバカどもか…、通行人も気づいても無視、ま、こんな所で助けにこようなんて思うやつはあのバカくらいかゝ)

「……………」

「無視かなゝ、もしかしてクーデレかな？」

「おい、そのバカども、止めとけ」

見ると私より少し年上の少年が立っていた

Side : 琥那

裏路地に女の子が絡まれていた…

(まあ、俺の管轄じゃねえが、いっちょやるか…)

「おい、そのバカども、止めとけ」

一生に不良達とその少女がこっちを向いた

「なんだあと、てめえ？」

「何様のつもりじゃ？」

「ヒーロー気取りのガキってか？」

不良どもが笑いながら発言してきた

「そいつ困ってるようだから離してやれ」

「離さなかったらどうなるってんだあ？」

「力づくでもその子を助けるだけだが、自主的に離して今後こういう事をしないと誓うなら見逃してやってもいいが…」

「ほ〜、言うねえ〜」

「おめえ、バカだな〜、ここいいんのは、レベル3の能力と魔法使いだぜえ〜？」

「へへ〜、今更ないて詫びても許してやらねぜっ、ククク…」

「最終警告だ、その子離して今後こういう事をしないと誓え」

「いつまでもヒーロー気取ってんだよっ」

不良の一人が殴りかかってきた

顔面に当たる

『反射！』

「キンッ」

「いてえ〜！！」

「え？、その能力…」

男は腕を押さえ倒れた、激痛がはしる程度にしておいたから骨は大丈夫だ

なんか、少女が驚いていたが…

「止めとけ、お前らじゃ、勝てないから、大人しく消えろ、そしてもうこういう事すんな」

「ふざけやがって〜」

不良どもが一生に、炎や魔法弾、パンチなどを飛ばしてきた

『防御魔法！！、バチッ！』

炎や魔法弾が消え去り、パンチを放ったやつは手を押さえつけずくま
った

額の一本の血管が破裂した

「こいつ、魔導士か？」

「いんや、確かに魔導士でもあるが、本命は能力者だ」

「さて反撃しようか？」

『発電！！』

俺は、電撃を不良どもに浴びせた
もちろん気絶する程度の

「『ぎゃ』」

不良どもは倒れて動かなくなった

「終わりつと、お前大丈夫か？」

俺は少女に話しかけた

「私は大丈夫、それより、あなたの能力…、反射…、それに発電…」

「よくわかったな…、反射わかるやつ少ないんだけどな、発電は
見りゃわかるな…」

「あなたの発電、私と同じ…」

「やっぱり、発電能力者か」

「うん、レベル5の…」

「同じレベル5か…、助ける必要なかったかもな」

いい終わった時、背後から

「ジャッチメントですの!!!」

「は？」

急にお嬢様口調の女の子が現れたので驚いた

「通報がありました、少女が不良に囲まれて少年が助けに入ったとの事でしたが、少女というのはお姉さまの事でしたか…」

「お姉様？」

「はい、そこのおられるのが、レベル5の御坂美琴お姉様ですの、あなたが助けに入った少年でよろしくて？」

「ああ、お前は？」

「ジャッチメント、第一七七支部所属の白井黒子ですの、それよりこの不良どもに能力を使ったのはお姉様でして？」

「わっ私は違うわよ、こいつよ」

俺に指をさして怒鳴ってきた

「ああ、そうだ俺だ」

「詳しくはジャッチメントの支部で聞きますので来てくださいますし」

俺の袖を引っ張ってテレポートしたようだが…

「あれ？、テレポートが発動しない…」

「干渉してテレポートできないようにしたんだよ、すまねーが、俺支部には行けないわ、忙しいから」

(デバイスの調整もしないといけないしな)

「いえ、そういう訳にはいかないですよ、民間人が能力で攻撃と言
うの立派な犯罪ですよ」

(あゝ、めんどくせゝ、こっちは正当防衛だつづの…、いや…公
務執行妨害つてか…)

「民間人ね…、これでいいか？」

管理局の証明書を見せた

「え！、かつ管理局の方でしたの」

「ああ、管理局、機動六課、小鳥遊琥那三等空尉だ」

「すみませんでしたの、そうとは知らず…」

ちなみにジャツチメントは管理局より地位は下だ

「こっちは口で止めるように言ってたのだが不良の方から手だして
きた正当防衛だろ？、てか、さっさとジャツチメントも来いよ…、
なんの為にあんだよ…」

ちよっとむかっていた俺はきつく言っていた

「そうでしたの…、すみませんでしたの…」

「まあ、女の子の方はケガなかったしいいか…、それよりもついで
か？、俺の管轄じゃないし、忙しいし…」

「はっはいですの…」

「ま、なんかあったらここに」

俺は名刺を渡した

「これはご丁寧にありがとうございますの」

「御坂だっけ？、お前も、気をつけるよ、じゃあな」

俺は手を振って別れた

三十話（後書き）

今回はここまでです。

次回も頑張るので読んでいただけたら嬉しいです。

31話(前書き)

今回も誤字脱字や内容の齟齬があるかと思いますが暖かい目で見てください。嬉しです。

31話

S i d e : 黒子

今、私は、この前の管理局員について初春に調べてもらった情報を聞くためにファミレスにてお姉様と一緒に初春を待っていますの

「あゝ、あの初春ったら遅いんですの」

「まあまあ、しょうがないじゃない、それより、あいつの能力なんだと思う？」

お姉様が尋ねてきましたわ

「わたくしの予想ではA I M拡散力場を操る能力ですね」

「確かにあいつは反射、電撃、黒子の能力に干渉、それに防御魔法まで使用してたしね…」

「はいですの…、あのような能力なら噂になっていないはずがないですの…」

「そうよね…」

「白井さん、遅れてすみません」

初春が現れた

「遅いですわよ」

「本当、すみません…」

「それより、あいつの情報は？」

お姉様はあの方の情報が知りたくてたまらないらしい

初春は、席につきパソコンを取り出した。

「はい、機動六課、小鳥遊琥那三等空尉についてなんです、なぜか非常にセキュリティが強く時間がかつちやいました。」

「あいつの能力は？」

「え〜と、レベル5、ランクAAのテレパスですね」

「嘘……」

わたくしとお姉様はもった

「いや、明らかに電撃、反射等を使ってましたわよ」

「それなんです、彼ただのテレパスじゃないんです。彼、自分の近くの人、多分自分A I M拡散力場の当たった人の能力をコピーする事が出来るんです、別名能力収集です」

「え？」

「コピーですか？」

「それに彼自身、リンカーコアも持っていて魔法も使えます、肉体再生等の能力と併用すれば副作用はあまり関係なく使えます」

「へ〜、よく調べたな〜」

「……え……」

急に男性の声が聞こえたので3人共驚いた
そこには……

S i d e : 琥那

今、俺は、なのはさん、フェイトさん、ヴィヴィオと一緒にファミレスに向かっている

なんか、俺が入局祝だそう

ファミレスはどうかと思うが…店に入って見回すと角の席に前に見たことある二人とジャッチメント一人がいた

（なにやっつてんだ？）

明らかに挙動不審に見えた

「すまん、知り合い見つけたから話してくる」

俺はなのはさんに言った

「うん、いいよ」

その三人に近づいた

気配を消して

パソコンの画面には俺の写真、話している内容は明らかに俺の事だ…

（おいおい、これ管理局のサーバーにあるやつじゃん…、ハア…）

俺は、呆れると同時に管理局のサーバーにハッキングし俺のデータをコピーした事にびっくりした

「へへ、よく調べたな」

気がつくと話しかけていた

「「「え？」「」」

「よー！」

「あ、あんた！」

「えっと、御坂だっけ？、どした？」

「なんでこんな所につ？」

「ああ、家族と…」

御坂と話していたら後ろから

「あれへ、琥那君、風紀委員の知り合いがいたの？」

「なのはさん…、立ち聞きですか？」

「そりゃ、可愛い女の子の知り合いがいると知っちゃ、ママとじても興味津々なんだよ」

なのはさんが嬉しそう話してくる

「あの〜、なのはさんってあのエースオブエースの高町なのはです
て?」

「うん、そうだよ〜」

「「「え…」「」」

「あの〜、なんでなのはさんの後ろにフェイトさんその後ろにヴィ
ヴィオが?」

「まあ、ママ二号としては心配なんだよ」

「もしかして、フェイトさんってあのフェイト執務官ですか?」

花飾りをつけた少女が聞いていた

「うん、そうだよ…」

「「「え〜〜!」「」」

「どしたお前ら?」

驚いている三人に尋ねた

「どうしたって、あのエースオブエースとあのフェイト執務官が親
つって、え?、なんで母親が二人?」

御坂が発言してきた

「なのはさんが保護責任者でフェイトさんが後見人、俺本当の親い
ないから…」

「あ、ごめん…」

「別に気にしてない、それより俺の事、知りたければ直接聞いてく
れ、名刺渡したんだから…、とりま家族で飯食うから…、じゃあな
〜」

俺はなのはさん達の席に向かった

S i d e : 黒子

「怪しいですの…」

「それに、彼、管理局には特別推薦で入ったみたいなんですよ」

「え？、管理局って推薦とかあるの？」

「いえ、前例がありません…、名前はわかりませんが、結構な数の人に推薦されてますね…」初春がパソコンを見て答えてきましたの

「これ以上、深追いはしない方がいい気がしますわ…」

「確かにそうですね…」

「それじゃ、今日はここのパフェ食べて帰りますか」

お姉様が言いましたの

「そうですね」

「そうですね…」

とまあこのような形で小鳥遊琥那を追う事は諦めましたの…

(でも、明らかに機動六課の戦力はおかしいですの…)

31話（後書き）

今回はここまでです

次回も頑張るので読んでいただけたら嬉しいです。

三十二話（前書き）

今回も誤字脱字や内容の齟齬があるかと思いますが暖かい目で見てください。嬉しです。

三十二話

S i d e : 琥那

管理局に入局して数日がたったある日の事だ
今は授業中

体育教師みたいな先生が数学を授業していた
後ろの土御門とコソコソ話していたり、青ピが変な顔してきて笑いをこらえるのに苦労したり、土御門が『舞夏の弁当旨いぜよ』と言いながら早弁していたりという面白い授業をおくっていた

しかし教師に話してるのがバレて

「おい！、小鳥遊！」

「はい、なんですか？」

少し嫌いな教師だったのでいやいや返事をしてやった
ちなみに俺のクラスでは結構その男性教師を嫌いに思っている人は多い。

担任の小萌先生と仲が悪くこのクラスの生徒を『落ちこぼれ』等の陰口を叩いている事をたいていの奴は知っているみたいだ

教師は俺を睨んで黒板にある問題を書き

「お前、この問題といてみる」と言った

黒板には、明らかに中等部では習わないくらいの難しい問題が書いてあった
後ろから

「うわ、嫌がらせぜよ」と聞こえていた

「はい！」

俺は仕返しに元気よく返事をし右手を黒板に向け念動能力でチョークを動かし席に座ったまま答えをサラサラつと書いた
その問題は、俺にとっては簡単な部類だったので余裕で書いた。
教師はあ然していた

「これでいいでしょうか？」

「あつああ、えつと、正解だ、よく出来たな…」
明らかに驚いていた

念動能力で数メートル離れた場所の物を動かし文字を書くには高レベルな演算が必要であった
クラスの男子から『ナイスだぜっ』的な目線を送られる。

「たかやん、すげーにや〜」

「何が？、能力？、問題？」

「どっちもだにや〜、あの教師のオロオロしてる姿笑えるぜよ」
「だな〜」

といい終わった時に

「ピーピーピー！、ピーピーピー！」

俺のケータイがなった

（確かこの音は…）

すると、教師が

「おいっ、誰じゃい！、授業中にケータイ鳴らしてるやつは〜」

画面を見たら『緊急召集』の文字が

「俺です、緊急召集がきたので授業ぬけます」

「は？、何言つとんじゃ？」

明らかにバカにしてる目だ

（こいつ、俺が管理局に入局した事知らないな…管理局の方から学校には情報が行っているはずだが…、落ちこぼれのクラスの事なんか気にも止めないってか？、まああまりバレたくはなかったんだが遅れてなんかあったら大変だからな…しょうがない）

俺は管理局の証明書を見せて

「管理局、機動六課から小鳥遊琥那、三等空尉に緊急召集がきたんです！！、学校の方には連絡は入れています、とにかく抜けます、さようなら」

俺はカバンを持って教室を抜けた

その時の教師の顔は言うまでもない

教室からは

「え〜！」や「管理局？」、「小鳥遊、ナイスだぜ」
等いろいろ聞こえてきた

Side: はやて

うちは隊長室で書類整理していた
急に

「ピーピーピー！、ピーピーピー！」

「緊急警報！」

そしてうちの前に画面が現れグリフィス君が映っていた

「状況は？」

「はい、郊外の海上**キロの辺りに高エネルギー反応が数個発見されました、ロストログアだと思われます」

「わかった、うちも今から管制室に行くから、他のメンバーも召集してや、ちなみに今回は、海上やし、数個やから琥那君にも召集か

けて」

「彼は今学校なはずですが…」

「かまへん、琥那君もそれくらい覚悟しとるやろつし、今は非常時やから」

「わかりました」

琥那君には悪いけど、緊急召集をかけた

管制室に行ったら、ヴィータとシグナム、フォワード4人がいて敬礼してきた

答礼し

「あれ？なのはとフェイトは？」
と聞くとグリフィス君が

「本局の方で用事があるみたいで、どうしても来れないそうです。」

「そおかあ…」

「遅れてすみません」

琥那君が入ってきた

三十二話（後書き）

今回はここまでです

次回も読んでいただけたら嬉しいです

33話（前書き）

テストで書けなかった…

すみません…

今回も誤字脱字や内容の齟齬があるかと思いますが暖かい目で見ていただけたら嬉しいです。

33話

S i d e : 琥那

俺は、学校を出た途端テレポートを繰り返して機動六課に向かった
そして管制室についた

「遅れてすみません」

「あ、案外速かったな」

はやてが驚いた風に答えてきた

「状況はって、なんで4人敬礼してんの？」

フォワード4人は俺に敬礼していた

「なんでってあんたの方が階級上やんか」

「あ、そうか…、俺、敬礼するのもされるのも嫌いだから、止めて
くださいよ…、もっと気楽に」

シグナムが凄く睨んでいたがスルーした

「それより、状況は？」

「そやな、郊外の海上**キ口の辺りに高エネルギー反応が数個発
見されたんや、ロストロギアやと思われる。」

俺が聞くとはやてでみんなに話始めた

「今回は、海上やから、シグナム副隊長、ヴィータ副隊長、琥那君
の三人に言ってもらう、フォワードは待機や」

「了解！」

全員が勢いよく返事をした

「それより琥那君、ほんますまんな、学校あるし、まだ全然研修

も受けてないのにな…」

俺に申し訳なさそうに発言してきた

「いえ、管理局員の一人として当たり前です、自分の出来る限り頑張りますよ、はやてさん！」

「そうか、ありがとうな」

そう言うと俺とシグナム、ヴィータの三人は、屋上に向かい、ヴァイスの操縦するヘリにのった。

ヘリの中で

「おい、小鳥遊、お前は上官を敬う気持ちがないのか？」
凄く怒っているシグナムが言ってきた。

「上官とか階級自体あんまり興味ないんですよ…、純粹に仲間、同僚と言う風に考えているので、まあ年上には敬語は使いますが…」

「お前は、、、」

シグナムが俺に平手を食らわそうと右手を上げた

その時

「やめとけえシグナム」

ヴィータが止めに入った

「なぜ止める？」

「仲間打ちで争っても意味ねえ、それにこいつがきちんと結果出せばいいだけだあ、出来るなあ？」

ヴィータが俺に確認してきた

「はい、ヴィータさん、先程もはやてさんに言いましたが俺は出来る限りの力を出すつもりです」

「ならいい」

ヴィータが黙る

シグナムも黙る

「そろそろ、着きます」

ヴァイスが急に話しかけてきた

「それでは行くぞ」

まだ怒っているシグナムが言ってきた

「おう」

「了解」

「じゃあ、俺は、空から狙撃で援護するっス」
ヴァイスが言ってきた。

そして、シグナム、ヴィータ、俺の三人は、デバイスを立ち上げへりから出て飛んだ

253

海上には、ロストログアらしき物体が5個
水の化け物のようになっていた。

シグナムとヴィータが攻撃を始めたの同時に俺はレールガンを発射した

やはり元が水なだけに電気は効くようで撃つたびに小さくなっていく

俺はデバイスのセカンドモードの剣をだした

そして剣に電気を纏わせ切りにかかった

効果はあるがすぐに水を吸い上げでかくなる

「ちっ、キリがねえ」

「……っ」

二人とも焦っている

俺も焦っている

「あの、シグナムさん、質問何ですがあのロストロギアが水を魔法で操っているんですよね？」

「そうだがなんだ？」

「俺に一つだけ案があります、が俺一人では無理です」

「聞こう」

「行ってみる」

シグナムとヴィータが聞いてきた

「まず俺があこのロストロギアに近づき触れます、そしてベクトル操作を駆使してあこのロストロギアから水の制御を奪い、そこを封印するんです」

「ダメだ、危険すぎる」

「いえ、攻撃は幾分、反射が可能と判断したので、それに後方支援があれば」

「だが…」

「他には、俺がSLBをぶっ放して水を消し飛ばす方法もあります
が、副作用のリスクが大き過ぎます。」

「わかった、お前の作戦を実行だ」

俺は管制室に通信しどこを視点としてベクトル操作すればいいかを調べてもらった。

33話（後書き）

今回はここまでです

次回も出来るだけ頑張るので読んでいただけたら嬉しいです

三十四話（前書き）

体調を崩してしまい、日にちがずれてしまいました
それに、忙しくなるので更新が不定期になるかもしれませ
ん…
すみません…

今回も誤字脱字や内容の齟齬があるかと思いますが暖かい目で見て
いただけたら嬉しいです。

三十四話

S i d e : 琥那

失敗は許されない

手に全ベクトル操作を集中させ水の操作を奪い、ロストロギアから水を放す

そこを一気に封印

もし失敗し水に閉じ込められ酸素不足で演算出来なくなったら流石に危ない

「シグナムさん、ヴィータさん、あの一番高くなっている部分に集中して能力を使います、水が消し飛んだら一気にロストロギアの封印をお願いします」

「わかった」

「おう、お前も気をつけるよ」

「了解です」

俺は能力で高速に飛び、攻撃地点に向かった

ちなみに、テレポートはロストロギアが発する特殊な念波によって干渉され発動しなかった

それにあのSLBを破壊した能力もあれ以後何故か発動しなかった
向う途中、水の槍が飛んできたが反射、反射出来ない攻撃はシグナルとヴィータが潰していた

「ハッ！！！！」

俺は右手を水の中に入れ、演算し水の制御を奪い水をロストロギアから吹き飛ばした

「バシャ！！！！」

水はなくなり空中にロストロギアが浮かんでいる

「シグナルさん、ヴィータさん、今です、封印を」

「わかった」

「おう」

ロストロギアの下に魔法陣が現れ次々に色が消えていき周りの荒々しさも消えていく

「封印完了」

「だな！」

二人はホツとしていた

「お疲れ様」

「ああ、お前な」

「よしっ、帰るか」

「だな」

「ですね」

俺らはへりに戻り機動六課本部へ戻っていった

「なあ、小鳥遊、今度一度手合わせしないか？」

へりの中で急にシグナムが話しかけてきた

「えっ？、手合わせですか…」

「何かいいたそうだな？」

「いえ、まだ俺技術は未熟ですの」

「なに、先程の戦いっぷりなら相手に不足はない」

「わかりました、今度、お互い時間が空いた時にでも」

とまあ手合わせの約束をしていたら本部に到着した

管制室に付くと

「お疲れや〜」

「「「「お疲れ様です」「「「」

はやてとフォワード4人がいた

「この後の事なんやけど琥那君は……………」

(多分、帰っていいと言われると思うけど…)

「俺も事故後の処理します」

と言った

「えっ、いいんか？」

「はい、俺も機動六課の仲間ですし、仕事少ないので仕事ひとつひとつをきちんと終わらせます」

「そうか〜、わかった、ありがとうな〜」

「いえいえ」

俺は管制室から出て、事故後の処理を始めた

三十四話（後書き）

今回はここまでです。

次回も頑張るので読んでいただけたら嬉しいです。

35話(前書き)

今回も誤字脱字や内容の齟齬があるかと思いますが暖かい目で見てください。嬉しです。

35話

Side: 琥那

今俺はパソコンとにらめっこしていた

パソの使い方はわかるが、報告書の書き方等の事務方面の知識があまりなかったのだから、報告書に少し教えてもらってどうにか自分一人で出来始めたくらいだ

内容は主に、ロストログア性質、封印方法等だ
事件後のシグナムは幾分優しくなった気がした

(見直した的な...?)

「やっと終わった」

俺は、今事故処理が終わった

書類等を書くのに手間取っていたりしていたので時間は、夜の7時だ

「疲れた...、腹減った...」

その時無線が入った

「琥那君、お疲れ様」

「あ、はやてさん、お疲れ様です、どうしたんですか？」

急の通信が入ったので何か起きたのかと思っていた

「今からみんなとご飯食べる所やねんけど、琥那君も来るか？」

「マジですか...、行きます、俺、お腹ペコペコだったので」

「そうか、よかった、ほな食堂で待ってるよ」

―――食堂―――

「遅れてすみませぬ…」

食堂に着くとみんなが席に座っていた

「大丈夫だよ、私たちも今来た所だから」

なのはさんが空いてる席を指差しながら言ってきた

俺は、カレーを頼んで席に座った

「今日は本当にありがとな」

「え？、もしかして出勤の件ですか？」

「そうや、学校もあつたやろうし、講習もなしでぶつつけ本番でやつてもらったからな」

はやてが笑顔で言ってきた

「大丈夫ですよ、俺も機動六課の仲間ですから」

「ありがとな、これからよろしく頼むで」

「はい、どんな事件も俺のスキルコピーでちょちょいのさっ！、ですよ！」

俺が言い終わると皆が食べるのを止めていた

厳密には固まっていたと言った方が正確だろう

「……え！」「……」

中には驚いた風に出していた

「え？、皆さんどうしたんですか？」

俺が聞くと

「いや、なんかずいぶん前に聞いた事あるようなセリフやったからな」

「はやて隊長もですか？、私も聞いた事が…」

ティアナも

「……私も……」

と次々に言い出した

「いつですか？、てか、誰だったんですか？」

「それが覚えとらん、誰だったかも…」

周りを見ると皆、顔をしかめていた、どうやら他も覚えてないようだ…

「へへ、覚えてないという事はあまり必要ない、興味がない記憶だったのでは？」

「そうやな…」

「まあ、とりあえず、ご飯食べましょう」

皆の手が止まっていたので言った

「うん、食べよう、食べよう」

と試してみな食べ始めたがどこか心ここにあらずという感じだった…

(俺の他にスキルコピーの能力者がいるのかな…)

といろいろ考えながらの夕飯だった

35話（後書き）

今回はここまでです

次回も頑張るので読んでいただけたら嬉しいです。

三十六話（前書き）

今回も誤字脱字や内容の齟齬があるかと思いますが暖かい目で見てください。嬉しです。

三十六話

Side：琥那

今、事件が起きた次の日の朝9時頃、学校に向かっている
まあ、遅刻だが管理局の仕事だからしょうがない

あの夕ご飯を食べた後、帰ってもいいと言われたが断り、夜勤もきちんとした

交代で本部待機していた

正直、自分の特別待遇を思い知った感じだ

俺は呼ばれた時だけ行けばいいが、他はずっと、これで給料も普通くらい貰えるとなると凄く悪い事してる気分だ…

なので、はやてには、もっと呼んでもらっても構わないと言っておいた

そして、呼ばれた日は、きちんと仕事をする事と決めた
なので夜勤もすっかりこなした

ちなみに学校を休もうかと思うくらい眠いが、我慢して向かった

そうこうしているうちに学校について

まずは職員室に行った

職員室には小萌先生がいたので報告を済ませ教室に向かった。

教室を覗くとあの男性教師の授業中だったので…

「おはようございます、夜勤明けで遅れました、すみません…」
と扉を開け大きな声で言い席に向かった
すると

「おお…、そうか…、今、教科書の〇〇ページをやってる所だ…」
どうやら、いろいろ怒られたような感じだった

まあ、急を要する事件の為、学校側には連絡を入れ『緊急召集』と言えは普通OKなはずだが、この男性教師は落ちこぼれのクラスだ

からと話を耳半分にしていたのだから、そりゃ怒られるわな…

席につくと周りから小声で『お疲れさん』や『おはよう』とあまり話した事もないやつからも話しかけられたらと後ろから

「よう、たかやん、お疲れ〜ぜよ」

「おう、てか、俺の噂ってどこまで広がっちゃったかわかる？」

「少なくともこの学年には広まってるぜよ、なんだ？、嫌だったのかや？」

「まあな、でめああでもしねえとあの先生（野郎）聞かねーだろうし…」

「ドンマイぜよ」

そうこうしているうちに授業が終わる

（まあ、予想してたが…）

俺の周りには人だかりが…

次々に質問を…

適当に答えていたが、疲れた…

まだいる…

「アインハルト〜、助けて〜」

「えっ！、私にですか？」

声をかけると驚いた風にかえしてきた

「こっちは、夜勤で疲れてるのによ〜、質問詰めって拷問かよ…」
「大変ですね…」

無視してアインハルトと話していたら周りのやつらも諦めて席に戻っていった

「よかつた〜、ありがとな、アインハルト〜」

「いえ、私はなにも…」

「てか、次の授業って……」

言い終わる前に一人の教師が入ってきて黒板に『自習』書いて

「え〜、次の授業は、先生が風邪でお休みの為自習です、しずかに自習するように」

と言って出て行った…

「自習か…、寝よかな…」

俺がアインハルトの方を向いて言っていると前の席から

「寝させへんよ〜」

と聞こえた…

「ひでー、こっちは眠みーんだよってなんで青ピが？」

「席を代わってもらったんやで〜、さて機動六課について話しよか〜」

「なんで?」

「だって〜、あそこ、美人さん多いんやろ〜、そんなところに配属とか羨まし過ぎるわ〜」

(やっぱりな〜)

俺は青ピをスルーしアインハルトに

「さて、こんな奴はスルーして、今日、暇？」

「一応暇ですが…、なにか？」

「酷いよ〜、たかやん〜」

クネクネしながら青ピが口を挟んでくる

「ん、放課後、デートと言う名の遊びに……」

「え！、まあ、暇なので、いいですが……」
顔を赤くして答えてきた

「そかそか、じゃあ放課後な」

「たかやんがデートの誘いやね……」

「リア充もげろぜよ……」

ちなみにこの後、青ピや土御門にインハルトとの関係をいろいろ聞かれたり、機動六課の女性局員についてしつこく聞かれた事は言うまでもない

三十六話（後書き）

今回はここまでです

もしかしたら不定期更新になるかもですが、次回も頑張るのでまた読んでいただけたら嬉しいです。

37話(前書き)

不定期更新すみません…

今回も誤字脱字や内容の齟齬があるかと思いますが暖かい目で見えていただけたら嬉しいです。

37話

Side: 琥那

放課後、一度家に帰り服を着替えてアインハルトと会った

「ところで、どこに行く予定なんですか？」

「ん……、決めてない…orz」

「ハア……」

すごく呆れられている…

「ゲーセンでも行くか？」

「ゲーセンですか？」

少し疑問で返してきた

「アインハルトは行った事ないのか？」

「いえ、前に一度誰かに行った覚えがあるのですが誰か思い出せないの…」

少しうつむいて言った

「お前がド忘れとは珍しいな…、ま、ゲーセン行けば思い出すんじゃない？行くつぜ」

「はい」

と、まあ、ゲーセンで遊びまくっていた
UFOキャッチャーやパンチングマシーン、モグラたたきや他にも
ガン系を
ノーヴェさん程じゃないがパンチングマシーンで危ない数字が出て
きていた
モグラたたきでは俺が過去二番目の得点をとった

と、アインハルトと遊んでいる時、ケータイが鳴る
画面を見るとはやてさんからの直接通信
急いで出た

「はい、どうしたんですか？」

『ごめ…な、い……………脱走…』

地下だからなのか電波が悪い

「すみません、電波が悪いようなのでいい所に出て再度かけます」
といい電話を切った

「誰からですか？」

アインハルトが聞いてきた

「あ、隊長から、電波が悪くあまり聞こえなかった、すまんがそこ
で待っててくれないか？、地上に出てかけてくる」

「わかりました」

と、俺は地上に出て電波がいい場所からはやてさんに向け直した

「もしもし、すみません、地下だからなのか電波の調子が悪くて…、
それでどうしたんですか？」

『苦労ごめんな、実は少し前に捕まえた、次元犯罪者、ジエイル・

スカリエツティが脱獄してた事がわかったんや』

「え？、あのジェイル・スカリエツティか…、それでどうして俺に？」

『実は、スカリエツティが、管理局の科学者木原数多と関わりがあり君の能力について調べていた事がわかったんや』

「それで、木原数多は？」

『見つからへん…』

「そうですか？」

『うち、なんか嫌な予感がするんや…』

「わかりました、アインハルトを送り届けたらそちらに向かいます」

『アインハルトって霸王の子やんな？』

「そうですが…、なにか？」

『……………、いや、なにもないよ…』

「わかりました、用事が終わり次第そちらへ」

といい俺は電話を切った

と後ろから

「……………ミサカはミサカは……………」

S i d e : アインハルト

琥那君、遅いです…

いくら待っても帰ってこない

迎えに行った方が…

でもここで待ってるって…

でもなにかあったとしたら…

迎えに行こう

私は駆け足で琥那君の行った方に向かった

この時二人はこの後に訪れる事件、忍び寄り魔の手に気がつく事は
なかった…

37話（後書き）

今回はここまでです。次回も頑張るので読んでいただけたら嬉しいです。

三十八話（前書き）

琥那「おい、作者よ、言うべき事があるだろ？」

KONA「はい、更新が遅れてしまいすみませんでした…」

琥那「一応、理由を聞こう」

KONA「夏風邪で寝込んでいた事と、いろいろ用事があり更新出来ませんでした…」

琥那「風邪か…、ならしょうがないが…、大丈夫なのか？」

KONA「はい、治りました、今回は短いですが投稿します」

琥那「そうか、無理しない程度に頑張ってくれ」

KONA「了解です、今回も誤字脱字や内容の齟齬があるかと思いますが暖かい目で見ていただけたら嬉しいです。」

琥那「お前、それ定型文だな…」

KONA「ノーコメントで…」

三十八話

Side: 琥那

「……………ミサカはミサカは……………」

電話を切った途端後ろから声が聞こえた

後ろを見ると小さな女の子がベンチに座って泣いていた

「どした？、迷子か？」

「えっ…、あなた誰？、ってミサカはミサカは尋ねてみる」

急に話かけたからか凄く驚いた顔をしていた

（って、流石に見ず知らずのやつが話しかけてきたら不審がるよな…、ここは…）

俺は管理局の証明書を見せ

「管理局員の小鳥遊琥那だ、なんか、一人で泣いていたから気になつてな…、迷子かな？」

すると目を袖でゴシゴシこすって

「あの人はぐれちゃってってミサカはミサカは少し落ち込んだ口調で話してみたり…」

「あの人？、親御さん？、ってミサカって御坂美琴の知り合い？、なんか顔も似てるし…」

「お姉様の知り合い？ってミサカはミサカは尋ねてみる」

「まあな…、失礼」

俺は、女の子の頭に手を置いて

接触感応能力発動

「ふえっ、何ってミサカはミサカは……」

「ごめんごめん、なんとなくわかった俺能力者だから、了解、あの人って白髪で杖をついたやつでOK、打ち止めちゃん」

「その能力すごいね、合ってるよってミサカはミサカは驚いてみる」

(流石にほっておいたらまずいな…、時間かかるかもだが…、しようがない…)

「この地下街にいることはわかったから探すの手伝おうか？」

「うん、お願いしますってミサカはミサカh(ry」

とまあ、こんな感じで打ち止めちゃんの親御さんを探す事になった

Side:アインハルト

琥那君に向かった場所に行ったのですがいないです…

周りを探しても…

とうやはぐれてしまったようで…

困っていた時

「おい、そのオガキ」

急にガラの悪い口調で話しかけられた

「はっ、はい何でしょうか？」

「こんなガキ、見たことねエか？」

白髪灼眼で杖ついたガラの悪そうな年上の男性がケータイの画面を見せてきたそこには見たことがないアホ毛の小さいおんなの子が映っていた

（見たことないですね、ってなぜこのような男性が小さな女の子を…）

「ないです、ってまさか誘拐？」

「ンなわけエねエだろオ、このガキとは家族みてエーなもんだ」

（嘘を言っている感じではないようですね、あ、琥那君の事知ってるかも）

「そうですか…、ところでこのような方を見ましたか？」

私は前に隠し撮りした琥那君の写真を見せた

「インヤア、見てねエな…、おめエも迷子かア？」

（心配してくれてる…、案外いい人なのかも…）

「はい…、良かったら一緒に探しませんか？」

「なんでそんな話になるんですかア？」

声が少し大きくして言った

「一人でさがすより二人の方がいいかと思ひまして」

「ふんっ、勝手にしやがれエ」

とぶいと反対側を向いて歩きはじめた、しかしその背中について来いとても言っているかのような印象だった

と言っわけで一緒に探す事になりました

三十八話（後書き）

琥那「幼女の鏡、打ち止めちゃんの登場だな」

KONA「一方さんもできましたね」

琥那「打ち止めちゃんもいいが、ヴィヴィオの方が……」

KONA「あれっ？、アインハルトは？」

琥那「アインハルトか…、興味はあるある……」

KONA「二股かよ……」

琥那「ほっとけ、どこかの不幸少年よりマシだろ」

KONA「それより、内容が微妙なのか感想がこの頃ないようですね……」

琥那「内容だけにか？、まあこんな文なら叩かれるぜ、もっとマシな文を書けよ……」

KONA「すみません…、以後頑張ります」

琥那「期待してるぞ」

KONA「はい、次回も頑張るので感想や、また読んでいただけたら嬉しいです。」

39話(前書き)

琥那「作者よ、文が短か過ぎないか？」

KONA：「すみません…、書き始めた頃より忙しくなってしまうして…」

琥那「お前も大丈夫だな…」

KONA「君こそいろいろ大丈夫だな…」

琥那「まあ、出来る限り更新頑張ってくれ」

KONA「了解、ちなみに今回も誤字脱字や内容の齟齬があるかと思いますが暖かい目で見ていただけたら嬉しいです。」

琥那「またまた定型文だな…」

KONA「ノーコメントで…」

39話

Side: 琥那

今、俺はインハルトを探して地下街をあるいている
横には迷子になったらしい打ち止めが

「あの、さつきから気になってただけだけどあなたの能力ってなに
？ってミサカはミサカは尋ねてみる」

不意に尋ねてきた打ち止め

「え？、どうしてそんな事聞くんだけ？」

「だって、私の頭を触っただけであの人の事わかったみたいだけど
周囲に電磁ソナー展開してるみたいだし気になっちゃって、ってミ
サカはミサカはテヘっつと舌をだしてみたり」

不覚にもかわいいと思ってしまった俺

(ドキッ、犯罪犯罪、俺には、ヴィヴィオやインハルトがいる…)

「ふ、俺はレベル5の能力者ベースは精神感应能力で他人の能
力をコピーする能力さ別名能力収集だ」

「能力をコピーするの！、凄いつてミサカはミサカは驚いてみたり」

「でも、打ち止めの記憶読んだ時、白い奴の顔や詳しい情報が視れ
なかったんだが、これについては詳しく聞かない方がいいのか？」

「えっ、うん、あの人がそうしたんだと思うから私からは言えない
ってミサカは(ry)」

「ふ、ん、そいつの事慕ってたんだな、もしかして好きなのか？」

「ええっ…、うん、好きなのかな、あの人はね弱いんだよいっぱい傷ついて手の中の物を守れなかったばかりかそれをすくっていた両手もボロボロになっちゃってるのだからこれ以上は負担かけたくないし今度はミサカが守ってあげるんだってミサカはミサカは打ち明けてみる」

「そっか…」

その時よく見た事がある後ろ姿が

Side:アインハルト

今、私は、白髪灼眼の少年と一緒に琥那君を探している

「あの…、さっきの写真の子と家族みたいと言っていましたけど妹さん？」

「いやア、ちげエーよ、守りてエ存在みたいな感じだなア、おめーこそ写真のやつは誰なんだア？恋人かア」

「えっ、あ、いえ、違いますよ…、彼は管理局員で私のクラスメイトと一緒に格闘技を練習する仲であって…」

「へエ、管理局員ねエ、所属はどこなんだア？」

「確か機動六課だったと…、ってなんで聞くのですか？」
急に聞いてきたからつい答えてしまった

「あア、ああ、俺の知り合いに管理局のアンチスキルがいるからよ

オゝ気になつてなア」

「へゝ、そうなんですか…、それとさっきから気になっていたのですが首のそれは…」

私は首についたチョーカーを指差しながら聞いた

「あア、これはア、外部演算装置だア、オレは事故で脳をやっちまつてよオ、それで演算は外部に任せてあるつうことだア」
ちらりと少年の杖を見る

「大変ですね…」

その時

『おゝい、アインハルト』

急に念話が入ってきた

私がキヨロキヨロしていると

『後ろだ後ろ』

後ろを向くと少し離れた所に琥那君が…

「あつ、琥那君だ…」

「あア？、見つけたのか？」

少年が聞いてくる

「はい」

「さつさとオ行けエ」

「えつても、あなたの方は…」

「たった今見つけた」

「良かったです、ありがとございました」

と言って私は琥那君の方に向かった

S i d e : 琥那

念話を送り終わった時

「あつあの人だつてミサカはミサカは喜んでみる」

当たりを見渡したが人ごみで見えない

「良かったな、俺も見つけた」

「ありがとう、じゃあ行くねってミサカはミサカは手を振って駆け出してみたり」

そして、打ち止めが見えなくなった頃、アインハルトが俺の前にやってきた

「待っていてくれって言ったんだがな…」

すると少し落ち込んだように下を向いた

「あなたがなかなか帰って来なかったので…、心配で…」

(そか…、心配かけちまったな…)

「すまんな…」

「いえ、気にしてません」

笑顔で返答してくるアインハルト

「まあ、無事で良かった、まあ帰るか…」

「はい」

と俺はアインハルトを家に送り届けるのであった

39話（後書き）

KONA「今回はここまでです」

琥那「おい、短けーよ」

KONA「すみません…」

琥那「まあ、次回頑張ってくれ…」

KONA「次回頑張ってみます…、感想等書いて頂けたら嬉しいです」

琥那「感想ね〜、こんな駄文じゃ叩かれるだけじゃねえの？（笑）」

KONA「そうならないように頑張るよ、まあこんな文ですがまた読んで頂けたら嬉しいです」

四十話（前書き）

琥那「遅い！！、いつまでかかっているんだ？」

KONA「すまん…、趣味の自転車ばかりやっていて…、それにいい案が…」

琥那「ああ、確か自転車が趣味だったな…」

KONA「うん…、MTBで技したりして…」

琥那「趣味もいいがこちらでも頑張ってくれ、そんなんだから呆れられて感想を書いて貰えないんだぜ、まあこんな文ならどうせ叩かれるのが関の山だな…」

KONA「ひでー、酷すぎ…」

琥那「じゃあ、もっと更新を頑張ってくれ」

KONA「善処する…、ちなみに今回も誤字脱字や内容の齟齬があるかと思いますが暖かい目で見ていただけたら嬉しいです。」

KONA「いい加減にその定型文をやめないか？」

琥那「ノーコメントで…」

四十話

S i d e : 琥那

アインハルトを家に届け機動六課本部に向かっている所である
テレポートしても良かったのだが嫌な予感がしテレポートせず走っ
て向かっている
雨が降りだした

その時、近くの池から「ドブツン」と何かが水に落ちた音がしたの
で向かうと小さい女の子が溺れていた
俺はすぐに助け出しよく顔を見ると

「打ち止め…、おい、打ち止め、大丈夫か！」

「琥…那…君？…」

目がうつすら空き俺の名前を呼んだ

「ああそつだ、小鳥遊琥那だ、何があった？」

すると急に泣き出し

「お願いあの人をあの人を助けて…」

「何があつたか視るぞ」

俺が手を打ち止めの頭にのせ記憶を透視した

「わかった、後は俺がどうにかすり、打ち止めは機動六課本部へ座
標移動で……」

その瞬間

「いたぞ」

周りをみると数人のマシンガンを構えた武装した集団がいた
後ろには駆動鎧が二台

「誰か一緒にいるぞ」

「かまわない、始末しろ」

「ダダッダッ」

一斉に発砲してきた

俺は打ち止めを後ろに隠し反射を発動させた

その瞬間、マシンガンを構えたやつらは全員倒れていった

（流石に後ろに人かかえて駆動鎧を相手にするのはマズい）

俺は打ち止めを抱えベクトル操作でビルの屋上へ飛んだ

「大丈夫か、打ち止め」

酷く怯えたようだ

「だ、大丈夫、あなたもあの人と同じ……」

「説明している時間がない、機動六課本部に通信を入れた後、君を

座標移動で飛ばすから」

俺はケータイを取り出し通信をいれた

「もしもし、小鳥遊琥那だ」

『琥那君、どうしたんや？』

はやてに直線通信をいれたのだ

「今から1人、座標移動でそちらに飛ばします、保護してあげてください、それと後で詳しく説明しますが警備を最高レベルに、局員

全員待機にしてください」

『ちよつと待ってや、保護の件はわかったけど、警備の話はどうしたんや？』

「マシンガンや駆動鎧で武装した集団が街をうろついて俺らを攻撃してきた、だから今すぐにだ」

『わかった』

すると警報それも一番最高レベル赤が発動された音がした

「とにかく、そちらに飛ばします嚴重な保護をお願いします、俺はしないといけない事がありますのでそちらへは」

「わかった、気をつけてな」

通信をきり座標移動の演算を始めた

「琥那君、これ、あの人と連絡用に…」

打ち止めはケータイを渡してきた

俺は黙って受け取ると打ち止めを座標移動で飛ばした

遠隔透視で視るときちんと飛んだようだ

(さて、まずは駆動鎧を壊しに行くか)

ビルの下には二台の駆動鎧が

俺はビルの屋上から飛び降りベクトル操作を全開にし一台の駆動鎧を潰した

「なにっ、ちくしよ…」

もう一台の駆動鎧が変わった銃を構える

いや、銃と言っより砲台…

「レールガンか…」

「パシユ！」
レールガンを発射してきた

反射
「キーンッ」
「グシヤッ」

駆動鎧に右手肩に大きな穴が空いて動かなくなった

(ヤバいな、完璧に武装しまくってる…)

「ピーピーピー」

その時俺のケータイ型デバイスが鳴った

「はやてさん、なんですか？」

『今すぐ、アインハルトの家とヴィヴィオの家に向かって2人を保護してくれへんか？』

「なんで2人が関係するんですか？」

『理由は後で包み隠さず全て話すから急いで』

「了解」

2つの家の絶対座標を覚えていたのですぐに家に行く事ができた
まずはヴィヴィオの高町家へ、その次にアインハルトの家に

しかし結果は最悪なものだった

部屋は荒らされ2人の姿はなかった

俺の部屋のも入られたみたいで、パソコンがいじくられていた

ちなみに、きちんと手順を踏まないとデータが消去される設定にいたためデータは消えていたが流出は問題ないだろう、バックアップもあるし大した事じゃない

俺は本部に通信を入れた

「ダメだった、2人とも捕まっちゃった…」

『そか…、もう少しはようわかっとならば…』

「後悔はいい、俺は2人を探す、見つけた後に本部に向かう、そちらでも搜索をよろしく」

俺は言い終わると通信をブチッと切った
かなりイラついている

(どうしたらいい、2人の居場所なんか検討もつかない)

(待てよ…、打ち止め襲った奴らとアインハルトとヴィヴィオを誘拐した犯人は恐らく同じだろう…)

(そして、今、打ち止めが「あの人」呼ぶ人は犯人と接触しているはずだ…)

(なら…)

俺は打ち止めのケータイを取り出した

(しまったその人の名前を聞くの忘れた…、あん、1人だけ名前がない、でも一番電話かけてるやつみたいだな…、よし)

俺は電話をかけた

四十話（後書き）

琥那「また、酷い文だな……」

KONA「はっ……安心しろ、自覚している」

琥那「ちなみに理由は？」

KONA「いい案がなかったのですよ。この所寝れてないし」

琥那「おいおい、しっかりしてくれよ……」

KONA「善処する、とりま次回も出来る頑張るのでまた読んでいただけたら嬉しいです」

琥那「こんな駄文だが読んでやってくれ」

41話(前書き)

KONA「やっとできた…」

琥那「まあ、どうせ駄文だがな…」

KONA「ひでーな、オイッ」

琥那「もっと面白い展開ねエのかよ」

KONA「まあ、一応、Back to the future的な才チを考えていますが…、そこに繋げるまでが……」

琥那「なんか、凄そうだな…、まあ頑張れ」

KONA「まあ、出来る限りな、てなわけで今回も誤字脱字や内容の齟齬があるかと思いますが暖かい目で見ただけなら嬉しいです。」

琥那「いつも定型文だな…」

KONA「ノーコメントで…」

41話

Side: はやて

琥那君のレポートで運ばれた少女はレベル3程度の電撃使いの子
(何でこの子が…)
と指令室で考えていたその時

「隊長、聖王教会の禁書目録よりはやて隊長に直接通信です」
グリフィス君が言ってきた

「えっ、インデックスちゃんからかいな…、すぐ回して」
「了解」

『ええっと……、これで、繋がっているのかな？』

「繋がってるよ、ほんでどうしたんや？」

『散らばる力についての情報があつたんだよ』

「え？」

(散らばる力…、予言の…)

『それはね魔力なんだよ』

「魔力!?!、で、でも魔力を一点に集めるなんて、そんな術式なんて…」

『あるんだよ、でもその術式を組み立て完成し実行仕掛けたのは一人しかいないんだよ』

「だれなんや？」

『記録によると前の神より生まれし能力者を殺した世界最大の魔術師のアレイスター・クロウリーという魔術師なんだよ』

「そっ、それでその魔術師は…」

『記録では死んだ事になっているんだよ、けど、先ほどサーチ術式

に反応があつたんだよ』

「場所は？」

『詳しい事はわからない…、でもその術式は王を中心として発動させる術式なんだよ、だから…』

「ヴィヴィオとアインハルトか…」

『うん、今すぐに保護してほしいんだよ』

「わかった」

うちはすぐに琥那君に通信を入れた

でも結果は2人とも捕まつたみただった…

「2人捕まつたみたいや…」

『こちらからも探して見るんだよ』

「うん…」

Side：アインハルト

家に戻ってきた

私はイスに座つて少し休んでいた

（今日、琥那君、何か焦っていましたね…）

その瞬間、殺気がした

「動くな、両手を後ろに」

頭に銃を突きつけられた

私は言われた通りにすると

バインドではなく最先端の手錠を付けられ家の外に連れ出された

外にはヴィヴィオさんも、聞く同じように捕まえられたそうだ

車に乗せられ着いた先は広い道路だ

少し離れた場所には…

Side：一方通行

今、目の前には顔に刺青を入れた科学者「木原数多」と戦っている
打ち止めと出会ってから帰り道、打ち止めがケガしやがったから薬
等を買った帰りに車が突っ込んできてその時木原くんが現れた

「木イイ原くウウウウウウン!!」

俺は反射していたのにも関わらず殴られ蹴られ失神仕掛けていた
ふと前を見ると

「打ち止め……」

打ち止めがやつらに捕まっていた

(あいつウを逃がさねエと……)

俺は風のベクトル操作し打ち止めを少し離れた場所に飛ばした
「あゝあ、余計なあ事してくれちゃってさあゝあ、面倒だね」

その時

「あ、あなたは……」

少し離れた場所にさつき打ち止めを探している時に見た虹彩異色の
ガキともう一人虹彩異色のチビガキがいた

そして一人が木原の近くに行き

「隊長、リストにありました、アインハルト・ストラトス、高町ウ
イヴィオ、二名確保しました」

二人は少し怯えていた

俺は足にかかるベクトルを操作する演算を始めた

「よしい、よくやった、このガキ潰した後で連れ……」

「ドカツ」

俺は一気に横に止まっていた車に乗り込み運転手に金属パイプを突き刺し

「言っとおりイに走らせろオ」

一気にガキ共の近くに走らせ

「掴まれクソガキ共オ」

2人を掴み、車に乗せた

Side：木原数多

「あゝあ、また、面倒な事になっちまったなゝオイ、あれだあれあれ持ってこい」

一人がロケットランチャーを担いできた

「車に乗っちまったら風のベクトルは使えなくしたようなもんじゃねえかバカなやつだ」

俺は車にロケットランチャーの照準を合わせた瞬間、照準先に一人の白衣きた野郎が現れやがった

「さて、木原数多」

「あん、おうおう、ジエイル・スカリエッティさんよ、なゝに邪魔してくれちゃってんのかなあゝ」

「何も計画に必要な2人も一瞬に殺してしまうぞ」

「ちっ、おい、車の追跡はできつか？」

部下に訪ねた

「はっはい出来ます、今解析中です。」

「わかり次第言え!!」

「りっ了解」

い
い
(ふっ、ガキ2人助けてヒーロー気取ってんじゃねえよクソガキい)

41話（後書き）

琥那「また、微妙な展開だな……」

KONA「はっ……安心しろ、自覚している」

琥那「もっと頑張れよ」

KONA「善処する、次回も出来るだけ頑張るのでよんだり感想よろしく願いますね」

四十二話（前書き）

KONA「お待たせしました、短いですが更新します」

琥那「おせーよ……、なにしてた？」

KONA「ケータイが壊れたり、いろいろ用事があったり」

琥那「残念なやつだな……」

KONA「はっ……安心しろ、自覚している」

琥那「開き直ったよ……」

KONA「まあ、今回も誤字脱字や内容の齟齬があるかと思ひますが暖かい目で見えていただけたら嬉しいです。」

琥那「いい加減、その定型文やめろよ……」

KONA「スルーで」

四十二話

Side：一方通行

クソガキ2人を連れ行くあてもなく車を走らせていた

（ちくしょ…、このクソガキ2人をどこに隠せばア…、あのオ医者
んところはア警備が甘すぎるンだよオ）

「あ…、どこに向かっているのですか？」

昼間の虹彩異色のクソガキが急に聞いてきた

「あア？、別にイイ、特に行き先なんかねエよ、俺は俺の連れのガ
キを探してるだけだア、まそのついでにおめエらを適当な場所に放
り出すだけだア」

「なっなら機動ろっ……………」

ピロピロリー、ピロピロリー

ケータイの音が車の中に響く

画面には「打ち止め」と表示されていた

（いくらなんでもあいつがこんな時にノコノコ電話なんかかけるは
ずがねエ、あいつなら黄泉川ンとこに向かうはずだ、ならこの電話
は…、木原の野郎かア）

「あん！？」

「良かった、出てくれた」

（木原じゃねエ、民間人かア）

「誰だてめエ？」

「俺は管理局、機動六課の小鳥遊琥那三等空尉だ、おめーこそ、打ち止めが「あの人」と呼ぶやつであってんのか？」

「機動六課の小鳥遊琥那ねエ？確か…」

「「琥那君！！」」

「うるせエ、ガキども、あそこはアたしかロストログリア関連じゃなかったっけかア？、なんで打ち止めを知っている、打ち止めがどこにいた？」

（後ろで代わってだの、うるせエ）

「〇〇の公園の池に落ちてきたんだよ、そんで保護した、今は機動六課本部だ」

「わかった、俺もオ向かう、そこで引き渡せエ、それとお前に変われってよオ」

後ろで代われだの言っていたガキどもに代わる

「琥那君…、私です、アインハルトです」

「え、なんでアインハルトが…」

「ヴィヴィオさんもいます、捕まった所をこの方に助けてもらいました」

「そうか…」

ガキからケータイを奪う

「とにかくだア、交換だア、おめエは打ち止めを渡すウ、俺はこのクソガキ二人を渡す、それでいいかア？」

「お前が打ち止めが言う「あの人」で間違いなかったらな」

「チイツ、言ってるオ」

俺は勢いよく電話を切る

(機動六課かア…、あのカエル顔の医者がいる病院の近くだなア…)
俺は運転席に座っている野郎に

「オイ、いい医者を知っている、〇〇に向かえ」

「わっわかった…」

Side：琥那

電話が切れた…

(うわ、なんて口悪いんだ…、あんなやつが打ち止めの…、かわいそう…、ま、嘘もついてなさそうだしアインハルトやヴィヴィオもいたし、とりあえず行くか)

「機動六課本部へ」

「本部に行けばはやてさんがきちんと話してくれる、アインハルト

やヴィヴィオも保護出来る、作戦がたて…」

パスッ！！、キンッ

「うお〜っ」

（ん、なんか反射したか…）

後ろを振り向くと銃を構えた奴らが5人と一人右手を抱えて倒れている、その左右に駆動鎧が二台…

（サブレッサーか…、俺も反射に頼り過ぎて後ろを無視してたな…、二人が無事と聞いて安心しすぎた…、って「も」って…他にも反射使う奴なんて…）

「まあいい、おめえら、管理局員に発砲とはいいい度胸してんじゃん」

「とりあえず、寝とけ！！」

バチバチバチッ

電撃をくらわせると銃を持った奴らは全員、気を失う

駆動鎧はまだ動いている

「流石、最新の駆動鎧ってか…、めんどくせ…」

駆動鎧は、またもや変な形をした銃を向ける
ビューウー！！

レーザーのような光が発射される

反射

キンッ

するとそのレーザーが駆動鎧の右肩を突き抜ける
突き抜けた穴はきれいにあいている

「原子崩しね…、いつから能力者のまねっこするようになったんだ
」

（まあ、他人の能力コピーする俺はあまりいえないがな…）

「めんどくせー」

俺は右手にベクトル操作し駆動鎧に突撃する

四十二話（後書き）

KONA「短くてごめんです…」

琥那「それより文事態を謝れ、まあいいそれより次回はいつ更新だ？」

KONA「わかりません…、いろいろ忙しいので…」

琥那「出来る限り頑張ってくれよ…」

KONA「了解…、ま、次回も頑張って更新するのでまた読んでいただけたら嬉しいです。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7515t/>

とある魔砲の転生物語

2011年9月29日05時03分発行